

平 尾 遺 跡

2007年3月

大阪府教育委員会

序 文

古代の美原は、難波の津から大和への通り道にあたり、その大地には古代国家のさまざまな歴史が刻み込まれています。

このたび、主要地方道堺富田林舟渡バイパス建設工事に先立って、この地域を代表する遺跡の一つである平尾遺跡の調査を実施しました。その結果、飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけて、大規模な建物群や井戸、さらには当時の役人が使用していたと推定される陶製の硯や腰につける石製の帯飾りなどが発見されました。平尾遺跡は、旧美原町を中心に松原市、藤井寺市、羽曳野市などにひろがる古代丹比郡の中心的な役所跡ではないかと推定されます。

このような平尾遺跡の調査成果は、地域の歴史にとどまらず、飛鳥から奈良時代の具体的な地方像を知る上でとても重要な資料になります。

最後になりましたが、調査にあたりご協力を頂きました地元の関係各位をはじめ、旧美原町教育委員会、府立美原高等学校に深く感謝の意を表します。今後とも、文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 丹上 務

例 言

1. 本書は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した主要地方道堺富田林線舟渡バイパス建設に伴う平尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成14年度（調査番号02037）と平成15年度（調査番号03002）に実施した。平成14年度は文化財保護課調査第二グループ技師大楽康宏、平成15年度は同西川寿勝を担当者として実施した。遺物整理事業は、平成16年度を調査管理グループ技師竹原伸次・林日佐子・藤田道子、平成17年度を同林日佐子・西川寿勝・藤田道子、平成18年度を同主査三宅正浩・技師藤田道子を担当者として実施した。
3. 本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T. P. 値）を、座標値は国土座標第VI系による世界測地系座標で、方位は座標北を示す。
4. 本調査に伴う写真測量については、平成14年度は（株）GIS関西、平成15年度は（株）アスコに委託して実施した。写真撮影フィルムは各受託会社で保管している。また、遺物写真撮影の一部は（有）阿南写真工房に、出土した井戸枠の保存処理は（株）吉田生物研究所にそれぞれ委託して実施した。
5. 現地調査、報告書作成にあたって、以下の方々からご指導、ご助言、ご協力を得ました。記して感謝致します（五十音順 敬称略）。
赤松和佳 小笠原好彦 川口宏海 河野一隆 佐久間貴士 鈴木重治 田中清美 西山要一
船木佳代子 応丁道明 森本徹 森本晋 旧美原町教育委員会 堺市教育委員会 大阪府立美原高等学校
6. 本書の執筆・編集は西川が行い、一部は渡辺晴香・佐々木健太郎による。また、独立行政法人奈良文化財研究所光谷拓実氏には木製品の年輪年代に関する玉稿を、奈良大学大学院橋本俊範氏には鋳造遺物の蛍光エックス線分析成果に関する玉稿を賜った。
7. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、全額を大阪府都市整備部が負担した。
8. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は1,733円である。

目 次

序文 例言・目次

| | | |
|--|-------------|-----|
| 第 I 章 位置と環境 | (西川・佐々木) | 1 |
| 1. 地理的環境 | | |
| 2. 歴史的環境 | | |
| 第 II 章 調査計画 | (西川・佐々木) | 3 |
| 1. 調査経緯 | | |
| 2. 道路と遺跡発掘調査 | | |
| 3. 調査位置と地区割り | | |
| 4. 基本層序 | | |
| 第 III 章 73・74年度の調査 | (西川・渡辺) | 11 |
| 1. 調査概要 | | |
| 2. 検出遺構 | | |
| 3. 出土遺物 | | |
| 4. 平尾遺跡をめぐる論争 | | |
| 第 IV 章 今回の調査 | (西川・渡辺) | 29 |
| 1. 遺構の概要 | | |
| 2. 北部 1 の調査 (8 区) | | |
| 3. 北部 2 の調査 (7 区) | | |
| 4. 中央部 1 の調査 (7 区南・1 区) | | |
| 5. 下層遺構の調査 (7 区) | | |
| 6. 中央部 2 の調査 (2 区北半) | | |
| 7. 中部 3 の調査 (2 区南半・3 区) | | |
| 8. 南部 1 の調査 (4 区・02 年度調査区) | | |
| 9. 南部 2 の調査 (02 年度調査区・5 区・6 区) | | |
| 10. その他の調査 (9 区) | | |
| 11. 井戸の調査 | | |
| 12. 出土遺物 | | |
| 第 V 章 まとめ | (西川・渡辺・佐々木) | 107 |
| 実測遺物登録対照表 | | 109 |
| 付載 1 平尾遺跡出土ヒノキ井戸枠の年輪年代測定法による暦年代の測定 | (光谷・西川) | 113 |
| 付載 2 平尾遺跡出土鋳造関連遺物の蛍光エックス線分析成果 | (橋本・佐々木) | 117 |
| 付載 3 平尾遺跡出土木器の高級アルコール法による保存処理報告 | (沙見) | 121 |

挿 図 目 次

| | | | |
|-----------------------------|----|-----------------------------|----|
| 図 1 周辺遺跡分布図 | 2 | 図 12 73・74年度出土須恵器 (6) | 19 |
| 図 2 調査区地理環境図 | 4 | 図 13 73・74年度出土土師器 (1) | 20 |
| 図 3 道路開発と遺跡分布図 | 5 | 図 14 73・74年度出土土師器 (2) | 21 |
| 図 4 調査区位置図 | 7 | 図 15 73・74年度出土トリベ | 21 |
| 図 5 土層柱状図 | 9 | 図 16 73・74年度出土瓦 | 24 |
| 図 6 73・74年度調査遺構図 | 10 | 図 17 腰帯飾り | 25 |
| 図 7 73・74年度出土須恵器 (1) | 14 | 図 18 73・74年度出土中・近世遺物 | 26 |
| 図 8 73・74年度出土須恵器 (2) | 15 | 図 19 調査区位置図 (1) | 28 |
| 図 9 73・74年度出土須恵器 (3) | 16 | 図 20 調査区位置図 (2) | 30 |
| 図 10 73・74年度出土須恵器 (4) | 17 | 図 21 調査区位置図 (3) | 31 |
| 図 11 73・74年度出土須恵器 (5) | 18 | 図 22 調査区位置図 (4) | 32 |

| | | | | | |
|-----|-------------------------|----|-----|------------------|-----|
| 図23 | 調査区位置図 (5) | 33 | 図59 | 建物9-1~9-4平面及び断面図 | 74 |
| 図24 | 調査区位置図 (6) | 34 | 図60 | 井戸2-1・3-1平面及び断面図 | 76 |
| 図25 | 8区遺構図 (1) | 36 | 図61 | 井戸3-1井戸枠復元図 | 78 |
| 図26 | 8区遺構図 (2) | 37 | 図62 | 井戸1-1・3-2平面及び断面図 | 79 |
| 図27 | 建物8-1平面及び断面図 | 38 | 図63 | 井戸2-1井戸枠 | 80 |
| 図28 | 建物8-2平面及び断面図 | 39 | 図64 | 井戸3-1上層井戸枠 | 81 |
| 図29 | 建物8-3平面及び断面図 | 40 | 図65 | 井戸3-1下層井戸枠 (1) | 82 |
| 図30 | 建物8-4平面及び断面図 | 41 | 図66 | 井戸3-1下層井戸枠 (2) | 83 |
| 図31 | 7区遺構図 | 42 | 図67 | 今回調査出土打製石器 | 84 |
| 図32 | 今回調査出土軒瓦・道具瓦 | 43 | 図68 | 今回調査出土円筒埴輪 | 85 |
| 図33 | 建物7-1・7-3平面及び断面図 | 44 | 図69 | 今回調査出土須恵器 (1) | 86 |
| 図34 | 自然河川8-1出土墨書土器 | 45 | 図70 | 今回調査出土須恵器 (2) | 88 |
| 図35 | 建物7-2平面及び断面図 | 45 | 図71 | 今回調査出土須恵器 (3) | 89 |
| 図36 | 1区遺構図 | 46 | 図72 | 今回調査出土須恵器 (4) | 90 |
| 図37 | 建物1-1平面及び断面図 | 48 | 図73 | 今回調査出土須恵器 (5) | 92 |
| 図38 | 7区下層遺構・建物7-4平面 及び断面図 | 50 | 図74 | 今回調査出土土師器 (1) | 93 |
| 図39 | 2区・9区遺構図 | 52 | 図75 | 今回調査出土土師器 (2) | 94 |
| 図40 | 建物2-2・2-3平面及び断面図 | 53 | 図76 | 今回調査出土鏝型・フイゴ羽口 | 95 |
| 図41 | 建物2-4平面及び断面図 | 54 | 図77 | 今回調査出土瓦 | 96 |
| 図42 | 大土坑2-1~2-3平面及び断面図 | 55 | 図78 | 井戸2-1下層出土土器 | 98 |
| 図43 | 2区・3区遺構図 | 58 | 図79 | 井戸2-1下層出土木器 | 100 |
| 図44 | 建物2-7平面及び断面図 | 59 | 図80 | 井戸2-1上層出土土器 | 101 |
| 図45 | 建物2-8平面及び断面図 | 60 | 図81 | 井戸3-1出土土器 | 102 |
| 図46 | 建物2-10平面及び断面図 | 61 | 図82 | 今回調査出土中世遺物 | 104 |
| 図47 | 建物2-11・2-12平面及び断面図 | 62 | 図83 | 今回調査出土近世遺物 | 105 |
| 図48 | 建物2-13平面及び断面図 | 63 | 表1 | 井戸3-1出土部材計測表 | 81 |
| 図49 | 建物3-1・3-2平面及び断面図 | 64 | 表2 | 平尾遺跡関連年表 | 108 |
| 図50 | 建物3-3平面及び断面図 | 65 | 表3 | 実測遺物登録対照表(1)~(4) | 109 |
| 図51 | 建物3-4平面及び断面図 | 66 | | | |
| 図52 | 溝4-2出土平安時代の須恵器 | 67 | | | |
| 図53 | 4区遺構図及び断面図 | 68 | | | |
| 図54 | 溝4-1平面及び断面図 | 69 | | | |
| 図55 | 02年度調査区・5区・6区遺構図 | 70 | | | |
| 図56 | 今回調査出土硯 | 71 | | | |
| 図57 | 建物5-1平面及び断面図 | 72 | | | |
| 図58 | 9区出土鉄器 | 73 | | | |

図 版 目 次

| | |
|-------|-----------------|
| 図版とびら | 井戸2-1出土遺物 |
| 図版1 | 1・2・7・8区 |
| 図版2 | 3~7区・9区 |
| 図版3 | 井戸2-1・3-1・現地説明会 |
| 図版4~7 | 遺物写真 (1) ~ (4) |

第I章 位置と環境

1 地理的環境

平尾遺跡は大阪府中央やや南よりで、南河内の洪積段丘上に位置する。標高は海拔50m前後である。遺跡は東西・南北約600m四方、狭山池から流れ出す西除川と東除川に挟まれた段丘の東斜面にあり、東に東除川をのぞむ。この段丘には開析谷がいくつも刻まれ、一部はため池にされている。平尾遺跡内も起伏に富み、北側と南西が高まり、東側と中央にいくつかの谷が連なる。古代以降、高まりを削って谷を埋め、可耕地に造成したと考える。削平部分は黄褐粘土の基盤に多くの砂礫が混ざる硬い洪積層である(図2)。

2 歴史的環境

古代の官道である茅渚道は平尾遺跡付近を東西に横切ると考えられている。この道は飛鳥と和泉を結ぶ直線道である。古代、和泉の海岸には天皇の離宮や避暑地が営まれたことが、万葉集の記述などに記されている。茅渚道は難波宮から南下する難波大道とも結ばれていたらしく、遺跡は難波宮と飛鳥古宮の中間に位置する。また、遺跡や官道の南には陶器窯跡群が広がり、狭山池地区や陶器山地区では飛鳥～奈良時代に活発な須恵器生産があった。平尾遺跡の周辺を通して、都に須恵器などが陸運されたと予測できる。

649年、蘇我倉山田石川麻呂が謀反の疑いをかけられたとき、難波宮から出向いた鎮圧軍は黒山にさしかかった。ここで石川麻呂自害の報告を受ける。平尾遺跡の北側は現在も黒山の地名が残り、黒山は茅渚道にそった平尾遺跡の周辺と推定される。ただし、黒山の地名は遺跡の1km北方にある、黒姫山古墳が由来だと考えられる。黒姫山古墳は仁徳天皇皇后の黒姫を祀った墓である。この伝承がいつの時代までさかのぼるかは判然としないが、黒姫山古墳は現在の黒山のかなり北に位置する。

672年の壬申乱では、飛鳥からの大海人皇子軍と難波宮・高安城からの大友皇子軍が丹比道を通して、石川河原で戦闘したことが知られる。遺跡北方には丹比氏をまつる式内社丹比神社があり、丹比郡の中心とされ、周辺は丹比氏の本拠と考えられる。丹比氏は藤原宮・平城宮の宮門名にあてられる氏族として権勢を振った。丹比一族には遣唐大使や大藏卿として活躍したものもある。

遺跡周辺にある飛鳥～奈良時代の遺跡には郡戸遺跡・河原城遺跡・太井遺跡が知られる。太井遺跡からは銀・銅製品などの鍛造工房跡が発見され、郡戸遺跡では掘立柱建物群が発見されている。出土瓦が古代にさかのぼる丹比廃寺跡、黒山廃寺も知られる(図1)。

古代以降の周辺開発は明確でないものの、条里地割がよく残り、狭山池の灌漑とともに開発がすすんだと考える。また、中高野街道が遺跡西方を南北に貫くようになる。

ところで、「平尾」の地名は南北朝末期、永徳三年(1383)・元中五年(1388)の平尾合戦に初

出する。遺跡東方には南朝朝と推定されている平尾城があり、南北朝の統一間際まで南朝の抵抗が続いたことが知られる。

その後、永禄三年（1560）には三好長慶と畠山高政による平尾合戦、天正五年（1577）には松長久秀による正念寺（遺跡西方500mの阿弥陀寺と推定）焼き討ちなど、遺跡周辺は交通の要衝として中世を通じて注目されたことがうかがえる。

江戸時代の平尾は天領として管理され、約一千石の石高とされる。『五畿内志』には特産品として素麺の生産が記されている。明治後半から戦後まで、平尾・小平尾・菅生を中心として自治体平尾村を形成する。堺で生産されていた瓦・レンガなどの土取りがさかんだった、という。



図1 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 調査計画

1 調査経緯

平尾遺跡は1973年に府立高校建設に先立って現地踏査と試掘調査が実施され、奈良時代の遺構・遺物が確認されたことより、遺跡に定められた。同年9月、府立高校建設について協議を実施するとともに、高校用地東半分を発掘調査し、大型建物など42棟以上の建物や区画溝などを検出する。高校建設については北側部分に校舎を建設する方向転換が協議されたが、その後の調査で北側部分・西側部分にも連絡と遺構が続くことが明白となった。この段階で平尾遺跡は東西300m、南北150m以上に広がる大規模なものであることが判明した。

高校建設については用地買収や建設計画が進んでおり、建設計画は中止できない状況となっていた。そこで、遺構を極力損壊しないように、用地全体を厚く盛り土保存し、遺構の少ない北端に校舎を建設する方法が試みられた。さらに、北方の庭園遺構を現状保存し、プールの基礎を高め、地面を掘りくぼめない工法とした。

ところが、遺構保存を前提としたため、検出された遺構を掘削し、十分に調査することなく埋め戻され、高校建設が開始された。そのため遺跡の時期や性格を明快にすることはできなかった。

一連の調査で発見された遺物はおもに包含層出土のものである。それでもコンテナ約100箱となっていた。

その後、府立高校の南側で堺富田林線歩道設置事業、平尾小学校建設工事などの開発が予定され、断片的に発掘調査が実施された。歩道設置の調査は高校の南端を東西200m以上にわたって行われ、さらなる遺構の広がりが確認された。高校から約300m南の小学校建設予定地では、谷状の落ち込みを確認、遺構が連続しないことなどが確認された。

そして、2001年、遺跡西端を貫く国道309号線舟渡交差点の慢性的渋滞を緩和させるため、遺跡東北から南西にバイパス道路の建設が整いつつあった。翌年、309号線との取り付け部分を調査するとともに、予定地全体の試掘調査が実施され、府立高校の南側にも遺構が連絡と広がることが判明した。

試掘調査結果を受けて、道路予定地の全面調査を実施した。この調査によって、平尾遺跡の遺構の広がりや時期・性格などをほぼ把握することができたのである。発見された遺物はコンテナ約100箱におよぶ。

調査結果をふまえ、2003年2月に報道提供の後、現地説明会を実施し、同年3月には旧美原町立みはら歴史博物館で特別展示、4月には府立泉北考古資料館で遺物速報展示を行った。

発見された遺物のうち、ヒノキ板材の井戸枠について、年輪年代測定法で年代測定を試みた。704+ α 年の測定年代が判明した板材を含むこの井戸枠について、高級アルコール法によって、年輪とシラタの状況が明快になるよう保存処理を実施した。その他、井戸出土の斎申など、小型で脆弱な木器についても保存処理を行っている。また、トリベなどの鋳造関連遺物の実態を解明



図2 調査区地理環境図

するため、蛍光エックス線分析を実施した。以上の成果は本書巻末に付載した。

現地調査の段階で、遺構の保護を協議していた。当初、府立高校に近い部分に良好な遺構が残され、盛り土による保存が可能だと思われた。残念ながら、府立高校に近い調査区は遺構密度が低く、良好に遺構は残されていなかった。

2 道路と遺跡発掘調査

さて、平尾遺跡では府立高校建設と今回の道路建設に先立つ調査によって遺跡の概観をほぼ掴むことができた。同様に、周辺遺跡でも大規模な道路建設による調査によって、皮肉にも遺跡の実態解明に貢献していることが読み取れる。

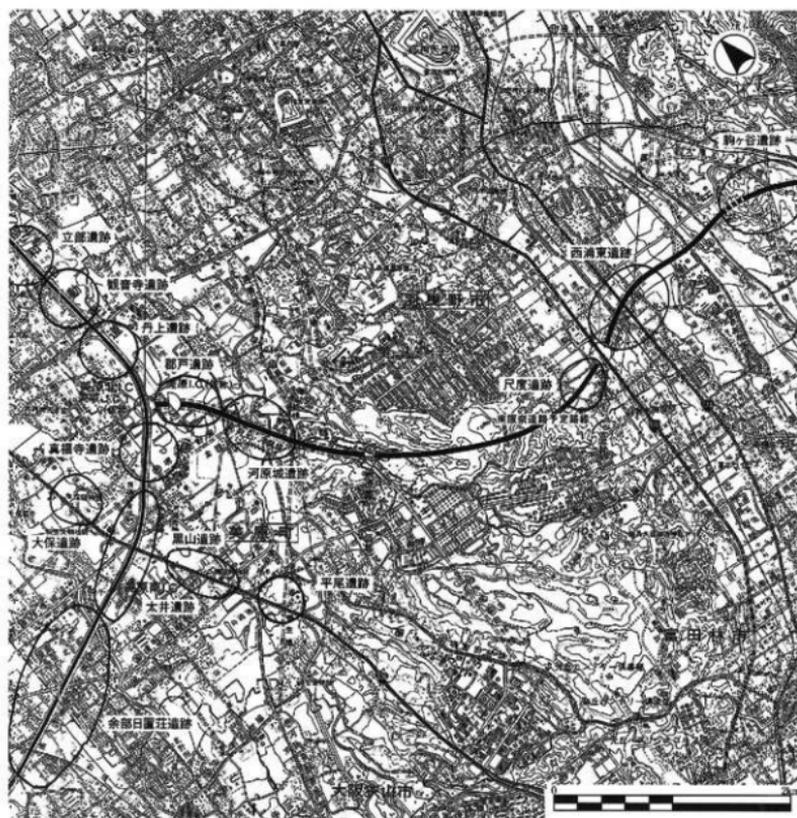


図3 道路開発と遺跡分布図

例えば、遺跡北方の阪和自動車道路建設では丹上遺跡・真福寺遺跡・太井遺跡・余部日置荘遺跡などが、調査対象となり、多くの成果をもたらせた。また、南阪奈道路建設では郡戸遺跡・河原城遺跡・尺度遺跡などが調査対象となった（図3）。

周辺ではあたかも、道路予定地地のみ、大遺跡が存在するようである。遺跡周辺地域の考古学的解明が開発の形状に左右されていることは否めない。今後、開発地外を含めた実態の解明が必要と考える。

3 調査位置と地区割り

平尾遺跡は現地調査段階で美原町教育委員会の協力を得ながら、調査を進めた。その後、2005年4月に堺市と美原町が合併した。現在、遺跡の所在地は大阪府堺市美原町平尾である。

さて、大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるように、大阪府発行1/10000地形図を基準として4段階の区分を実施している（図4）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。平尾遺跡はF6区内にある。

第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。平尾遺跡は5区内にある。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。今回調査地はF6-5-18E・18F・19E・19F・19G・20Gのいずれかにおさまる。

第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。例えば、今回調査区はF6-5-18E-5eなどと表すことができる。

特記すべきこととして、2003年度から座標値が国際基準に基づく新座標（世界測地系）に変更されたことである。これまでの調査で示されている座標値は南に約280m、東に約350mずれる。これにともなって座標値から導かれた地区割の表記も変更となった。

さて、調査地は南北に長く、一部は道路を挟んで分断されているため、地区設定とは別に、調査した順に地区を設定した。北から8区・7区・1区・2区・3区・4区となり、4区の南側は2002年度調査区があり、その南端に5区、さらに南に6区がある。5区・6区は建物移転に伴って追加調査として別発注された部分である。

加えて、2区の南に接する形で美原町教育委員会が水路敷設に伴う調査を今回現地調査と同時期に実施した。遺構が連続することから9区と標記している。

検出された遺構は航空測量によって1/20で迅速に図化を行った。航空写真測量は2002年度調査、1・6区、2～5区、7・8区の四回に分けて行った。3級基準点を設置し、そこから調査区周縁に4級基準点を設けて地区割を設定した。

4 基本層序

これまでの調査では表土（水田耕作土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山上に遺構が切り込まれた形で発見されている。よって、本調査は表土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めることとした。ただし、部分的に表土下に整地土層が確認される場合があり、この部分については遺物の有無を確かめながら機械掘削した。また、一部は近年の開発で厚く盛り土されている部分があり、客土を機械掘削で除去した。

盛り土は8区で1 m以上（柱状図A・B・Y・Z地点）、5・6区で約0.5 mある（柱状図S・T・U地点）。堺・富田林線建設と国道309号線建設の際に地上げされたものである（図5）。

耕土は水田の耕土で黒褐土、その直下に0.2～1 m程度の水田床土がある。7区南端と1区北部の傾斜地は北に厚く整地土層が見つかった（柱状図G・H地点）。整地土の中ほどには部分的に遺構面が形成されていたが、面としての同時性を判別することは難しく、自然の土砂崩落と建物の建て直しが錯綜した可能性もある（図5）。

概して、水田床土である遺物包含層は0.5 m以下で、砂利を含む灰褐土、黄褐土である。元来、地表面はもう少し高かったと考えるが永年にわたって、流出した結果だろう。したがって、地山に切り込まれた遺構も上面が削られ、下半部分しか残されていないと考える。特に、1区は水田開発によって地山の削平がはげしく、遺構が残されていなかったが、本来はこの部分にも遺構が続くものとする。さらに、この地区から円筒埴輪が発見されていることより、本来は周辺に高く盛り土された古墳が存在したことも示唆される。

その一方、8区の西半分は谷状に落ち込み、自然河川の堆積物が多くみられた。中世の遺物が混入することから、埋没時期は中世以降と考えられ、現状では完全に埋まりきり、旧地形を復元することが困難である。

地山は黄褐粘土で、8区のみ礫を多く含む。地山面は5区・6区がもっとも高く、海拔52.3 m前後ある。4区で急に北に落ちる斜面があり、その比高は1 m以上を測る。また、1区と7区はなだらかに北に傾斜し、8区の北端では海拔46.6 mとなる。また、8区西側は谷地形となり、自然河川の下面是海拔45 m程度である。このように、地山面は7 mあまりの比高差があり、北に傾斜していく斜面を形成する。

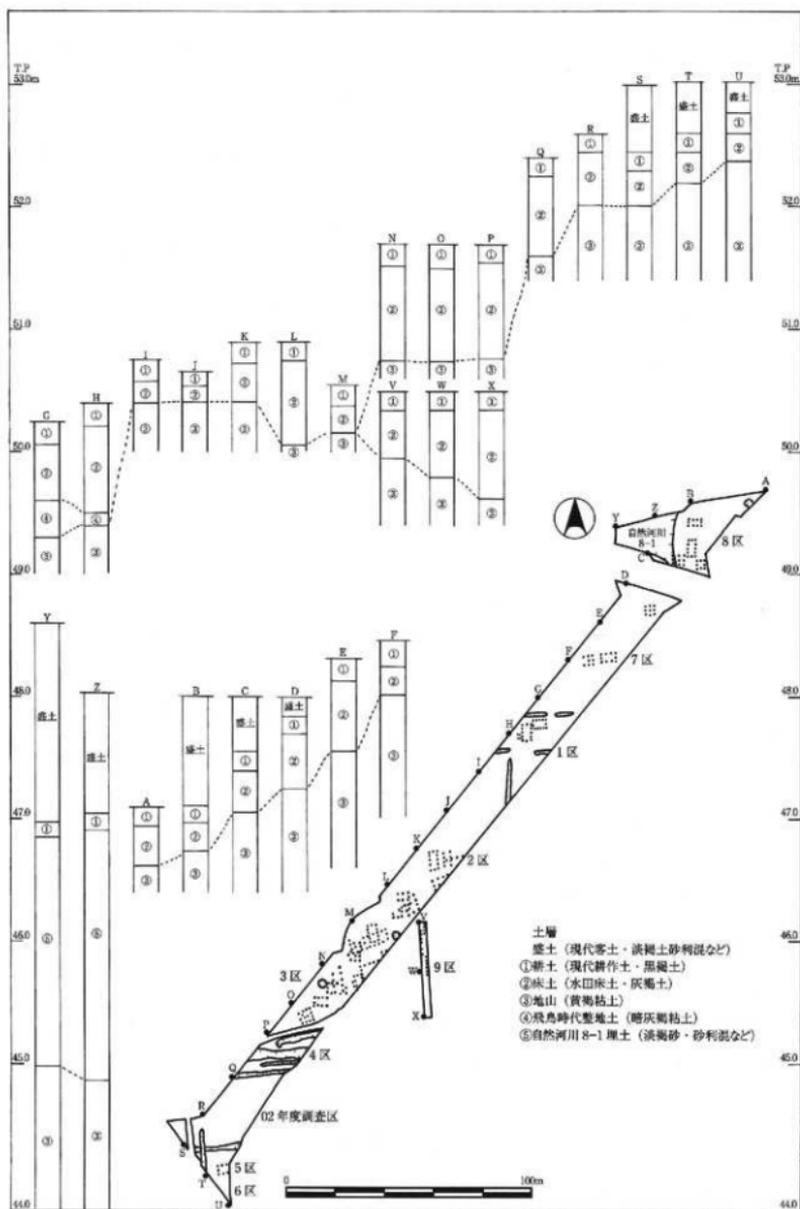


図5 土層柱状図

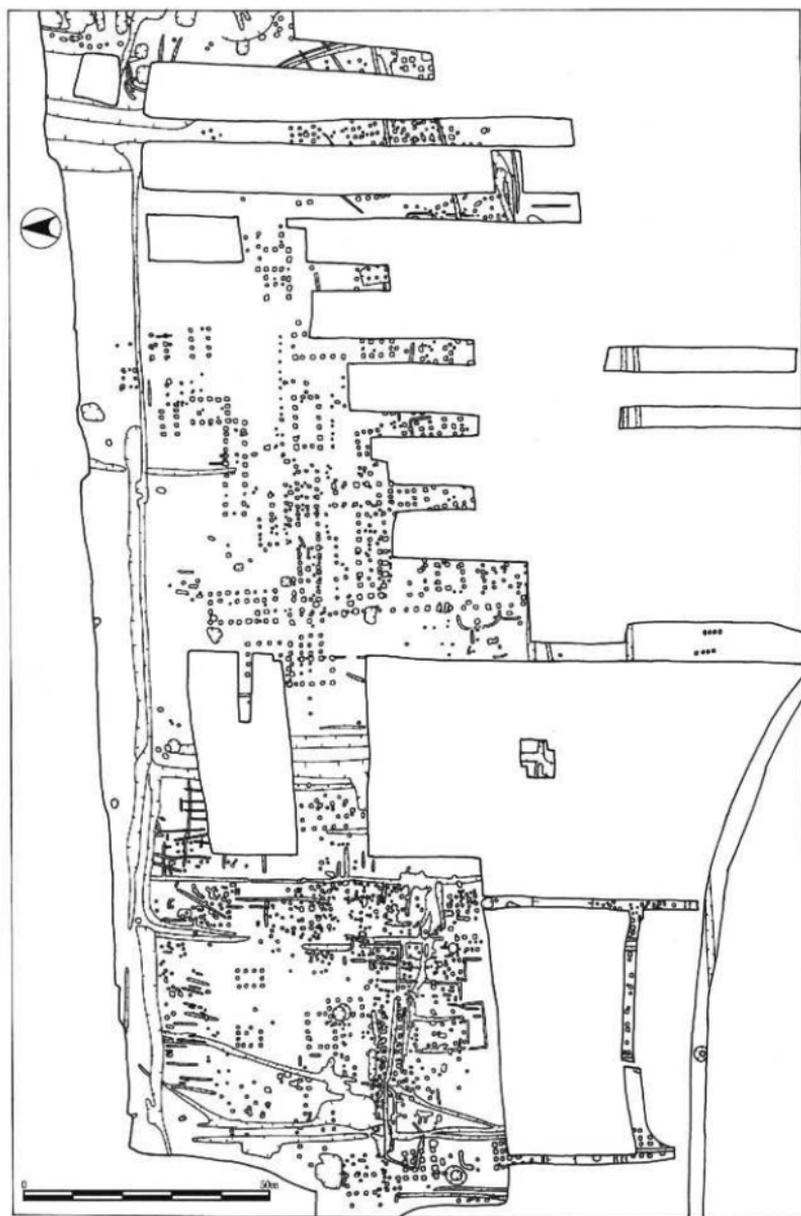


図6 73・74年度調査遺構図

第三章 73・74年度の調査

1 調査概要

1973年、府立美原高校建設にともない本府において遺跡の有無を確認する分布調査を実施、同年6月に校地内で試掘調査を行った。その結果、多数の遺構が認められ、平尾遺跡と命名された。9月より一次調査として校地東北部が発掘された。その結果、庇付き大型掘立柱建物や総柱建物群などとともに多数の遺物も認められ、律令期の大規模な遺跡であることが判明した。

調査成果をもとに開発位置を変更する目的で翌年から校地西北部について、二次調査が行われた。ところが、遺構は建設予定地全面に広がることが確認され、開発と遺跡保存の協議が続けられた。しかし、用地買収済みで、開校時期も決定していたため、代替地への高校建設は不可能という結論に達した。遺跡の破壊が最小限に食い止められるよう、遺構面は盛り土で覆われ、主要遺構の確認された部分を運動場とし、校舎位置をずらして美原高校が開校されることとなった。

1981年には高校南端を東西に横切る主要地方道堺富田林線で通学などの安全確保をはかるため、歩道設置が検討された。これに伴い歩道設置などにより開発される部分が追加調査された。この調査でも、遺構・遺物の広がり確認されている。

2 検出遺構

高校建設に伴う調査では東西240m、南北150mの範囲に10mおきに5m幅の南北トレンチを設定し、遺構の確認された部分を拡張して、トレンチを連結させていくという方法がとられた。当時30000㎡をこす大規模調査は数多く経験されておらず、効率的に発掘していく方法も模索段階だった。

発見された遺構は方位に規制された南北棟と東西棟、柵列・区画溝などである。区画溝は建物群を囲むように確認され、中央の南北溝で東西二分される。東の区画内からは42棟以上の建物が、西の区画内からは18棟と6棟の倉庫と考えられる総柱建物が発見された。

東の区画内は整然とした建物配列をとらず、同規模の建物が並ぶ形態でもない。いくつかの建物に重複関係があり、六世紀末から150年程度の存続ととらえられた。ただし、遺構を掘削して詳細な重複関係や出土遺物の検討がなされなかった。

西の区画では飛鳥時代の建物はなく、奈良時代に拡張されたと推定された。また、倉庫が多いことなど、区画の性格が東部分と異なることも指摘されている。

これらの建物群の性格については豪族の邸宅説、郡の役所としての官衙説、前者から後者への移行説などが示されている。豪族邸宅説ではこの地を本拠とする丹治氏の邸宅としている。また、遺跡が街道沿いに位置することから布施屋かその前身的な機能をもつ施設という推定もある。

いずれにせよ、この段階までの発掘調査では、建物群の切り合いや同時性を示す詳細な検討と、出土遺物による存続年代の検討が不十分で、遺跡の性格を結論付けることはできていない。

3 出土遺物

1973・74年度に行なわれた平尾遺跡北部の調査ではコンテナ約100箱の遺物が発見されている。大半は土器類で飛鳥・奈良時代のものである。今回、これらの遺物を再整理し、以前に凶化された遺物とともに、あらたに凶化した遺物を加え報告する。

残念ながら、以前に凶化された遺物の一部は展示などに抽出され、所在不明のものもある。遺物ラベルカードの劣化にもよる。ただし、今回調査の出土遺物と比較しながら、確認できたすべての遺物を観察しなおしたため、土器の総合的な組成や年代観などには影響しないと考える。

a 飛鳥・奈良時代以前の遺物

平尾遺跡北部の調査では旧石器・縄紋時代の石器・古墳時代後期の土器などが発見されている。数量的には多くない。今回、再整理によって100点あまりのサヌカイト原石・剥片を抽出した。いずれも時代を特定できるものではない。製品としての石器に石鎌が見られたというが、現物は確認できなかった。

古墳時代後期の遺物には須恵器・土師器がある。胴部が球形のハソウや短脚で一段透かしの高杯など五世紀後半の特徴をもつものなどがある。いずれも小片で遺構に伴うものはなかった。ただし、平尾遺跡北部に定着した集団がこの頃にさかのぼることを示唆する。

b 飛鳥・奈良時代の遺物

平尾遺跡出土遺物の大半はこの時期のものである。食器としての須恵器・土師器が大半で、少量の瓦がある。そのほか、腰帯飾りの一部と思われる2点の青銅製品がある。

『美原町史』第一巻によれば、平尾遺跡の土器の年代観は六世紀末ないしは七世紀初頭から八世紀中ごろまでの150年間のものであると説明されている。また、先述したとおり、南北の区画溝で分けられた調査区の西側部分は土器の特徴から新しい時期のものとされ、その地域は拡張されたものと解釈している。

しかし、今回の再整理によって、出土した飛鳥・奈良時代の土器はほぼ七世紀中ごろから八世紀前半までの100年たらずの期間に限られ、七世紀初頭までさかのぼる土器や八世紀中ごろまで降る土器はみられなかった。厳密に言えば、大半は飛鳥Ⅳ・Ⅴ（平城Ⅰ）段階の土器で、少量の飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階の土器と平城Ⅱ段階の土器があった。それは後述する今回調査区出土土器と同様である。

現在、平城Ⅱ段階の土器は720～730年代頃と考えられている。平城Ⅲ段階の土器は古・中・新段階に分けられ、古段階が740年前後とされている。そして、平城Ⅲ新段階の土器は聖武天皇の恭仁京から紫香楽宮・後期難波宮遷都期の750年代とされ、該当遺跡からは八世紀中ごろの良好な資料が提示されている。平尾遺跡の土器群は明らかにこれらよりさかのぼるものである。

その一方、飛鳥Ⅱ段階は大化の改新後の天智朝期と考えられ、明日香村の水落遺跡発見遺物が

指標とされている。さらに近年、前期難波宮北方から大化年代の紀年木簡と飛鳥Ⅱ段階の土器群がまとまって発見され、年代観をうかがえる。ところが、大化の改新直後に焼失した甘樫丘の蘇我邸宅関連遺跡と考えられている甘樫丘東方遺跡の焼土層から飛鳥Ⅰ段階の土器群が発見されるにいたり、飛鳥Ⅰ段階の土器は七世紀中ごろまで続く可能性も指摘されつつある。

平尾遺跡からは古墳時代的要素を残す飛鳥Ⅰ段階の土器はみられず、開始年代は七世紀中ごろ以降と考えられる。平尾遺跡北部が調査された頃は紀年資料を伴う良好な都城の土器が少なく、その年代観を厳密にできなかつたため、このような錯誤が生じたものと考えられる。

発見された須恵器には蓋杯・高杯・甕・長頸壺・短頸壺・こね鉢・平瓶・横瓶などがある(図7～12)。

杯蓋は端部に返りがなく頂部にもつまみをもたない杯蓋Hと、端部に返りがあり頂部に高いつまみをもつ杯蓋G、端部の返りは折り曲げるだけでやや扁平なつまみをもつ杯蓋Bがある。

杯蓋Hは小型化が進行したものである(1)～(8)。外面天井部は無調整が多く(1)、粗くヘラ削りするのみ、またはヘラ切りの痕跡をナデ消すのみのものがある。内・外面共に体部は粘土紐の痕跡が明瞭な段として残るものが多く、体部断面は厚く、口縁部のみ薄くナデ仕上げする傾向にある。法量は口径9.5～12cm、器高3～4.1cm程度で小さい。小型の杯蓋はもっとも小さなもので口径9.4cm、器高2.9cmを測る(1)。

口縁端部内面にわずかな返りをつくりだす杯蓋Gもある(9)～(25)。この形態には飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階に該当する小型のものと、やや扁平の宝珠つまみをもち、傘形の体部である飛鳥Ⅳ段階のものがある(20)～(25)。口径は13.5～16.2cm程度である。もっとも大きな杯蓋は口径19.0cmを測るものがある(25)。やや扁平の宝珠つまみをもち、傘形の体部は同じであるが口縁端部を折り返すだけの杯蓋Bも数多くみつかった(50)～(67)。口径は12.5～17.7cmとばらつきがみられ、もっとも大きなものは20.5cmを測る(67)。以上は飛鳥Ⅱ～Ⅴ段階に位置づけられ、つまみや体部の扁平度合いがすすみ、法量が分化する奈良時代前期以降のものはみられなかった。

杯身Gは、口縁部の内側に低い返りをもつものと(26)・(27)・(30)、口縁端部よりわずかに高く返りが立ち上がるものがある(28)・(29)・(31)～(33)。口径7.4～13.2cmで、外面底部は無調整か、粗雑にヘラ削りを施す。いずれも小型化が進む時期のものである。

杯身Hは底部から立ち上がりにかけて丸みが残りに、小型品が多い(39)・(49)。粘土紐巻上げ痕が明瞭で、底部外面は無調整か粗くナデ仕上げする。口縁端部は丸く、口径は14.5cmを測る。

高台をもたない杯身Aは底部からの立ち上がりが明瞭に屈曲するものと(34)・(36)・(37)・(40)～(48)、やや丸く仕上げるものがある(35)・(38)。後者は杯蓋の可能性もある。底部外面は無調整とヘラ削りするものがある。また、外面に火撃き痕のあるものもある(47)・(48)。法量は口径8.6～10.5cmの小型化が進むものと、口径11.5～14.5cmのものに大別できる。

杯身の多くは高台をもつ杯身Gである(68)～(115)である。これらは体部の屈曲の少し内側に高台がある奈良時代前期までの古式の形態が大半である。底部外面は丁寧に回転ヘラ削りさ

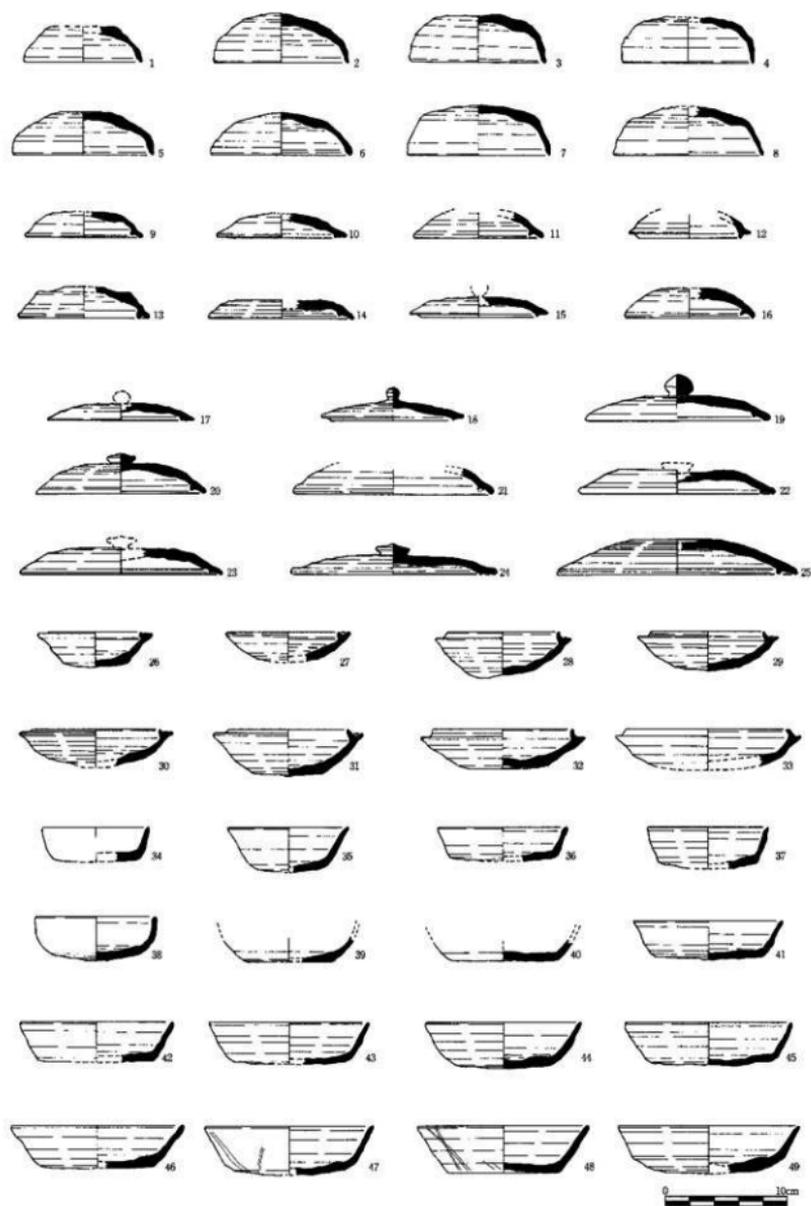


图7 73·74年度出土須惠器(1)

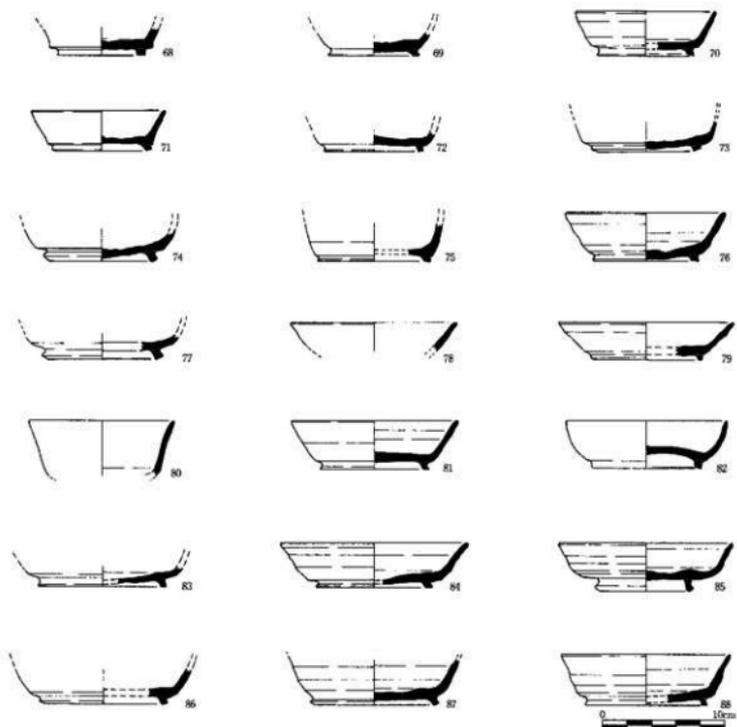
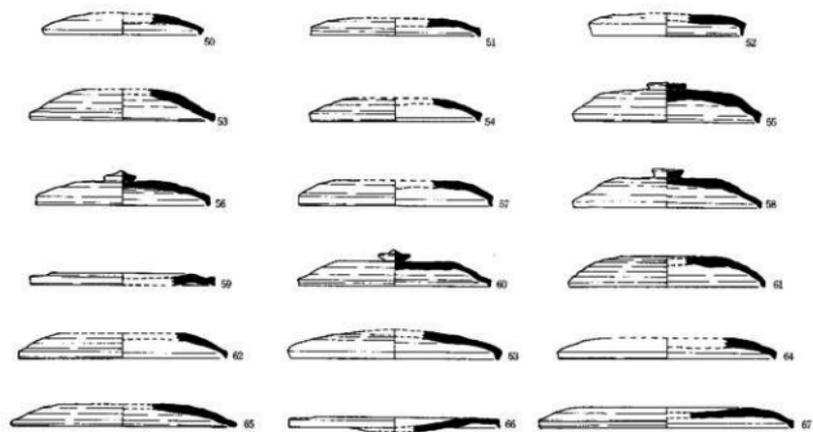


图8 73·74年度出土須惠器(2)

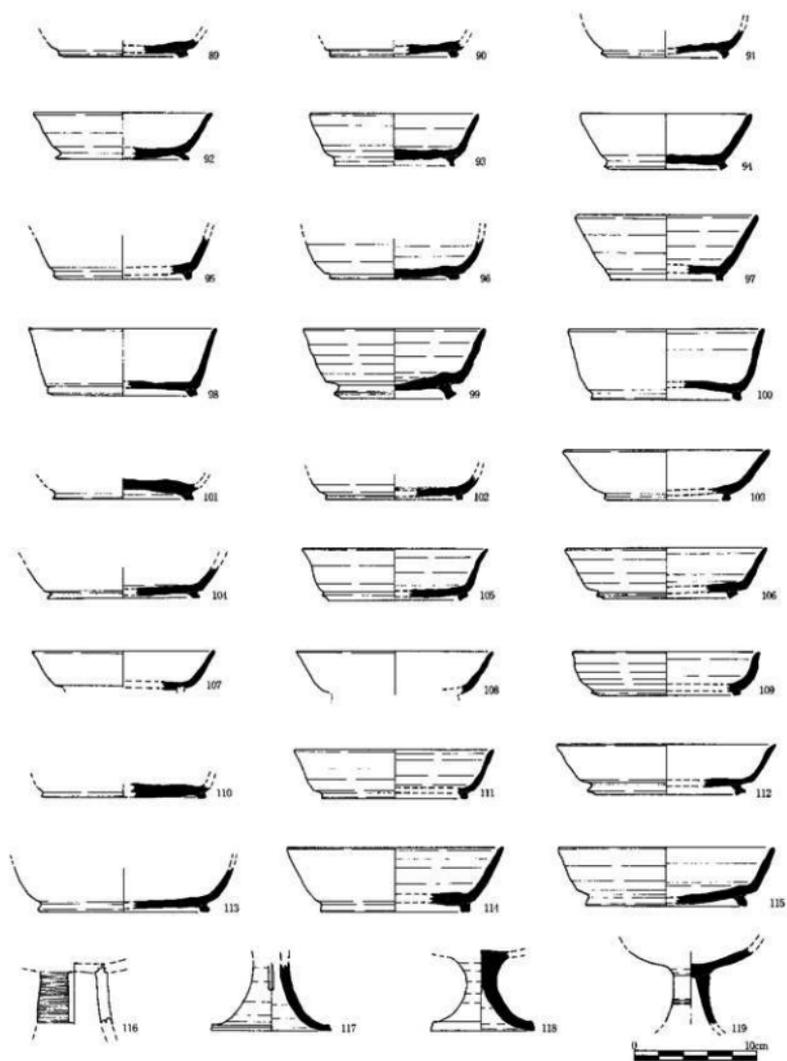


图9 73·74年度出土须惠器(3)

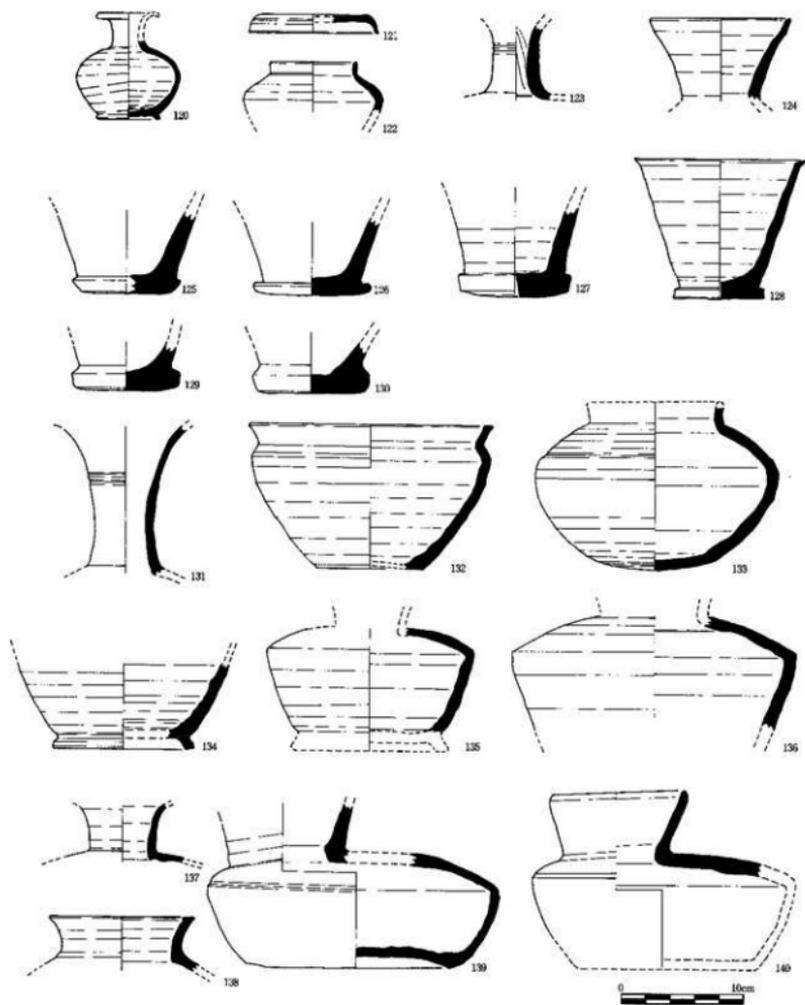


图10 73·74年度出土須惠器(4)

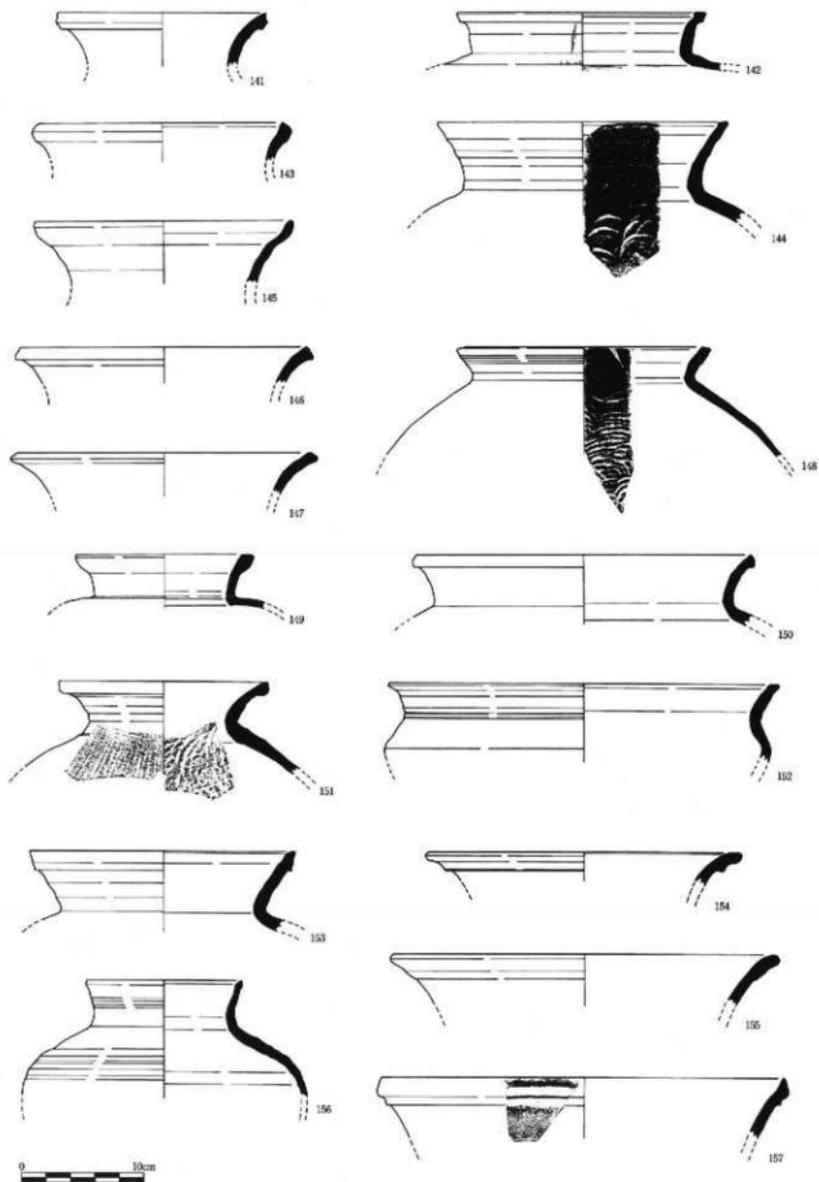


图11 73 - 74年度出土须惠器 (5)

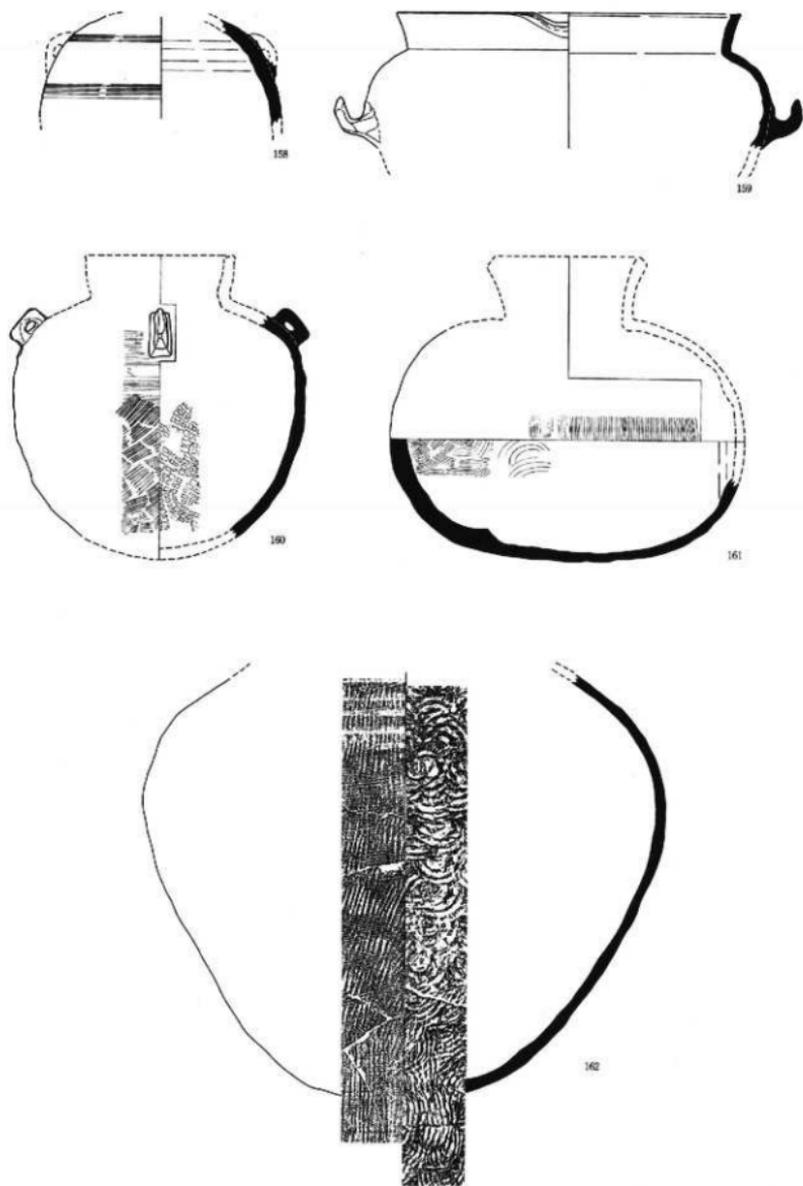


图12 73·74年度出土須惠器(6)

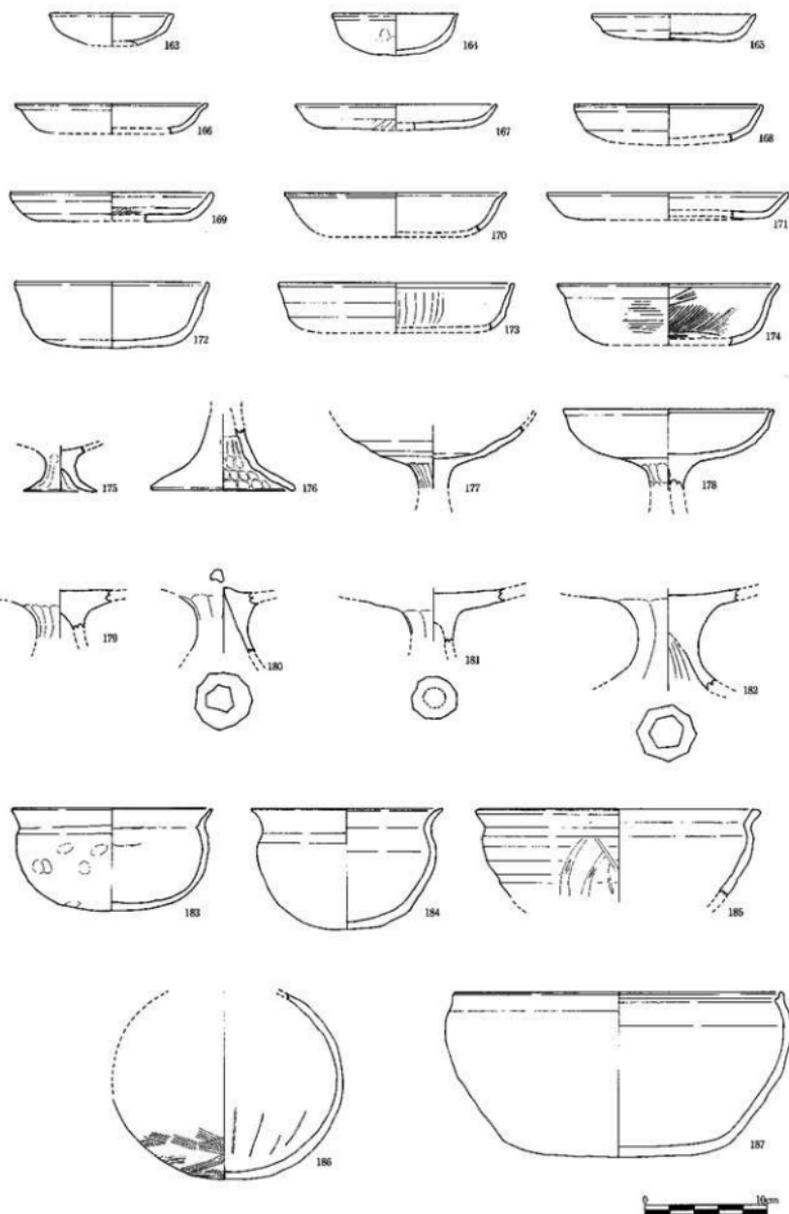


图13 73·74年度出土土師器(1)

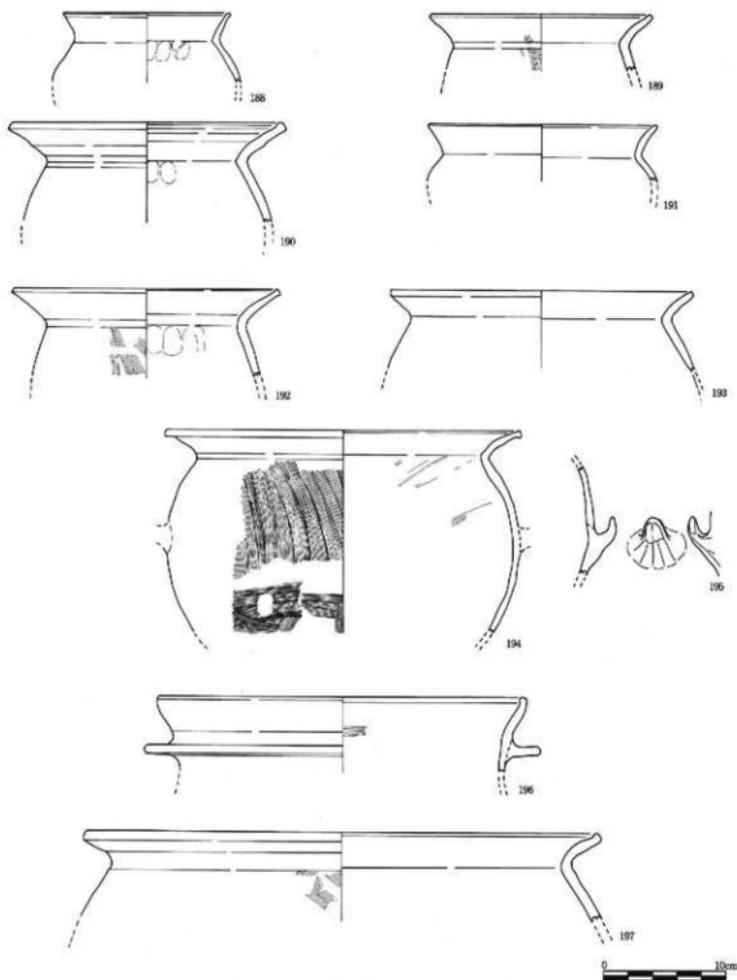


図14 73・74年度出土土師器(2)

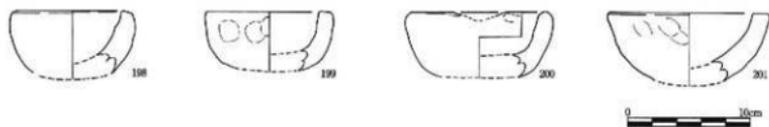


図15 73・74年度出土トリベ

れたものが目立ち、不定方向に粗く削られたままのものも少量ある。法量は口径に対して器高が低く、口縁が開くものが目立つ。口径は10.7～17.6cm、高台径は6.4～13.7cmと大小の差がある。

高杯は脚が貧弱で低いものが多い(116)～(119)。脚部に透かしがあるものは痕跡化が進む(116)・(117)。いずれも杯部は欠損し、脚部径がわかるものは10cm程度である。高台付きの食器が定着することにより、高杯は飛鳥Ⅳ段階以降ほとんど見られなくなる器種である。

こね鉢は体部をラッパ状に開き、口縁端部は平らに仕上げる。円形の厚い底をもつものと(125)・(127)・(129)・(130)、薄い底のものがあり(126)・(128)、いずれも底面がよく磨かれている。底部中央に穿孔のあるものもある(127)・(128)。底径は7.2～8.8cmである。

壺は長頸壺と短頸壺に分けられ、短頸壺は皿状の蓋が伴う(120)～(123)・(131)～(136)・(156)・(158)・(160)。

小型の長頸壺である壺Lは高台をもち、内・外面を丁寧にナデ仕上げする。高台の内側はヘラ削りの痕が残される(120)。高台径は5.0cmを測る。

長頸壺の頸部は中央に沈線をもち、口縁部をラッパ状に広げる(123)・(131)。体部が算盤玉形に屈曲し、底部は強く踏ん張る高い高台をもつ(134)～(136)。

小型の短頸壺である壺Aは体部が算盤玉形に強く屈曲し、1cm程度の直立する口縁をもつ。口縁端部は丸みを帯び、口径6.8cmを測る(122)。大型の短頸壺である壺Aは底部がやや丸く、短い口縁部を直立させる(133)。また、口縁部をやや開き気味に立ち上げ、端部を内側につまみ出す壺もある(156)。この短頸壺は口径12.6cmを測る。

広口壺は平坦な底部から斜め上方に開く体部をもち、わずかに屈曲する頸部から短く開く口縁部となる(132)。口縁端部は平らに仕上げ、内外面共に丁寧にナデ仕上げされ、体部の外面にはヘラ削りの痕跡が残る。口径19.5cm、器高12.7cm、底径8.6cmを測る。

壺蓋は薄く平たい天井部で、口縁部を下方にほぼ直角に屈曲させる(121)。口縁端部は外側にまげ、わずかに平たくする。天井部の外面にはヘラ削りのあとが明瞭にみられ、口径10.4cm、器高1.5cmを測る。

肩部に環状の耳をもつ壺は長胴形で外面にカキ目・あるいは沈線をめぐらせる。耳は装飾化がすすみ、粘土紐を貼り付けただけのもの(158)、方形に削りだすものがある(160)。

平瓶は大型で高台がない(139)・(140)。一つは底径14.9cmを測る。飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階以前の小型で丸みをおびた平瓶はなく、Ⅳ段階以降にあたる大型で角張った形態を示す。

横瓶は長胴形に作り出した胴部の横方向に頸部を接合し、本来の頸部を円形の粘土板でふさぐ。外面は本来の下半部に格子目タタキ痕が残り、上半部はタタキの後にカキメ調整する。内面は同心円タタキが前面に残る(161)。

平瓶・横瓶の口縁部は口縁端部を平らにしてわずかに内側に折り曲げ、口径11.6cmを測るもの(138)、口縁部をラッパ状に開かせ、端部を丸く仕上げるものがある(124)。

甕Aは大型から小型まで数多く見られた。全体を復元できるものは少なく、口縁部の特徴ごと

に図化した(141)～(155)・(157)・(162)。大半は屈曲部を明瞭に短く折り曲げ、口縁部はラッパ状に開く。口縁端部は真上につまみあげて尖らすもの(143)・(145)、外側に平らな面をもつもの(146)・(150)・(151)、折り返して厚くするもの(153)・(154)・(157)、などがある。外面は格子目タタキ・内面は同心円紋タタキで、外面上半部をたたいた後にナデ消すものもある。

体部の左右に舌状の握手をもつ甕Bは、短く開く屈曲部で口縁部に片口をつくり出し、口縁端部を平らにする。体部は内外面ともにタタキ成形後、ナデ消す(159)。口径27.8cmを測る。

土師器は杯・皿・高杯・高盤・鉢・壺・甕などがある(図13・14)。摩滅や表面の風化で調整や形態の細部が観察できないものがほとんどである。

皿Aは平らな底部で器高は低い(165)～(171)。口縁端部はゆるくS字状に屈曲するもの(166)・(170)、端部を真上につまみ上げて尖らすもの(168)、端部を丸く仕上げるもの(166)・(167)・(169)などがある。内面に粗い放射状暗紋をほどこすものもある(169)。大半は調整不明である。口径からみて13cm以上の小型(165)、15～16cmの中型(166)～(169)、それ以上の大型に大別できる(170)・(171)。皿Aは飛鳥Ⅴ段階以降、奈良時代に普遍的に見られる器種であるが、平尾遺跡ではあまり多くない。

杯は底部の平らな部分が小さく緩やかに屈曲してほぼ真上に口縁端部をつまみ上げる特徴の杯Cがある(163)・(164)・(172)～(174)。口縁端部は段をなすもの(163)、わずかに屈曲させるもの(164)などがある。外面は指頭圧痕が残る。口径10.0cm、器高3.4cmを測る大型の杯は口縁部をやや開き気味に仕上げ、端部を屈曲させる(173)。内面には粗い1段の放射状暗紋がある。大型品には丁寧で密に二段の暗紋を施すものもある(174)。高さが低く平底化が進んだこれらの杯は飛鳥Ⅲ段階以降産量が進み、奈良時代にはほとんどなくなる器種である。

高杯は杯に手づくねの脚をつけた小型品と(175)～(178)、皿に柱状の脚をつけてヘラで多角形に面取りした大型の高盤とよぶべきものがある(179)～(182)。小型品は丸みを帯びた丁寧なつくりの杯部に対し、脚部は指頭圧痕が明瞭に残る粗いつくりである。この器形は奈良時代にはほとんど見られず、飛鳥Ⅱ～Ⅲ段階のものと考えられる。

一方、高盤は皿に棒状の脚部を接合するものと粘土紐で筒状につくった脚を接合するものがあり、面取りは丁寧で8～11面に及ぶ。この器形は奈良時代になって流行するもので、藤原中期にわずかにみられるものは概して脚が低い特徴である。今回発見された高盤はいずれも脚部が低く、飛鳥Ⅳ～Ⅴ段階のものと考えられる(179)～(182)。

甕は体部が球形で短い頸をもつもの、薄つくりで長い頸をもつものがある。短く屈曲させて頸部をつくり出す小型の甕は体部に指頭圧痕が明瞭に残り、口縁端部を丸く仕上げるものと(183)・(184)、平らに仕上げるものがある(185)。前者は火にかけて煮沸容器にされた可能性が高い。後者は土師質だが、須恵器に同じ器種があり、体部には火焼き痕跡がみられる。焼きがあまり須恵器の可能性もある。

器壁が0.5cm以下で均一に薄くつくりだした壺は口縁部が欠損しているが、丸い体部をもつ。

外面にはハケメ痕が残る (186)。

鉢は平らな底部をもち、口縁部は内側にすぼむ。外面は横方向にナデ、屈曲部の痕跡とする。口縁端部は内側に段があり真上に尖り気味となる (187)。口径は26.3cm、器高は13.3cmを測る。

甕は小型で屈曲部が明瞭な長胴甕の甕Aと (188) ~ (193)、大型で体部が球形で両側に舌状の握手をもつ甕Bがある (194)・(195)。甕Aは外面が煤け、粗いハケメが施される。内面には指頭圧痕が明瞭に残り、口縁部はナデ消す。口縁端部は外側に平らな面をもち、真上に尖らせるものがあり (188) ~ (190)・(192)、摩滅により不明なものも多くある。

屈曲部に鈔をもつ長胴甕は口縁部が直立気味で、外面が煤ける (196)。口縁端部は丸く仕上げ、やや内側に曲げる。内面体部にハケメ痕が残る。口径29.2cmを測る。

トリベは土師質の小型品である (198) ~ (201)。器壁は厚く、外面は指頭圧痕が明瞭に残る手づくね製である。厚みはほぼ一様で1.8cm前後を測る。口径は8.4cm (198)、10.0cm (199)、11.0cm (200)、12.8cm (201)を測る。蛍光エックス線分析により銀の溶解に使用されたことが判明した。

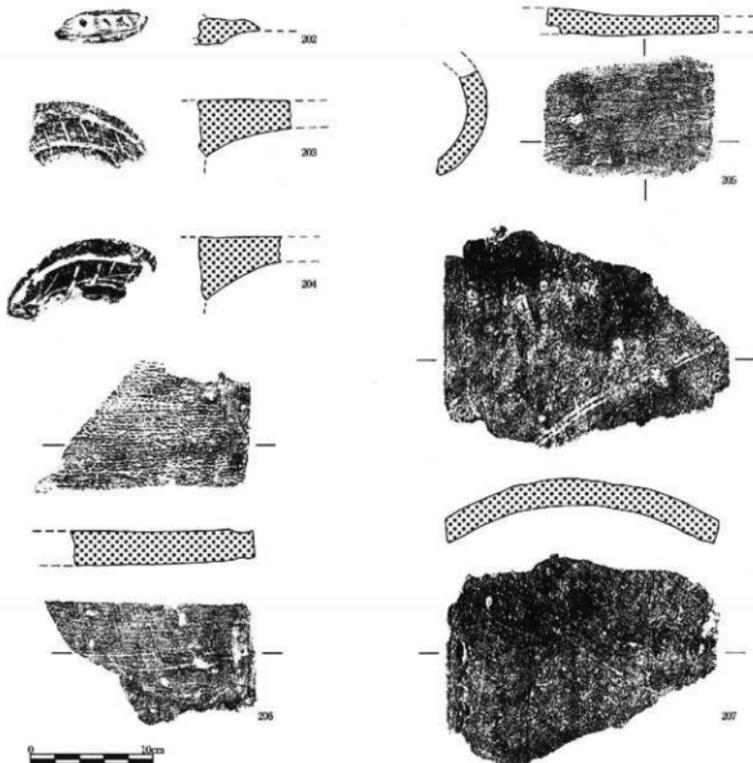


図16 73・74年度出土瓦

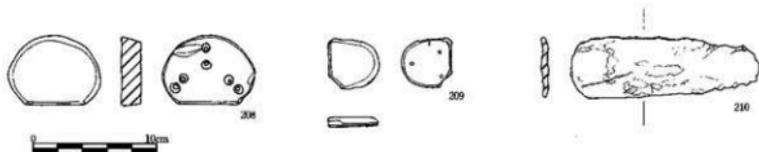


図17 腰帯飾り

太井遺跡でも奈良時代に銀を溶解したトリベが発見されている（付載2 117頁参照）。

瓦は碎片ばかりで、検出された建物の数に比べて少ない。ただし、桶巻きつくりの横骨痕跡や縄タタキなど、古代の瓦の技法がみられ、中・近世の薄くて一枚作りで離れ砂が表面につくものと峻別できる。平瓦・丸瓦・軒瓦・道具瓦がある。平瓦に対し、丸瓦は少ない（図16）。

平瓦は凸面に縄タタキが明瞭に残るもの、ヘラで削りだすもの、これらの瓦を丁寧にナデ消すものがある。凹面は布目尻痕が残り、端部はヘラ削りで形態を整える。角を鋭く削りだす1枚は厚さが2.8cm程度である（206）。両辺をヘラ削りする1枚は幅22.0cm、厚さ2.2cmを測る（207）。

丸瓦は玉縁をもつものと行基葺きのものがある。凸面を縦方向にヘラ削りする1枚は凹面に布目痕が残り、厚さ1.5cmを測る（205）。

軒平瓦は珠紋が並ぶ。磨耗が激しく詳細は不明である（202）。

軒丸瓦は瓦当紋様がわかるものがない。瓦当部が外れ、接合部をヘラで凸凹にする1枚は丸瓦部の厚さが2.3cm（203）、もう1枚は2.1cmを測る（204）。

青銅製品は腰帯飾りや皮ひもなどの蛇尾と考える部品である（図17）。1点は2枚のD字形の板を重ね、三方向に青銅の小さな目釘でかしめる（209）。表側の板は端部を折り返して丸く仕上げ上げる。長辺・幅とも2.0cmを測る。もう1点は両端を丸く形成した板状の青銅製品で、折り返しや目釘穴などはない。最大長7.5cm、最大幅2.5cmを測る（210）。

b 飛鳥・奈良時代以降の遺物

平尾遺跡北部の調査では鎌倉～室町時代の遺物と江戸時代の遺物が発見されている（図18）。調査当時の南河内地域は中世・近世土器の年代観が明瞭ではなく、取り上げられた遺物が全体を示すものか定かではない。ただし、試掘調査当初は中世寺院跡の可能性も考えられていたので遺物が注意されていたようだ。

中世遺物には中国製青磁碗、瀬戸焼、土師質土器皿、瓦器碗・皿、瓦質土器羽釜、丸瓦・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦などがある。年代は鎌倉時代から室町時代末までの幅をもつ。

近世遺物には肥前磁器、肥前陶器、京焼系陶器、堺・明石系播鉢などがある。江戸時代末にあたる一九世紀代の遺物が目立ち、一七世紀代の遺物が少量含まれる。

中国製青磁碗は削りだし高台で、高台径5.8cmを測る（216）。青磁碗の体部外面には簡便化された蓮弁紋をヘラで削りだすものもある（217）。いずれも一五世紀代のものだろう。

確認できた瓦器はいずれも和泉型である。瓦器皿は口径7.6cmを測る(211)。瓦器椀は高台が形骸化した型式で暗紋も簡略がすすむ(212)・(213)。高台径は4cm程度である。一三世紀代のものだろう。

瓦質土器羽釜は口縁部がほぼ直立し、端部は平らに仕上げる(226)。外面は鈔の直下よりヘラ削り調整を施し、口縁部に段を作りだす。口径25.0cmを測る。一六世紀代に降ると考える。

丸・平瓦は一枚つくりの小型品があり、外面に離れ砂が残る中世期のものである。軒瓦も中世の特徴を示すものの、その紋様は硬直化しており、室町時代まで降るだろう。

軒丸瓦(228)は内区に尾の長い左巴紋と外区に密な連珠紋によるもので、連珠はやや大振りで26個を数える。瓦当径は13.0cmを測る。

軒平瓦(229)は連珠紋を突線で囲む瓦当紋様で、凹面には布目痕、凸面にはヘラ削り痕が残る。瓦当厚は3.4cm、平瓦部の厚みは1.6cmを測る。

近世の遺物はいずれも、現代の耕土で表面採集が可能な摩滅した小片ばかりで、これらの遺物の出土をもって近世の集落を想定できるものではない。

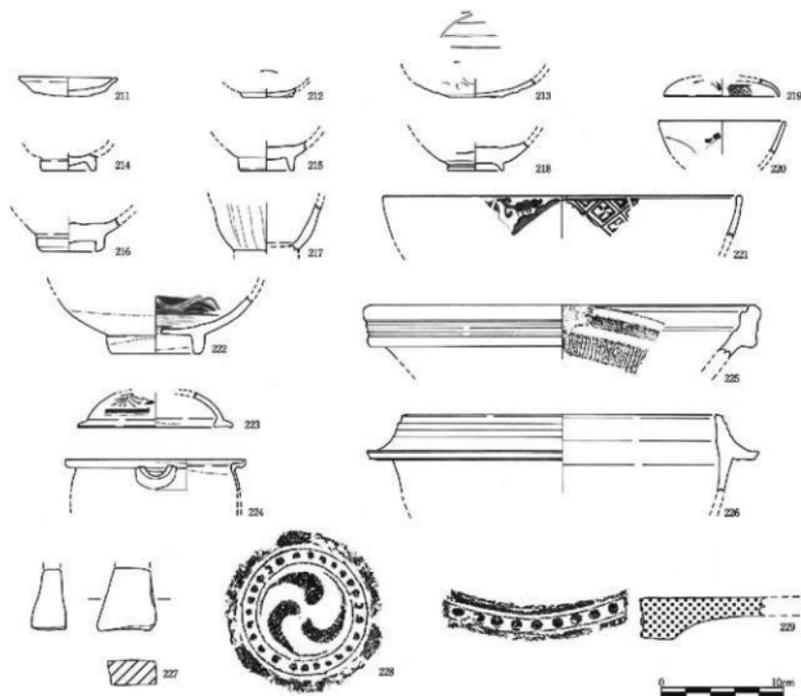


図18 73・74年度出土中・近世遺物

肥前磁器は碗と碗蓋がある(215)・(218)～(221)。碗は焼きが悪く、透明釉がうまく定着していない(215)。体部は欠損し、外面の紋様などはわからないものが高台は高い。いわゆる「くらわんか茶碗」は高台径4.6cm(218)と口径10.1cm(220)を測るものがある。広東碗の蓋は外面に寿字が描かれる(219)。この器種は一八世紀末から一九世紀初頭に流行する。大碗は口径28.8cmを測り、外面は牡丹、内面は四方襷紋を描く(221)。焼継ぎ痕がある。一九世紀代だろう。

肥前陶器は碗と鉢がみつかった。呉器手碗は高台径5.8cmを測る(214)。一八世紀後半だろう。刷毛目紋鉢は見込みに蛇の目釉ハギを施し、高台部には離れやすくするための釉を塗る(222)。高台径は7.0cmを測る。一八世紀中ごろのものか。

京焼系陶器は行平(224)と蓋(223)がある。蓋の外面は錆とイッチンで装飾する。口径12.4cmを測る。土鍋か行平の蓋である。行平は蓋受け部を除き、灰釉を施す。口径14.4cmを測る。

堺・明石系すり鉢はすり目を8本単位の櫛で入れる(225)。口径30.9cmを測る。

砥石は方形で灰白色を呈す砂岩質の粗研ぎ用で、四面共によく使用されている(227)。最大長5.0cm、最大幅4.7cm、最大厚2.7cmを測る。遺構上面出土のため年代は不明である。

4 平尾遺跡をめぐる論争

遺跡が調査されるにつれ、その実態に注目があつまった。調査が終わった1975年には古代を考える会が「平尾山遺跡の検討」を開催し、調査担当者、古代史研究者間で討論が行われた。このとき、平尾遺跡建物群の性格について直木孝次郎氏・藤沢一夫氏によって官衙としての機能が推定された。ただし、山尾幸久氏は豪族の本拠地から官衙への移行についても示されている。また、直木氏は官衙的性格が強いとしながらも、遺跡が街道沿いに位置することから布施屋かその前身的な機能をもつ施設という推定をする。

その後、1979年に吉田晶氏は『古代の地方史』3で、平尾遺跡が多治比真人の本拠地とする説をまとめた。遺跡存続年代を六世紀末～八世紀中ごろまでとし、官衙としてはその前後の空白が不自然と述べる。また、同年に刊行された『考古学研究』の論文に小笠原好彦氏は本遺跡について、七世紀初めから中ごろまで存続の60棟を官衙あるいは豪族の邸宅とし、それ以外は先行する集落、西側の八世紀代の建物群も後続する集落と解釈した。

山本彰氏は1981年の「平尾遺跡調査概要」で、一連の調査成果について、官的要素が強いことは否定できないとまとめている。

1999年に刊行された『美原町史』第一巻で直木孝次郎氏は平尾遺跡の調査成果を詳述するものの、豪族邸宅説と官衙説を紹介し、その結論は遺構・遺物の詳細な検討が不足することをウィークポイントとして、論争が盛り上がり欠ける原因と説明、白説はもちこんでいない。

以上、平尾遺跡の性格については各説出揃った感がある。その論点は遺構の性格を明確にする遺物と年代観などの詳細な検討であり、本報告による遺構の検討にもちこされる結果となった。結論は官衙的性格を色濃くする成果を得たが、詳細は第V章で検討したい。

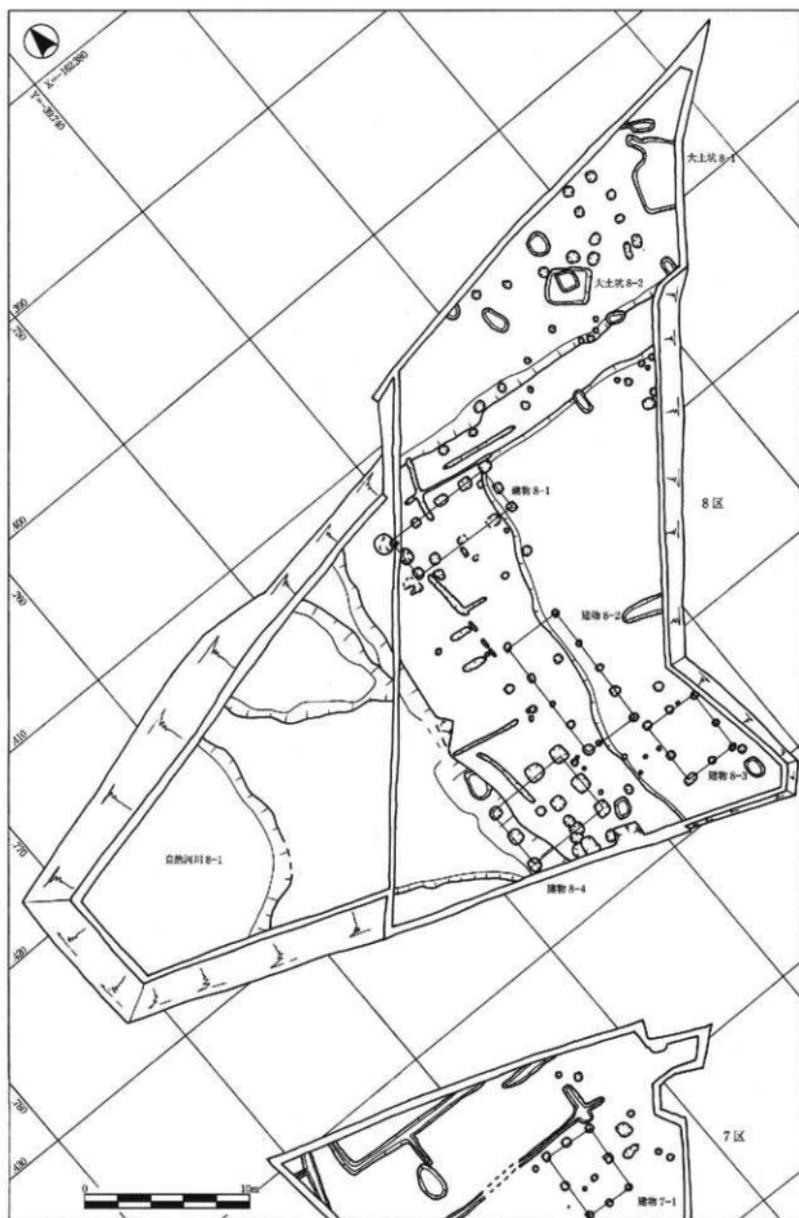


图19 調査区位置图(1)

第IV章 今回の調査

1 遺構の概要

今回調査区は北東から南西に長さ約330m、幅約20mに及ぶ細長い形状を示す。遺構は飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・土坑・溝などで、区画溝をはさんで一定のまとまりをみせる。このまとまりは北部・中部・南部に三大別することが可能で、地形的にもその境目が谷となる。さらに細かくみれば、それぞれのまとまりは二分できる。以上より、報告は北部1（8区）・北部2（7区）、中部1（7区南・1区）・中部2（2区北半）・中部3（2区南半・3区）、南部1（4区・02年度調査区）・南部2（02年度調査区・5区・6区）、その他（9区）の8箇所に分けておこなう。

北部1は西半が自然河川による落ち込みで谷になる。東の高い部分には四棟の掘立柱建物と土坑、溝などが発見された。

北部2は北側に3棟の掘立柱建物と南側に2棟の掘立柱建物が発見された。北側は中世以降の木田耕作に伴う唐鋤痕跡が多数見られた。南側は南北溝と東西溝による区画がなされ、斜面を整地しなおす部分もある。整地土の下からは建物や溝などの痕跡が確認されたが、上面建物との時期差は明瞭でなく、遺構面をなすというより、客土や流土が徐々に積みあがった様相だ。

中部1の北側と西側は削平により、遺構が残存しなかった。削平をまぬがれた南端と調査区外に美原町教育委員会が設定した南北約40m幅約3mの9区によって、遺構が存在していたことが確認できる。発見された建物は10棟以上に及ぶ。また、井戸2-1はくりぬきの杉材を井戸枠とし、中から土師器や木器などが多数発見された。

中部2は北側が削平され、西側も削平が著しい。建物は11棟確認された。遺構面上層からは石製腰帯筋りや獣脚円面硯などが発見された。

井戸3-1はヒノキ板材を井桁状に組んだ重厚なもので、埋め土から須恵器・土師器が発見された。板材を年輪年代測定法で分析した結果、シラタが残るもっとも新しい材で、伐採年代が706+ α 年という結果となった。

南部1は北に低くなる斜面地で四条の東西溝が確認された。もっとも北側の溝4-1はかつて石組み溝だったと考える。その他の溝は中世の土器なども含まれており、後世に掘りなおされ、坪境の区画溝に利用されたようだ。溝群の南側は平坦地となるが削平を受けており、遺構はみられない。

南部2は南北溝と東西溝に画され、掘立柱建物が1棟発見された。遺構面上層から蹄脚円面硯や軒瓦の発見があり、遺跡の南端にあたるこの地域も飛鳥～奈良時代に重要な建物が展開したと考えられる。

発見された掘立柱建物は主軸が東西南北にほぼ一致するB期の建物と、軸が振れるA期の建物に分けられる。A期の建物はB期の建物に切られ、A→Bの順に建て替えられたと考え、時期区分した。ただし、同じ時期の建物にも切り合いがわずかにみられ、同時性は実証できない。

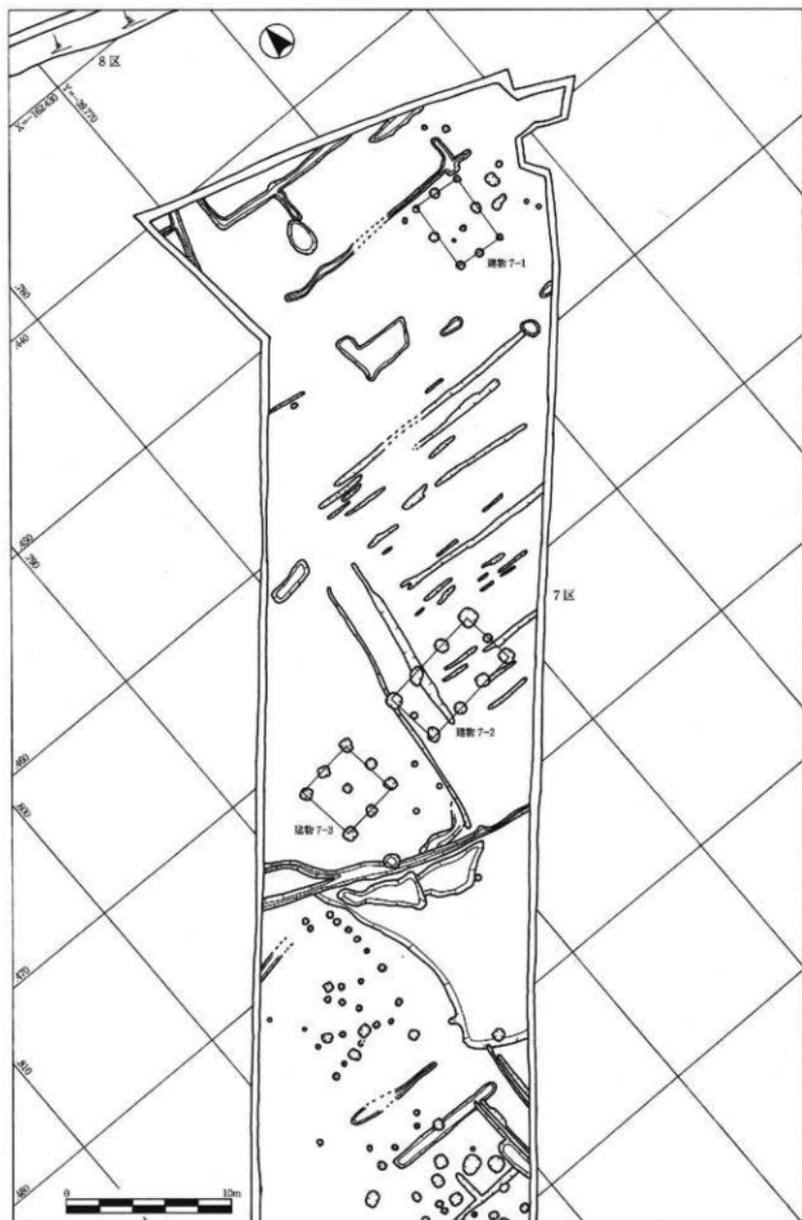


图20 調査区位置図 (2)

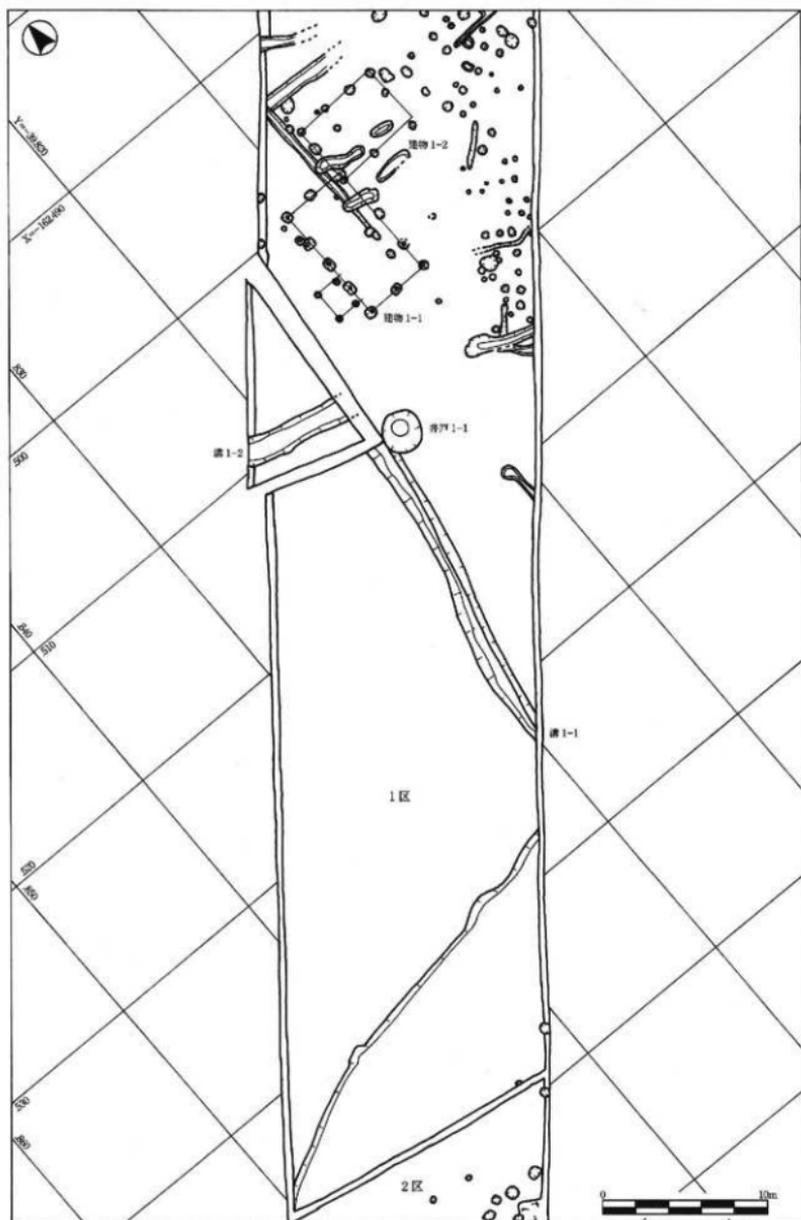


图21 調査区位置图 (3)

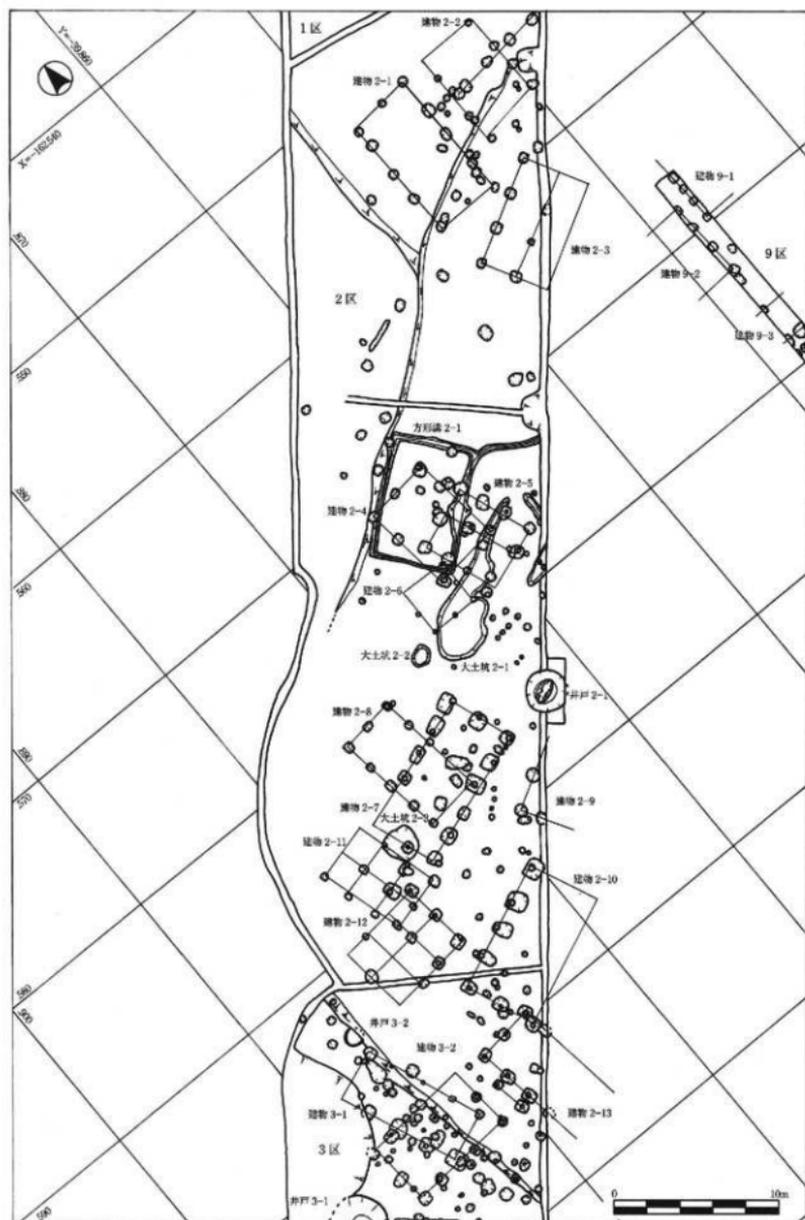


图22 調査区位置图 (4)

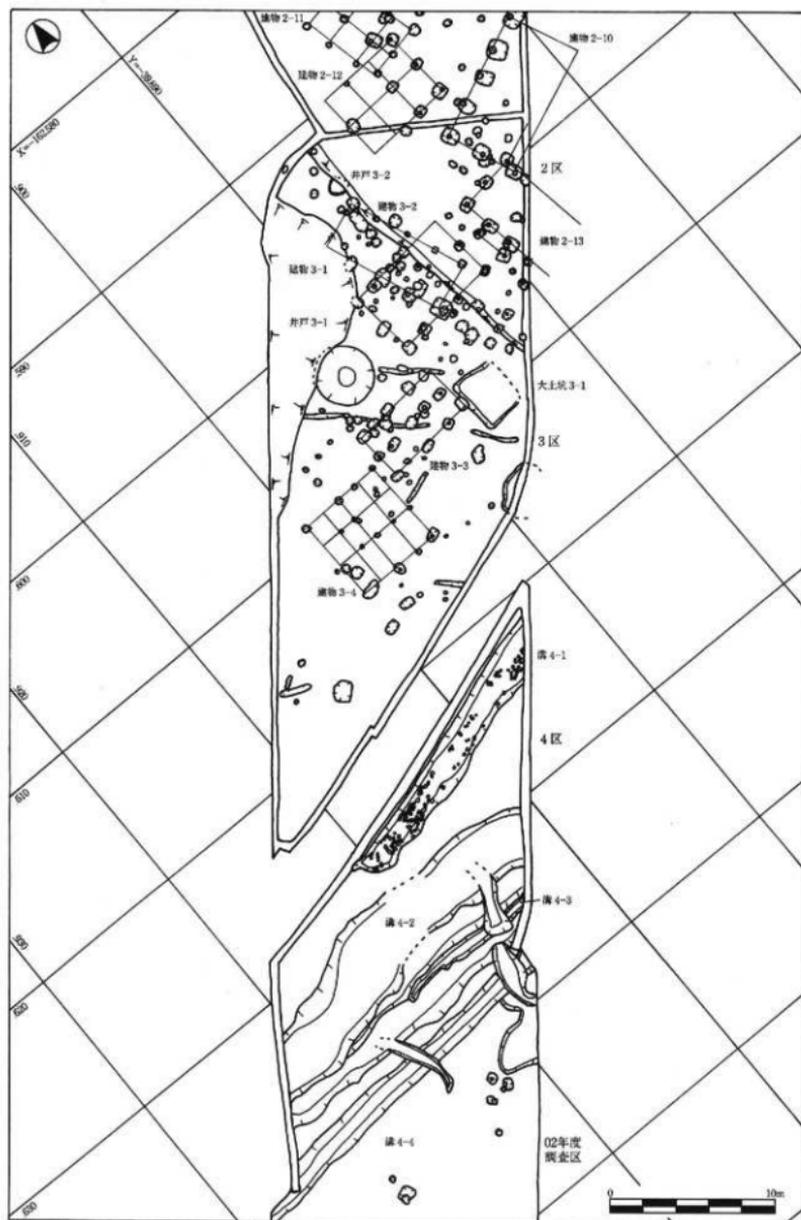


图23 調査区位置图 (5)

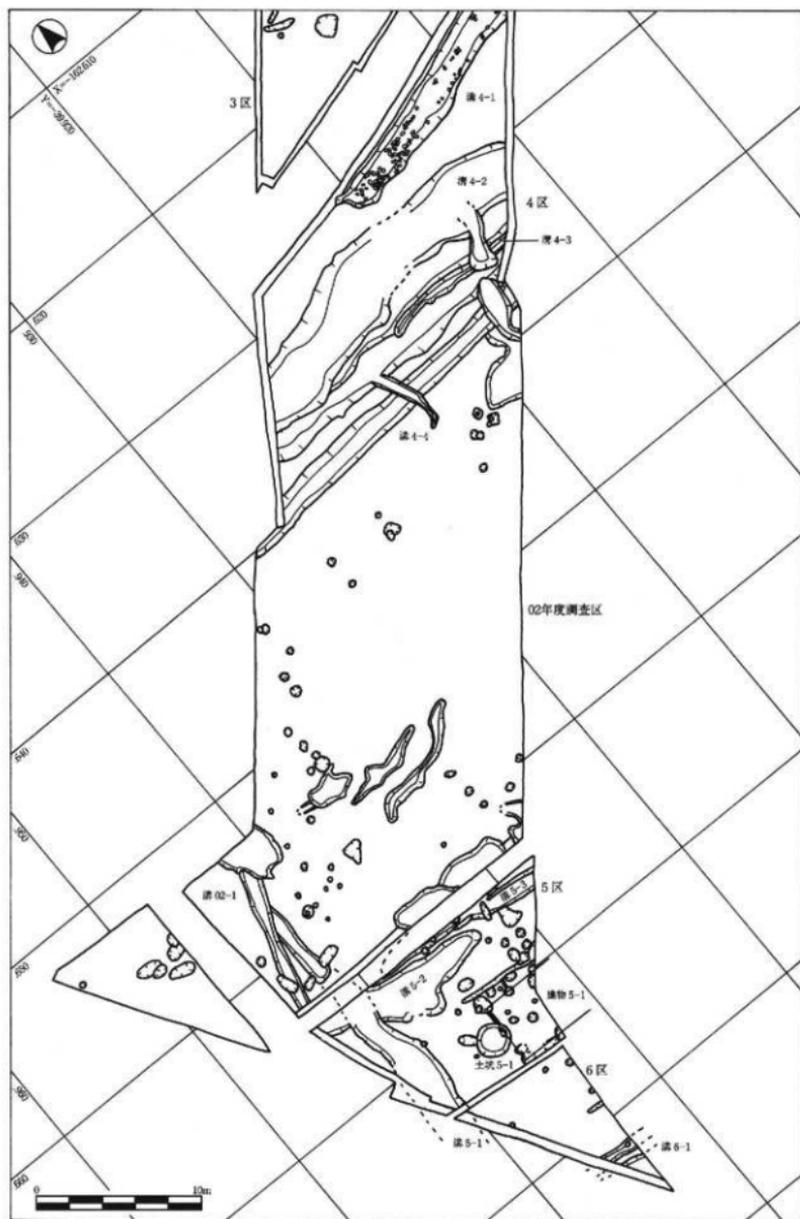


图24 調査区位置図(6)

2 北部1の調査(8区)(図版1)

北部1は今回調査区のもっとも北東隅に位置し、地山の海拔が47m程度ともっとも低い。西半は73・74年度調査区を望む位置にあり、遺構が連続すると予想していたが、自然河川による落ち込みが確認された。しかし、東半は四棟の掘立柱建物と土坑、溝などが発見された。以下に、遺構の詳細を示す。

自然河川8-1は幅25m以上、深さ2m以上の谷状の落ち込みである(図19・25)。埋め土は上層が淡褐色の粗い砂礫で下層は握り拳大の円礫を含む青褐色の砂礫層である。ところどころ、青灰粘土のラミナがみられ、流水と滞水が繰り返されたと考える。遺物はほとんど含まれないものの、上層からは飛鳥・奈良時代の土器に混ざって鎌倉・室町時代の瓦質羽釜・すり鉢、瓦器椀などが発見された。埋没時期が推測できる。その一方、埋め土下層には中世遺物はなく、少量の飛鳥・奈良時代の土器が含まれるにとどまった。墨書土器が2点含まれた。東からの流れ込みと考える。

掘立柱建物8-1は自然河川8-1の東岸に位置する2×4間の東西棟である(図27)。主軸はほぼ真東を向いており、B期と考える。桁行は約1.8m間隔、梁間は約1.7mを測る。柱穴は一辺0.6~0.7m程度の隅丸方形で深さは0.2m程度しか残されていない。掘り方は灰褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは1つしかない。しかし、抜き取り状の穴が明瞭なものも2つしかなかった。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦や土器の散布もほとんどみられなかった。

掘立柱建物8-2は8区の中央、自然河川8-1の東岸に位置する1×4間の南北棟である。主軸はほぼ真北を向いており、B期と考える。桁行は約3.5m間隔、梁間は約2mを測る。柱穴は一辺0.4~0.7m程度の隅丸方形で深さは0.2~0.6m程度残っていた。掘り方は灰褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは2つしかない。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦や土器の散布もなかった。南の妻柱が掘立柱建物8-3・8-4に接近しており、軒の長さを考えると同時に存在した建物にはなりにくい(図28)。

掘立柱建物8-3は8区の南東隅、自然河川8-1の東岸に位置する2×2間の南北棟である。主軸はほぼ真北を向いており、B期と考える。桁行は約2m間隔、梁間は約1.7mを測る。柱穴は一辺0.5m程度の隅丸方形で深さは0.4~0.6m程度残っていた。掘り方は灰褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは2つしかない。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦の散布はなく、土器もほとんどなかった(図29)。

掘立柱建物8-4は調査区の南端、自然河川8-1の東岸をまたぐ形で営まれていた2×2間の南北棟である(図30)。建物はさらに南に続く可能性、あるいは南に別の建物と接する可能性もある。主軸はほぼ真東を向いており、B期と考える。桁行・梁間は約2m間隔であるが、西半は川の岸をまたいで桁行約3.5mを測る。柱穴は一辺0.8m程度の大型で、隅丸方形を示す。深さは0.6~1.2m程度残る。掘り方は灰褐粘土に覆われ明瞭に柱痕跡を残すものが4つあった。また、柱の抜き取り跡が確認できるものも4つある。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦などの散布もない。

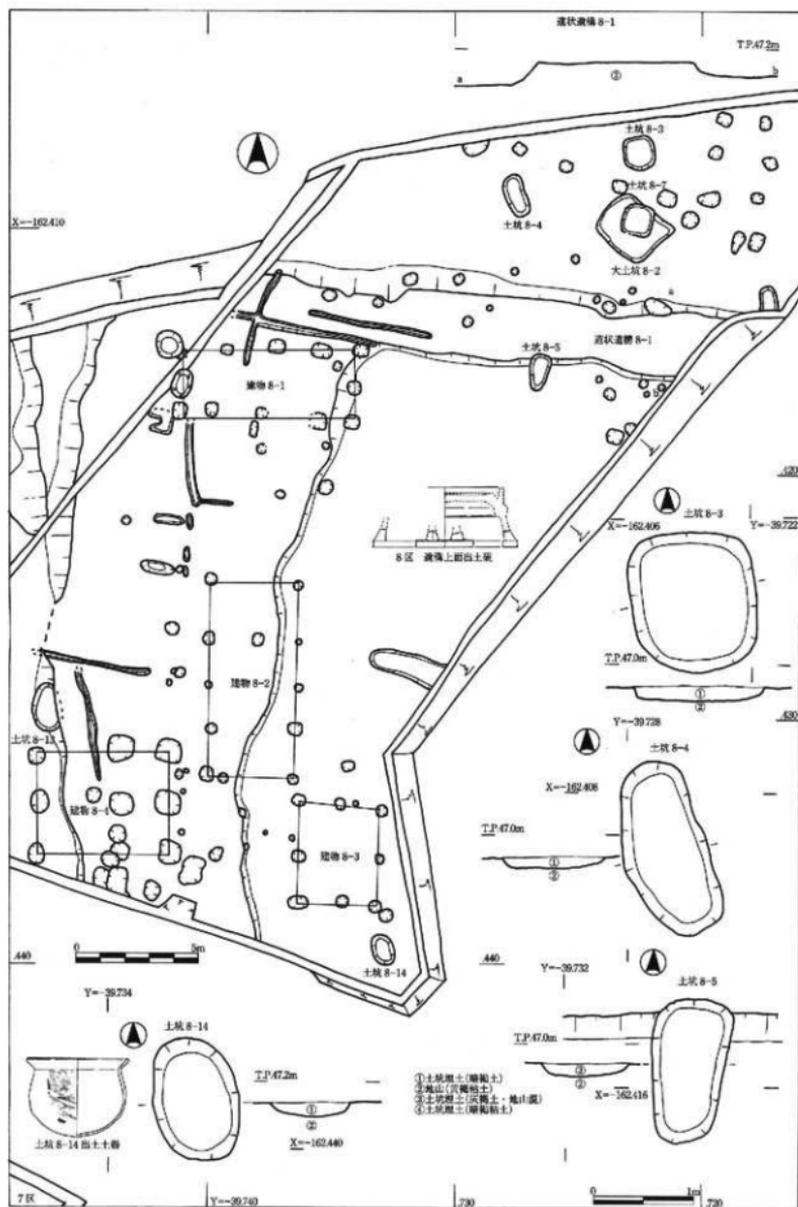


图26 8区遺構図(2)

大土坑はいずれも不定形で、柱穴の埋め土とほぼ共通する暗褐色土で覆われていた。大土坑8-1以外はほとんど遺物を含まなかった。

大土坑8-1は調査区北端で発見され、長辺約12m、東西8m以上、深さ約0.2mを測る。掘り底は平たく上面は削平されている。東側は調査区外へと伸びる。飛鳥V段階の須恵器杯などともに鋳造用のフイゴ羽口が発見された(図76)。

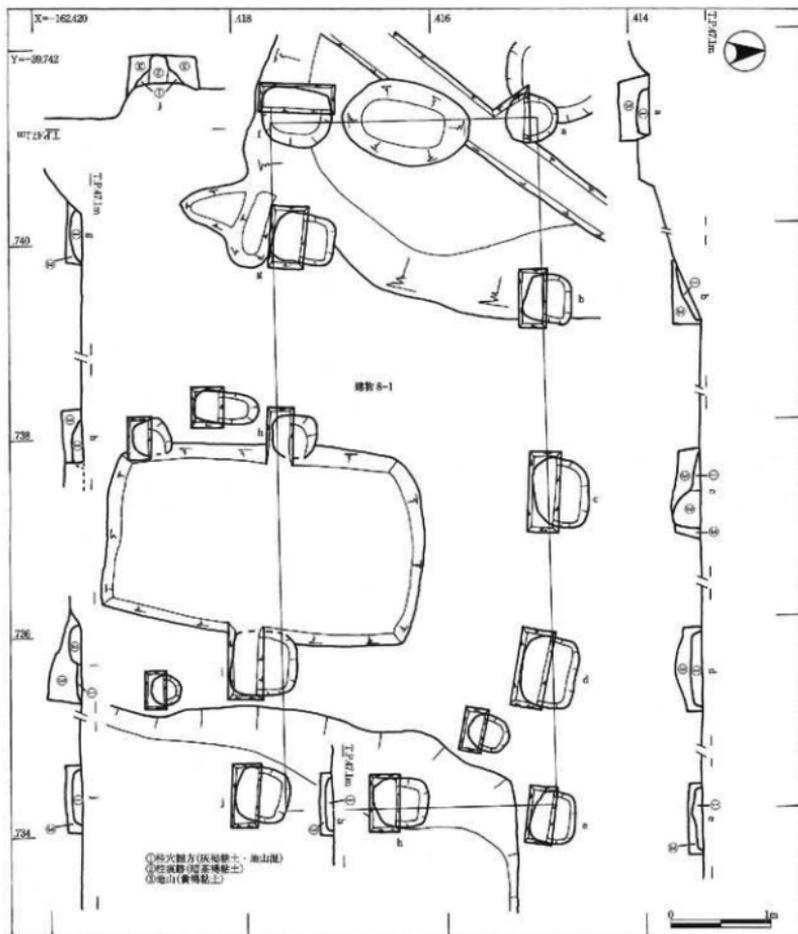


図27 建物8-1平面及び断面図

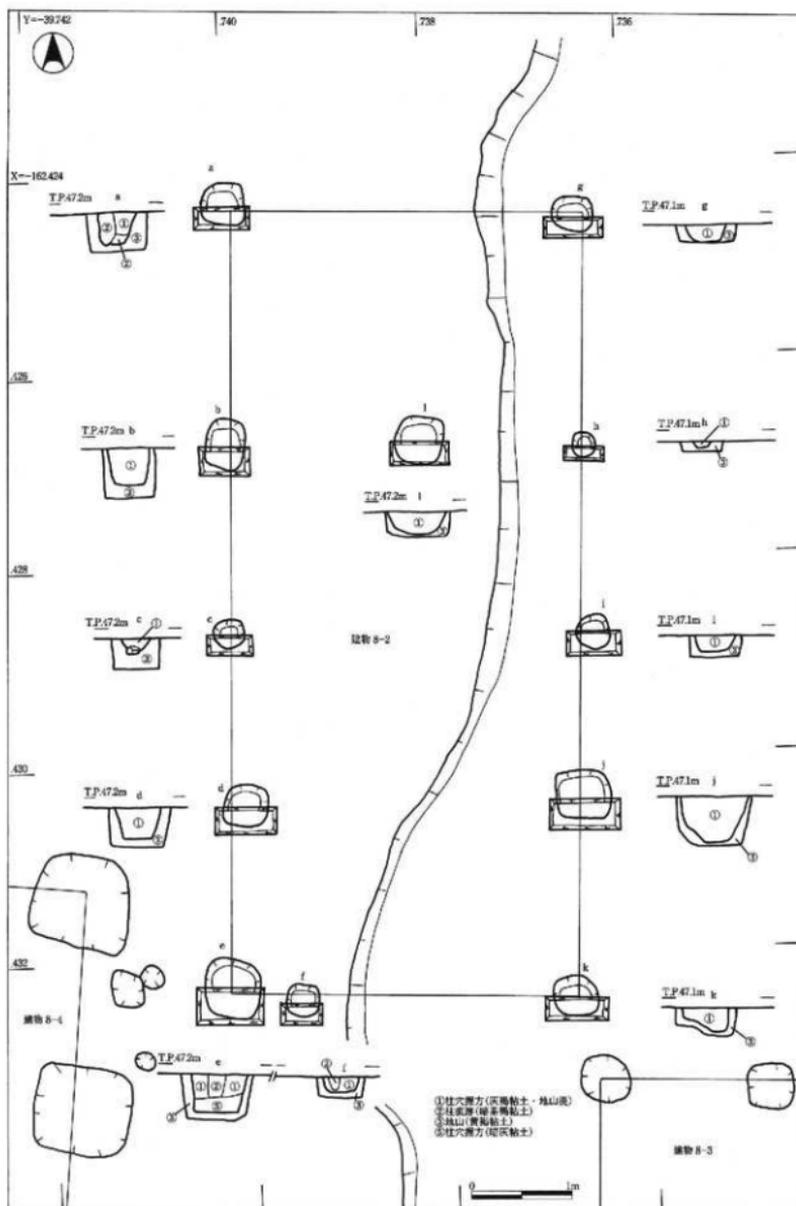


図28 建物 8-2 平面及び断面図

大土坑 8-2 は調査区北端で発見され、長辺約 7 m、東西約 5.5 m の隅丸方形で、深さ約 0.1 m を測る。掘り底は平たく上面は削平されている (図 25)。

大土坑 8-3 は大土坑 8-2 に切られる形で発見された一辺約 3.3 m、深さ 0.1 m を測る方形土坑である。四周の側面は被熱で赤く変質しているが、底面は焼けていなかった。埋め土は少量の炭を含む淡灰粘土で、大土坑 8-2 の埋め土と明瞭に区別できる。どのような性格がよくわからないが、大土坑 8-1 から鑄造用のフイゴ羽口が、自然河川 8-1 からも羽口が発見されており、金属加工を示唆している (図 25)。

確認された溝群は南北・東西方向に長くのび、深さ 0.1 m 程度で船底形の断面形である。中世以降の耕作に伴うものだろう。

道状遺構 8-1 は東西方向にながく地山を削りだしたもので、長さ 20 m 以上、幅約 3 m を測る。上面は堅くしまって赤黒く変質している。坪境を示す可能性がある。飛鳥・奈良時代にさかのぼるかどうかはわからない (図 26)。

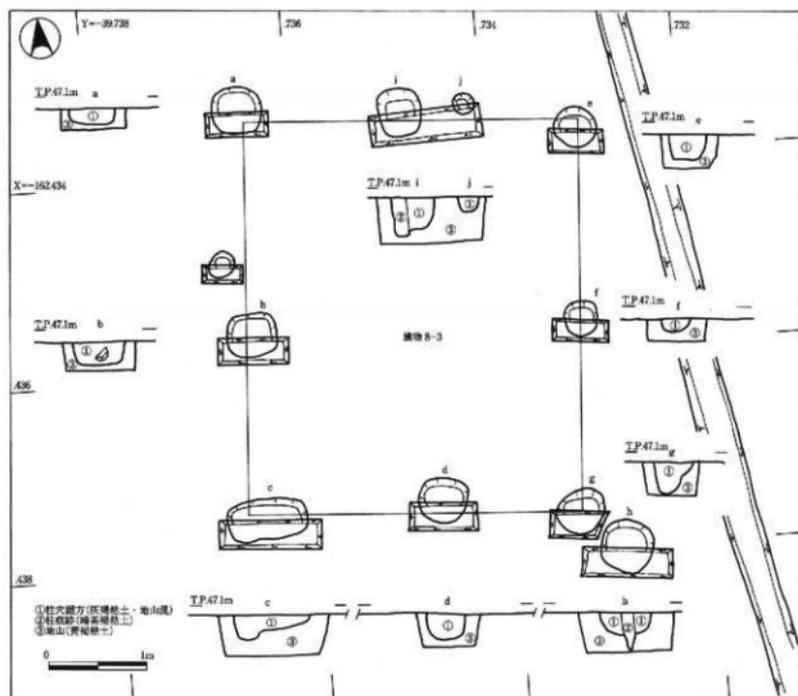


図 29 建物 8-3 平面及び断面図

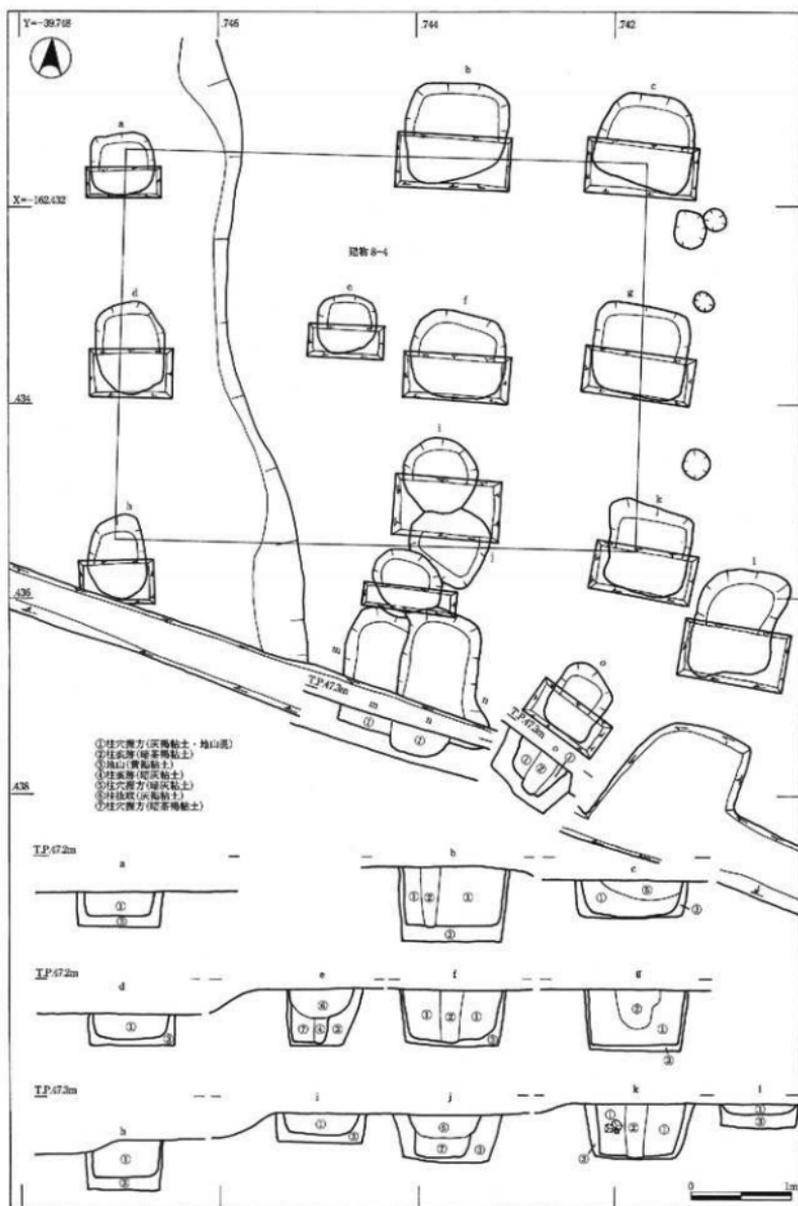


図30 建物 8-4 平面及び断面図

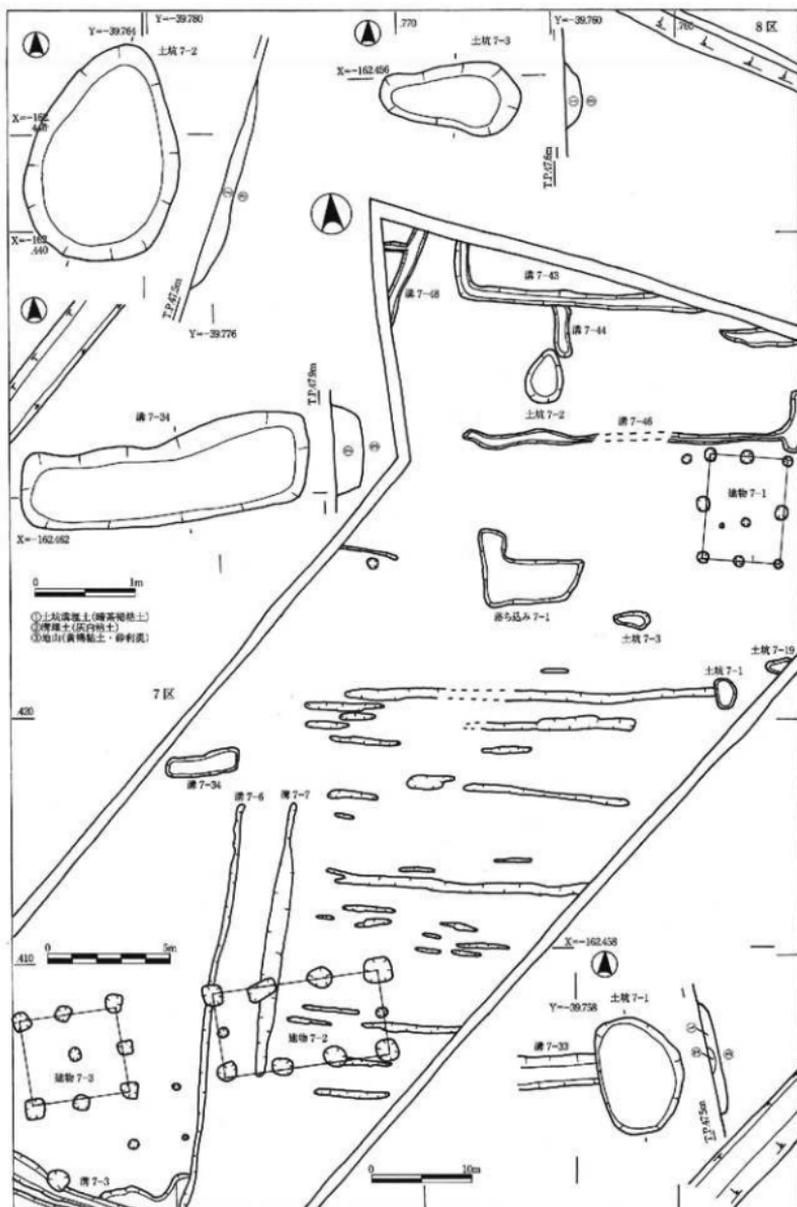


图31 7区遺構図

3 北部2の調査（7区）（図版1）

北部2は北部1（8区）と府道をはさんで南側に位置し、地山の海拔は47.2～48.5m程度、北になだらかにくだる。北半から1棟、南半から2棟の掘立柱建物が発見された。その他、土坑、溝などが散在する。以下に、遺構詳細を示す。

掘立柱建物7-1は7区北端に位置する2×2間の南北棟である（図33）。主軸はほぼ真北をむいており、B期と考える。桁行約2.2m、梁間約1.5mを測る。柱穴は一辺0.6～0.7m程度の隅丸方形で深さは0.2m程度しか残されていない。掘り方は暗茶褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは2つしかない。柱穴出土遺物はなく、上面の南側から軒瓦片が発見されている。

掘立柱建物7-2は7区中央に位置する2×3間の東西棟で、掘立柱建物7-3の東に軸をあわせて並ぶ（図35）。主軸は東西だがやや振れており、A期と考える。桁行は約2.2m、梁間は約1.6mを測る。柱穴は一辺1m程度の隅丸方形で大きく、深さは0.6m程度残っている。東西の側柱のみ小さい。掘り方は暗茶褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは2つしかない。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦や土器の散布もなかった。

掘立柱建物7-3は掘立柱建物7-2の西側で軸をそろえて営まれていた。A期でも同時に存在したのだろう。2×2間の総柱建物だが、西側の側柱のみ発見できなかった（図33）。主軸は西側が南に振れておりA期と考える。桁行2m、梁間約1.7mを測る。柱穴は一辺0.6m程度の隅丸方形で深さは0.4～0.6m程度残っていた。掘り方は暗茶褐粘土に覆われ、西側柱はすべて明瞭に柱痕跡を残す。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦の散布はなかった。

土坑7-1は調査区北東で発見され、長辺約1.5m、短辺約0.8m、深さ約0.1mを測る。掘り底は平たく、上面は削平されている。柱穴と共通する暗茶褐粘土で覆われていた（図31）。

土坑7-2は調査区北端で発見され、長辺約2.5m、短辺約1.5m、深さ約0.1mを測る。掘り底は平たく上面は削平されている。埋め土は暗茶褐粘土、遺物は含まれていない（図31）。

土坑7-3は土坑7-2の南側で発見され、長辺約1.5m、短辺約1.2m、深さ約0.1mを測る。掘り底は船底形で上面は削平されている。埋め土は暗茶褐粘土、遺物は含まれていない（図31）。

落ち込み7-1は土坑7-3の西側にある不定形の土坑状で、流水堆積と考える灰白粘土に覆われていた。長辺約10m、深さ0.1mを測る。どのような性格かはわからないが、須恵器・土師器の小片が含まれていた（図31）。

確認された溝は東西方向に長くのびるものが大半で深さ0.1m程度、唐鋤痕跡だろう。

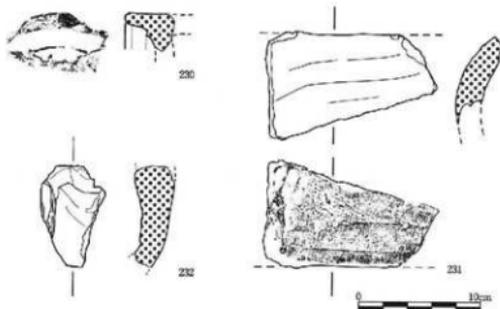


図32 今回調査出土軒瓦・道具瓦

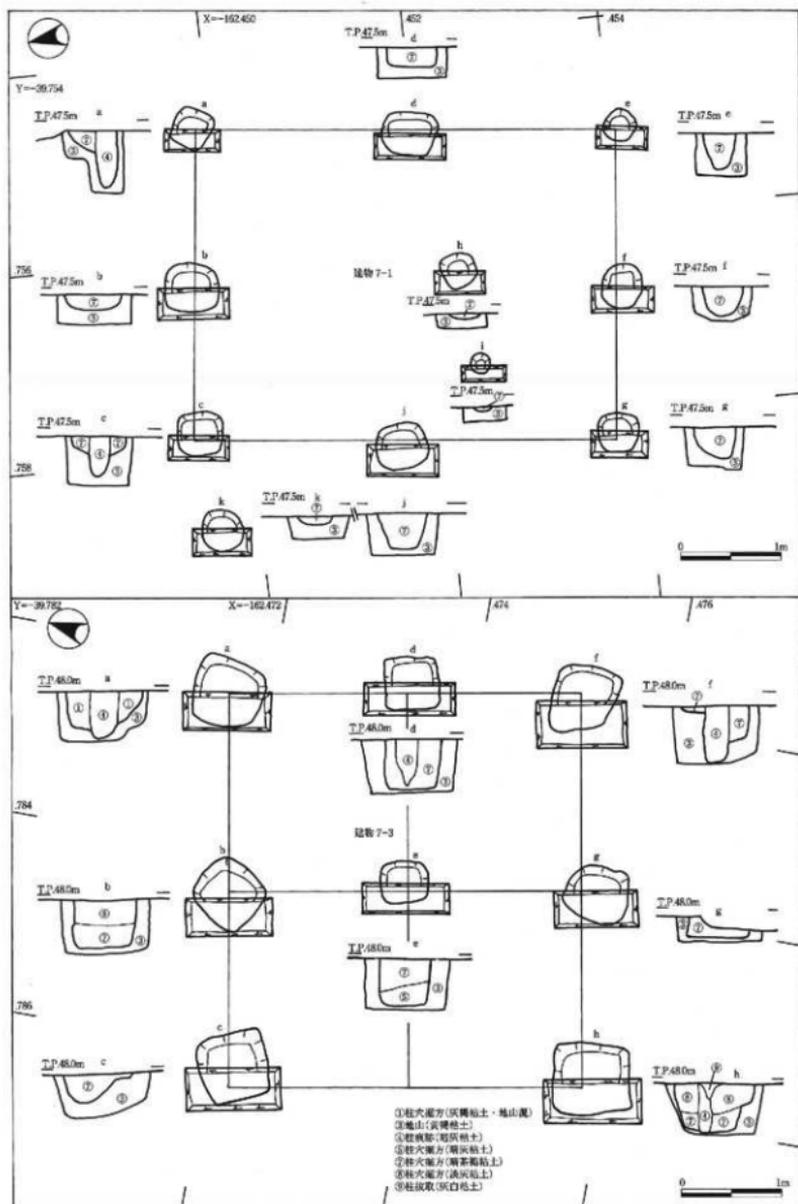


図33 建物7-1・7-3平面及び断面図

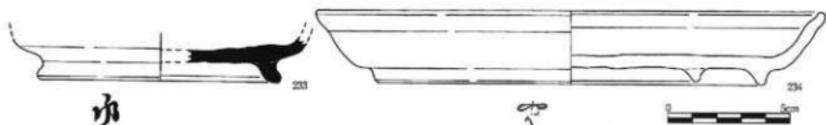


图34 自然河川8-1出土墨書土器

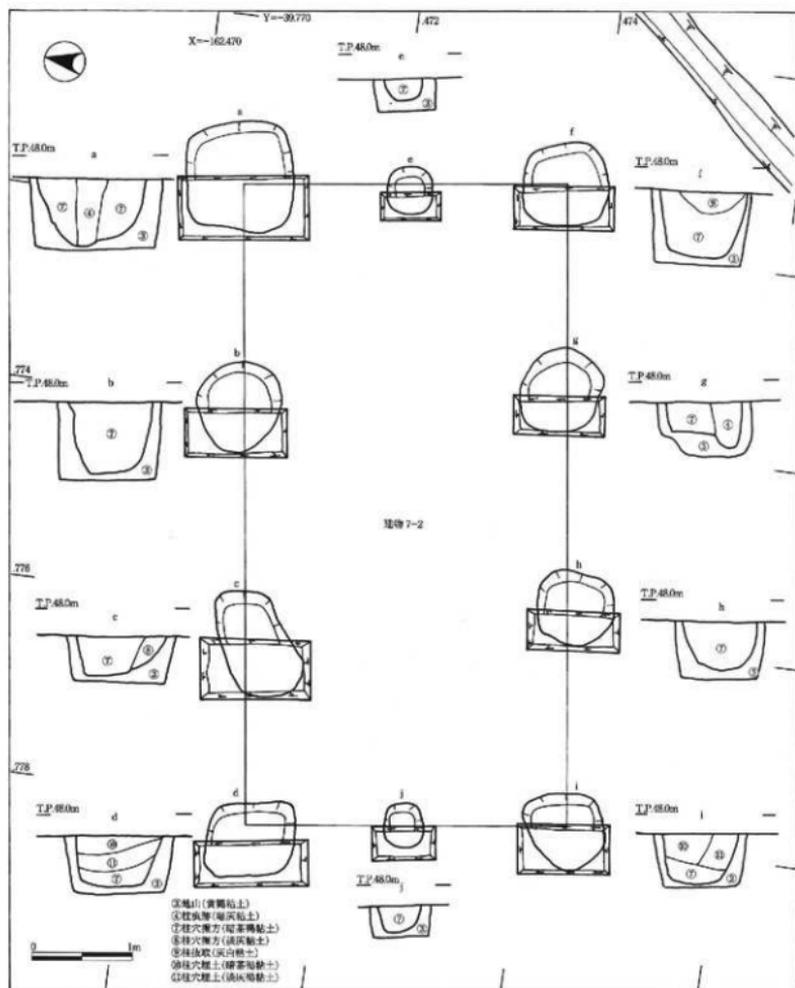


图35 建物7-2平面及び断面図

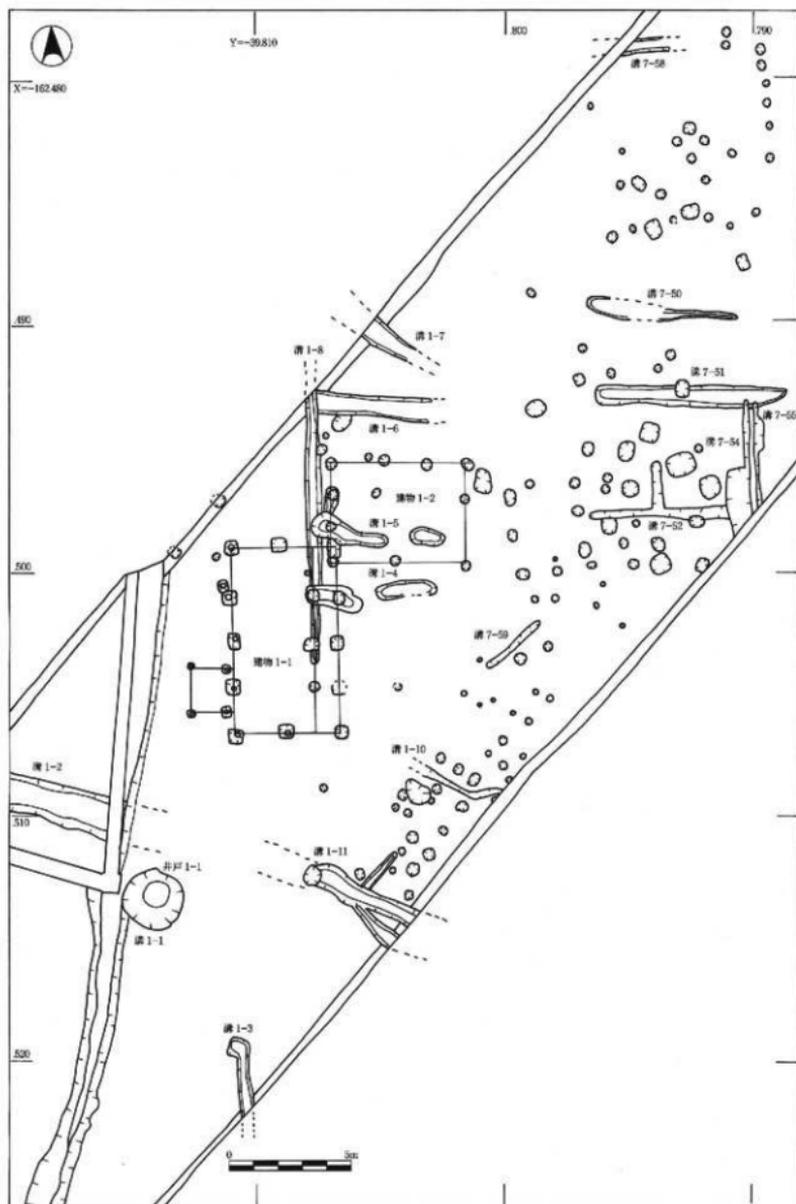


图36 1区遺構図

4 中部1の調査（7区南・1区）（図版1）

7区南は溝7-3を境に地山が南西にせりあがる。その上面を幾層かの砂利混じりの暗褐粘土が覆い、平坦面がつくり出される。当初、平坦面は飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器片をたくさん含むことから耕作に伴う後世のものと考えていたが、上面で土坑や小穴などが多数発見され、1区に続く同時期の遺構面であることがわかった。したがって、この粘土層は整地土層である。

7区南から1区にかけては斜面地山が海拔49.0~49.7m程度、北にくだる傾斜地となる。7区上層と1区で2棟、7区下層で1棟の掘立柱建物が発見された。その他、土坑、溝などが散在する。さらに1区の南西は海拔50m以上だったと考えられるが地山は後世の水田開発で削平され、掘立柱建物1-1の西はほとんど遺構が発見できなかった。以下に、遺構詳細を示す。

掘立柱建物1-1は1区北端に位置する4×2間の南北棟である（図37）。主軸はほぼ真北をむき、B期と考える。東側に庇をもつ。柱間は桁行約2.2m、梁間約1.5mを測る。柱穴は一辺0.6~0.7mの隅丸方形で深さは0.5m以下しか残らない。掘り方は茶褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは4つしかない。柱穴出土遺物はなく、上面から少量の瓦片が発見されている。

掘立柱建物1-2は掘立柱建物1-1に南西隅の柱が切られる2×3間の東西棟である（図36）。主軸はほぼ東西方向でB期と考える。東側の傾斜がきつくとともに斜面地に営まれたようだ。柱間は不規則で東側柱などの痕跡は確認できなかった。柱穴は一辺0.5m程度の隅丸方形、深さは0.3m程度残る。掘り方は暗褐土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものはない。柱穴出土遺物はなく、上面に瓦や土器の散布もなかった。

溝7-58は7区の北西でみつかった長さ3.5m、幅0.8m、深さ0.1mの東西溝である。西側は調査区外に続き、東側は削平されている。埋め土は柱穴と共通する暗褐粘土で、底面は平らになり、流水による堆積物はない。遺物も発見されなかった（図36）。

溝7-58の12m南に並行する形で溝7-50が発見された。長さ7.0m、幅0.8m、深さ0.1mを測る東西溝である。東側は削平され、途切れる。埋め土は柱穴と共通する暗褐粘土で、底面は平らになり、流水による堆積物はない。遺物も発見されなかった（図36）。

溝7-50の約4m南に並行する形で溝7-51が発見された。長さ7.5m、幅0.8m、深さ0.2mを測る東西溝である。また、この溝の西側で規模や軸が同じ溝1-6が発見された。本来両者は連続するものだったと考える。溝1-6の西側は調査区外へと続く。埋め土は柱穴と共通する暗褐粘土で、底面は平らになり、流水による堆積物はない。少量の須恵器片が発見された。さらに、この溝の下層から同じ方向、同じ軸の位置に溝7-60が発見されている（図36）。

溝7-51の4m南に並行する形で溝7-52が発見された。長さ約5m、幅0.4m、深さ0.1mを測る東西溝である。また、この溝の西側で規模や軸が同じ溝1-5が発見された。本来両者は一つのものだったと考える。溝1-5の西側は調査区外へと続く。溝7-52の東側は南北溝の溝7-54・溝7-55に切れ、調査区外へと続く。埋め土は柱穴と共通する暗褐粘土で、底面は平らになり、流水による堆積物はない。須恵器片が発見された。溝1-5は掘立柱建物1-1を切っ

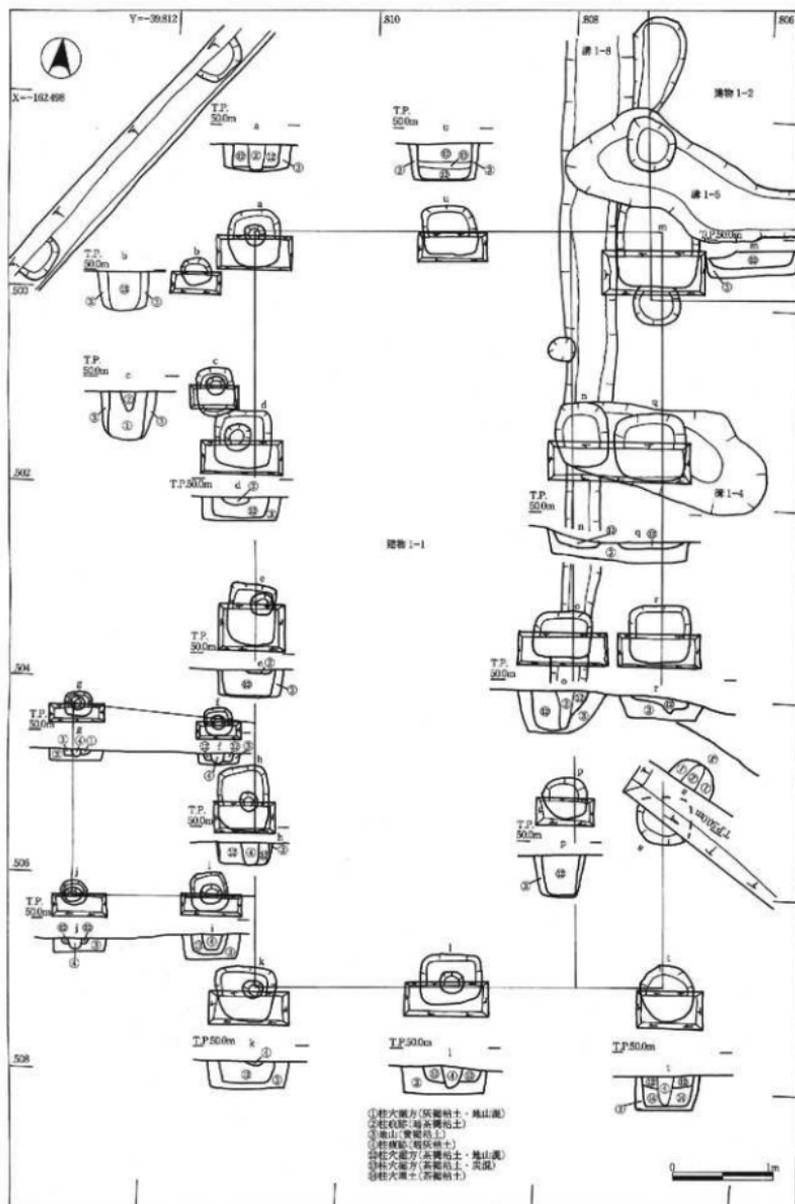


図37 建物 1-1 平面及び断面図

ており、建物廃絶以降のものであることがわかる（図36）。

溝1-2は1区の北西でみつかった長さ6.5m、幅1.4m、深さ0.1mの東西溝である。西側は調査区外に続き、東側は削平される。溝は東側で溝1-11に取りつくつと考える。この場合、軸はやや南に振れる。埋め土は灰褐粘土で、底面は平らになり、流水による堆積物と考える。少量の須恵器・土師器が発見され、飛鳥Ⅲ期までさかのぼる古い遺構と考える（図36）。

溝1-1は1区の北西でみつかった長さ28m以上、幅0.6m、深さ0.1mの南北溝である。溝の西側は高く、東側は低くなり、北辺は肩が明瞭でない。南北ともに調査区外に続き、後の坪境である可能性もある。埋め土は灰褐粘土で、底面は船底形、流水による堆積物と考える。少量の須恵器・土師器とともに近世の遺物もみられた。遺構の中央部分で近世の井戸1-1に切られる。また、北半の上面は現在のコンクリート水路がのる（図36）。

5 下層遺構の調査（7区）（図版2）

7区南半の遺構面の基盤となる整地土層、暗灰褐粘土を除去する過程で、下層からも遺構が発見された。整地土層の層境は明瞭でなく、斜面地による地山のでこぼこもあり、整地は厚いところで0.5m程度に及ぶ。下層遺構は明瞭に上層の遺構と区別して確認できなかった。そこで、地山面まで整地土を除去し、地山に刻まれた遺構を下層遺構として上層と区別した。

柱穴とおもわれる遺構が多数確認できたが、上層・下層とも、建物の形態を明快に復元することができないもののおおく、上層遺構は上面が削平された部分が多くあると考える。また、下層も地山に明瞭な痕跡を残さない浅いものがあつた可能性を否定できない。

掘立柱建物7-4は7区南端に位置する2×3間の南北棟である（図38）。主軸はほぼ真北をむいており、B期と考える。柱間は桁行約2.2m、梁間約1.5mを測る。柱穴は一辺0.6~0.7m程度の隅丸方形で深さは0.2m程度しか残されていない。掘り方は暗灰粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは1つしかない。柱穴出土遺物はない。

土坑7-5は掘立柱建物7-4の南西で発見された不定形土坑である。長辺約1.5m、短辺約0.8m、深さ約0.1mを測り、東は調査区外へと続く。掘り底は平たく、上面は削平されている。柱穴と共通する暗灰粘土で覆われていた。須恵器・土師器片が含まれる（図38）。

自然河川7-1は整地土層の北側の斜面地で確認された。斜面からの湧き水がここにたまる湿地状の遺構で、流水堆積と考える灰白粘土に覆われていた。長辺約20m、深さ0.1mを測る。どのような性格かよくわからないが、須恵器・土師器の小片が含まれていた（図38）。

溝7-60は掘立柱建物7-4に切られる形でみつかった長さ13.5m、幅1.4m、深さ0.6mの東西溝である。東側は調査区外に続き、西側は途切れる。埋め土は上層が暗灰粘土で一気に埋め戻された様相を示し、下層は灰褐粘土で流水による堆積と考える。須恵器・土師器が発見され、飛鳥Ⅲ段階までさかのぼる古い遺構と考える（図38）。

1区の西南は溝1-1を境に20m四方にわたって、削平による遺構の途切れがある。

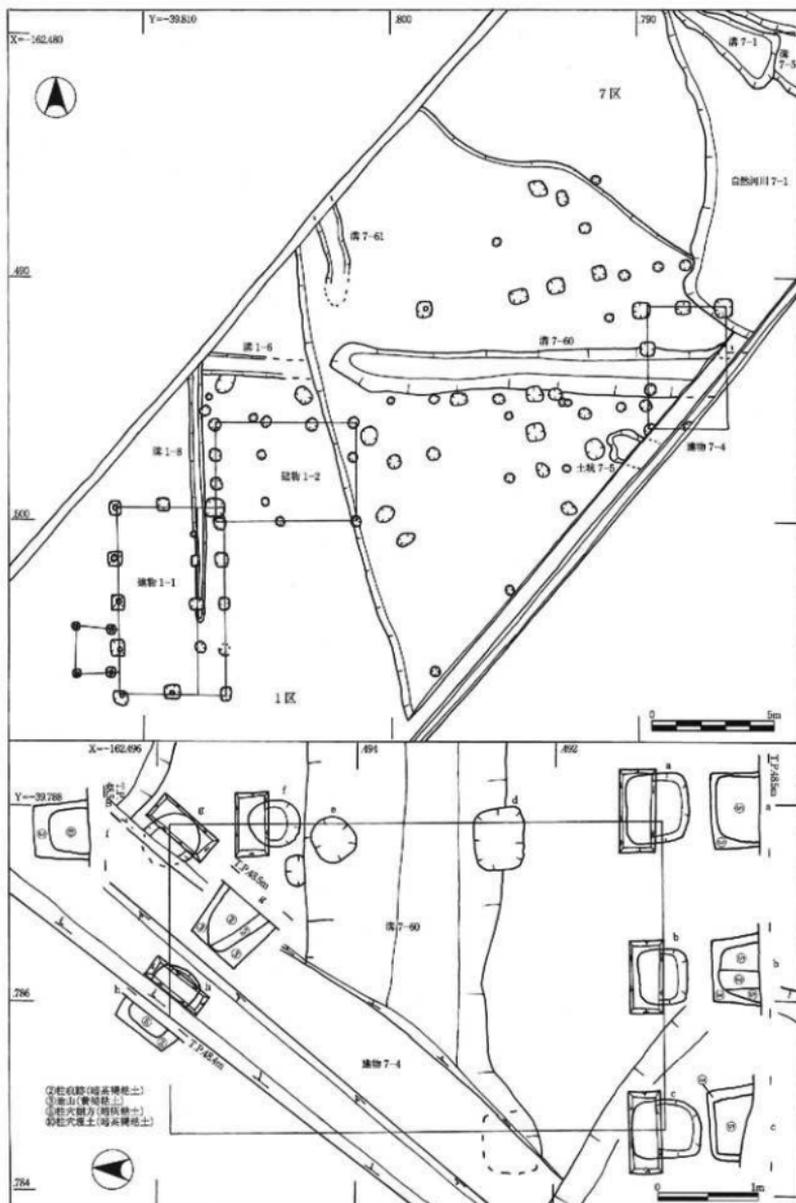


图38 7区下層遺構・建物7-4平面及び断面図

6 中部2の調査(2区北半)(図版1)

1区の南は地山が緩やかに南西にくだる。2区にいたってその上面に水田床土である遺物包含層が0.2~0.4m程度で覆い、地山に切り込まれた遺構面を形成する。

2区から3区にかけては地山が海拔50m前後で、南側ほど低くなる。2区北半では掘立柱建物6棟・土坑・井戸などが発見された。また、2区の南側を南北に長くトレンチ調査した9区でも建物などの遺構が続くことを確認している。以下に遺構詳細を示す。

掘立柱建物2-1は2区北端に位置する4×2間の南北棟である(図39)。主軸はほぼ真北をむいており、B期と考える。柱間は不規則で柱穴も一辺0.3~0.7mとばらつきがある。掘り方は暗褐色粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは4つしかない。柱穴出土遺物はなく、上面からいくつかの瓦片が発見されている。

掘立柱建物2-2は掘立柱建物2-1の東に並んで位置する3×1間の南北棟である(図40)。主軸はほぼ真北をむいており、B期と考える。柱間は不規則で柱穴はほぼ隅丸方形だが一辺0.3~0.5mとばらつきがある。掘り方は灰黄褐色粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは3つしかない。柱穴出土遺物はない。

掘立柱建物2-2に重なる形で東西に並ぶ柵列2-1の柱穴が発見された(図40)。発見された柱穴は4つでさらに東に調査区外へと続く。柱穴は3箇所で柱痕跡が明瞭、残る1箇所は柱の抜き取りあとが明瞭であった。南に広がる東西棟の可能性もある。柱穴出土遺物はない。B期と考える。

掘立柱建物2-3は掘立柱建物2-1の南に位置する3×2間以上の総柱東西棟である(図40)。主軸はやや振れをもち、A期と考える。柱間は桁行、梁間とも約2.2mで、柱穴はほぼ隅丸方形の一辺0.8m程度である。掘り方は灰黄褐色粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは4つある。建物の南東は調査区外へと続く。柱穴出土遺物はない(図40)。

掘立柱建物2-4は2区中央に位置する4×2間の南北棟である(図41)。主軸はほぼ南北方向でB期と考える。柱間は桁行2.0m、梁間約1.7mで、柱穴はほぼ隅丸方形の一辺0.5m程度である。掘り方は灰黄褐色粘土に覆われ明瞭に柱痕跡を残すものは4つある。柱穴の一部は方形溝2-1・大土坑2-1を切るが、埋め土の違いは明瞭でない。柱穴出土遺物はなく柱間のばらつきもある。

掘立柱建物2-5は掘立柱建物2-4に南西で重なる3×2間の南北棟である(図41・42)。主軸はやや西に振れておりA期と考える。柱間は桁行2.0m、梁間1.7mで、柱穴はほぼ隅丸方形の一辺0.8m程度である。掘り方は灰黄褐色粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは5つある。柱穴の一部は方形溝2-1・大土坑2-1を切り、埋め土の違いは明瞭だ。総柱建物の可能性もある。柱穴の埋め土から飛鳥Ⅱ~Ⅲ段階の杯蓋と杯身が発見された。ほぼ完形でA期建物の時期を位置づけ出来る唯一の資料である。しかし、柱穴は方形溝2-1を切っており、この溝に伴う土器が混入した可能性もある(235)・(236)。

掘立柱建物2-6は掘立柱建物2-4に南東で重なる2×2間の南北棟である(図42)。主軸

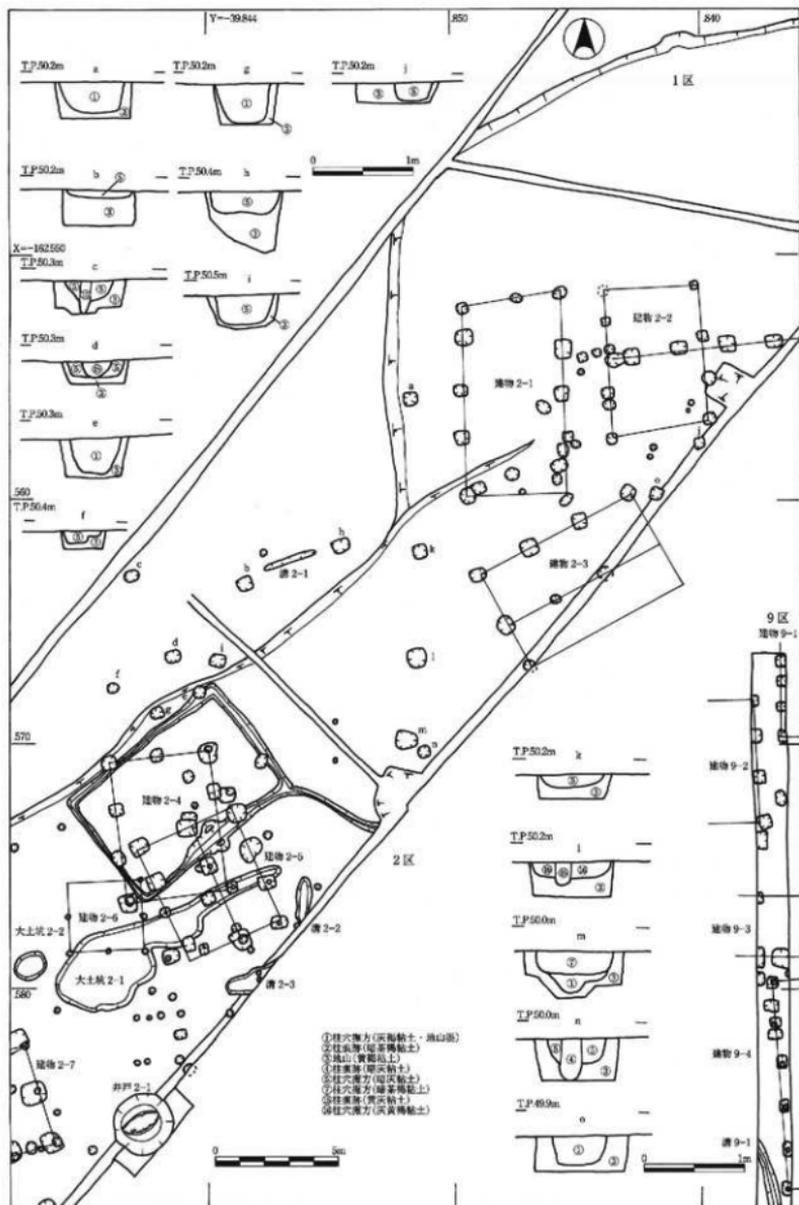


图39 2区・9区遺構図

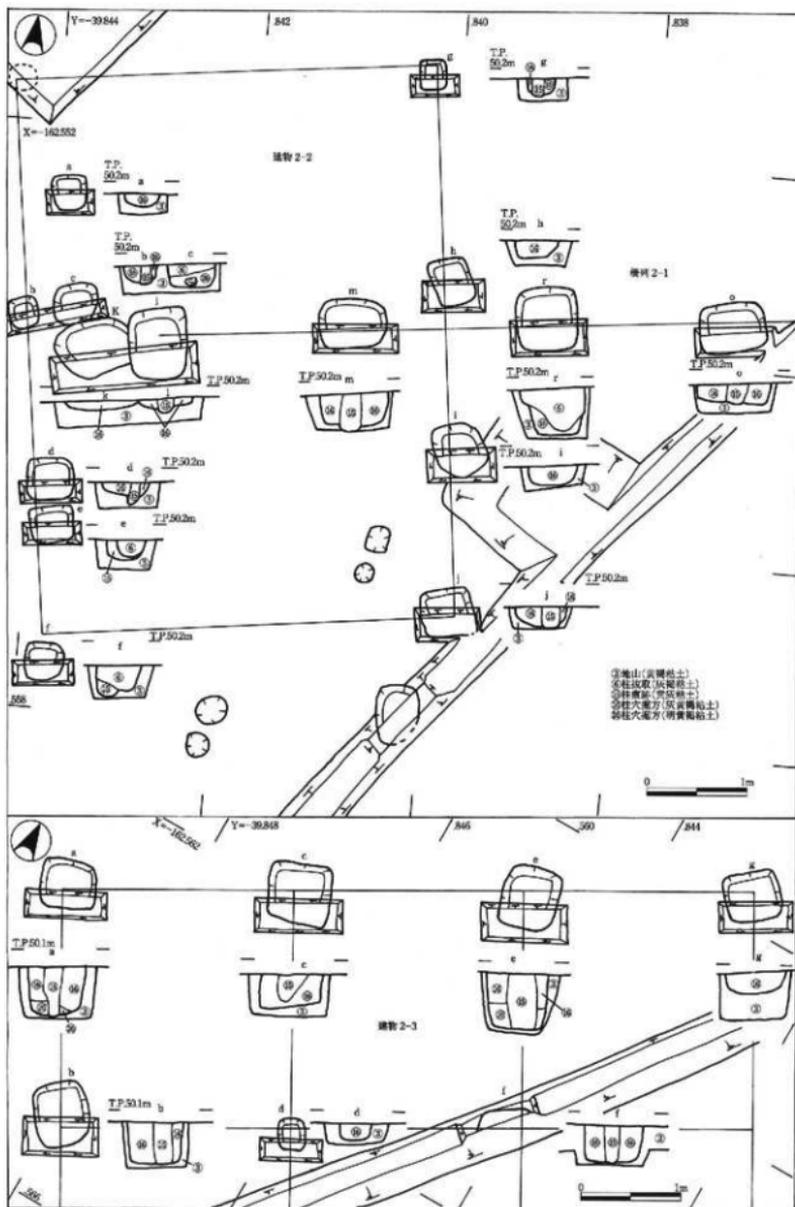


图40 建物 2-2・2-3 平面及び断面图

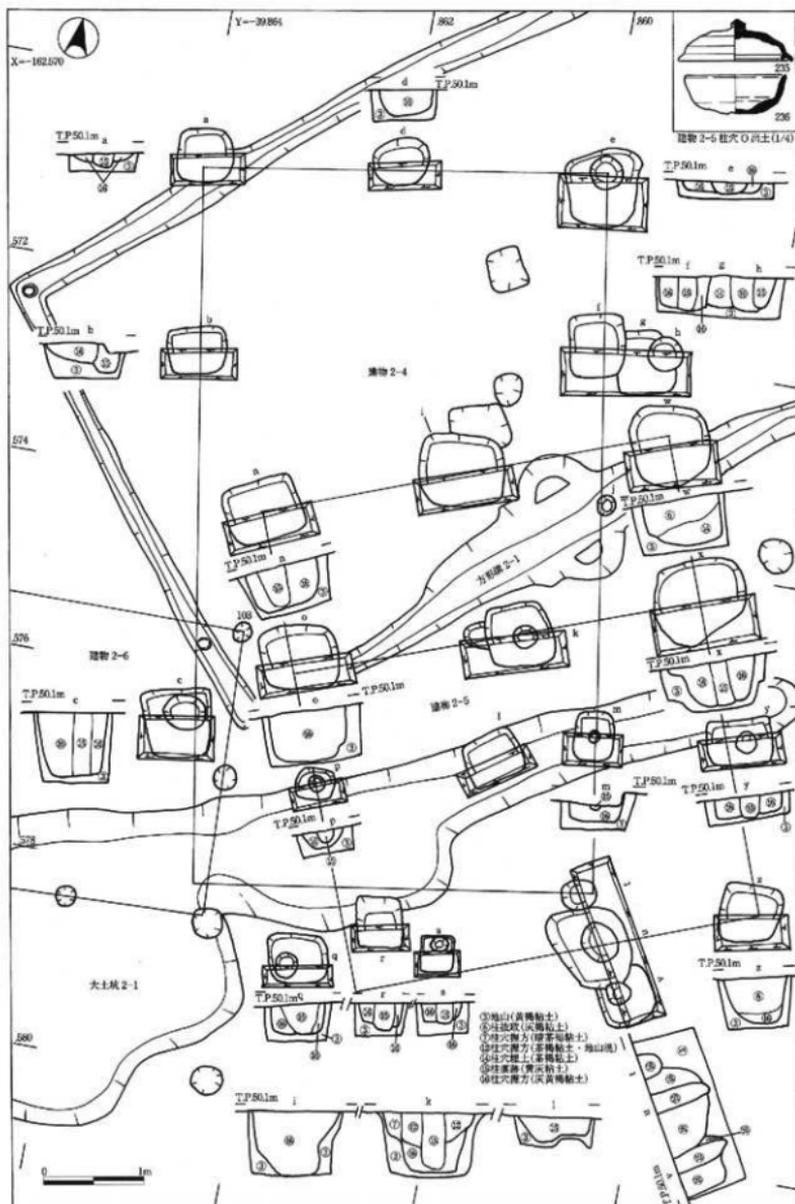


図41 建物 2-4 平面及び断面図

はほぼ南北でB期と考える。柱間は桁行・梁間ともに1.7mで、柱穴はほぼ円形で0.3m程度、深さ0.2m程度と小さく浅い。掘り方は暗褐色粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものはない。柱穴の一部は大土坑2-1を切り、埋め土の違いは明瞭だった。柱穴出土遺物はない。柱穴の規模は小さく、建物2-4に取りつく施設かもしれない。

大土坑2-1は掘立柱建物2-4・2-5・2-6に重なる東西5.2m、南北1.6m、深さ0.2mを測る不定形の土坑で東側は溝状になって途切れる(図42)。埋め土は砂利混じりの暗灰粘土で、少量の須恵器・土師器を含む。切りあいは建物の時期より古くに位置づけできることを示唆する。

大土坑2-2は大土坑2-1の北東に位置する東西1.8m、南北1.1m、深さ0.1mを測る円形土坑で、掘り底は平たい(図42)。埋め土は砂利混じりの暗灰粘土で、少量の須恵器・土師器を含む。

大土坑2-3は掘立柱建物2-7と掘立柱建物2-11の間に位置する東西2.1m、南北2.1m、深さ0.1mを測る円形土坑で、掘り底は平たい(図42・43)。埋め土は砂利混じりの暗灰粘土で、少量の須恵器・土師器を含む。切りあいからみると建物の時期より古くに位置づけできる。

方形溝2-1は掘立柱建物2-4・2-5と重なる溝状遺構である。建物と軸を同じにしない。溝に囲まれた方形の区画は長辺7.6m、短辺5.6mに四角くめぐり、幅0.3m、深さ0.1mを測る。南東隅から調査区外へと斜行溝がとりつき、排水溝だったと考える。長辺南側の溝中央は二段掘りとなり、炭混じりの暗褐色粘土で覆われる。北西隅の溝内に須恵器杯身(294)、南西隅の溝内に土師器杯(390)が据え置かれていた。飛鳥Ⅲ段階の遺構であることがわかる。そのほかに遺物はみられなかった。溝の内側に施設はないが、平地式住居があったのか、建物を作る以前に整地と排水をしたのか、などと想定される(図42)。

溝2-1は方形溝2-1の東北で発見された長さ2.7m、幅0.4m、深さ0.1mを測る東西溝で掘り底は船底形を示す。埋め土は柱穴と共通する暗灰粘土で、遺物は含まれない。この付近から北側は削平がすすみ、溝は本来、東西に長くのびるものとする(図39)。

溝2-2は掘立柱建物2-5の東で発見された長さ2.7m、幅0.4m、深さ0.2mを測る南北溝で掘り底は船底形を示す。南側は調査区外へと続く。埋め土は柱穴と共通する暗灰粘土で、遺物は含まれない(図42)。

溝2-3は掘立柱建物2-5の南で発見された長さ2.7m、幅0.6m、深さ0.2mを測る東西溝で掘り底は船底形を示す。東側は調査区外へと続く。埋め土は柱穴と共通する暗灰粘土で、遺物は含まれない(図39)。

井戸2-1と出土遺物は11節に詳述する(75頁・97頁参照)。

7 中部3の調査(2区南半・3区)(図版2)

2区の南は地山が緩やかに南西にくだが、おおかたは削平と考える。本来、南に向かってせりあがる地形となり、現状では3区との境で一気に段をなす形状となる。2区南半は水田床土である遺物包含層が0.2~0.4m程度、地山に切り込まれた遺構面を形成し、3区はほとんど遺物包含層を形成せず、4区にいたる。

2区から3区にかけては地山が海拔50m前後、2・3区の北側は土取りなどによる削平で遺構は残されていない。2区南半では掘立柱建物7棟と土坑などが発見された。また、3区では掘立柱建物4棟・井戸・大土坑などを確認している。以下に遺構詳細を示す。

掘立柱建物2-7は2区中央に位置する5×2間の東西棟である(図44)。主軸はやや振れており、A期と考える。柱間は東西方向が1.75m、南北方向が2mを測る。柱穴は北西の2本分が削平により失われる。一辺1m、深さ0.5~1m程度と大きく、掘り方は茶褐粘土に覆われ、すべて明瞭に柱痕跡を残す。しかし、柱穴出土遺物はない。上面からいくつかの瓦片が発見されている。

掘立柱建物2-8は掘立柱建物2-7の中央に重なる4×2間の南北棟である(図45)。主軸はほぼ真北を向いており、B期と考える。柱間は東西方向が1.75m、南北方向が1.7mを測る。柱穴は南東の隅柱が掘立柱建物2-7の柱穴に重なり、切っている。一辺0.6m、深さ0.2~0.5m程度と小ぶりであり、掘り方は灰黄褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものは2つしかなかった。柱穴出土遺物はない。上面からいくつかの瓦片が発見されている。

掘立柱建物2-9は掘立柱建物2-7の南に位置する2×2間以上の建物である(図45)。主軸はほぼ真北を向いており、B期と考える。建物の南側は調査区外へと続き、北西の四つの柱穴を確認したのみである。柱間は東西方向が2.2m、南北方向が1.7mを測る。柱穴は一辺約1m、深さ0.8~1m程度と大きい。掘り方は暗灰褐粘土に覆われ、明瞭に柱痕跡を残すものはない。柱穴出土遺物もない。

掘立柱建物2-10は本調査区最大規模の掘立柱建物である。掘立柱建物2-7の南に位置する2×4間以上の建物である(図46)。主軸はやや振れており、A期と考える。建物の南側は調査区外へと続き、さらに南と西に大きくなる可能性もある。柱間は東西方向が2.2m、南北方向が2.3mを測る。柱穴は一辺1~1.5m程度、深さ0.8~1.5m程度と大きい。掘り方は茶褐粘土と地山粘土層が互層に堆積し、すべて明瞭に柱痕跡を残す。一部柱根が遺存するものもある。柱穴出土遺物は須恵器・土師器の小片である。

掘立柱建物2-11は掘立柱建物2-7の西に並ぶ3×2間の総柱建物である(図47)。主軸はやや振れており、A期と考える。北東の隅柱は削平されている。柱間は東西方向が1.7m、南北方向が1.8mを測る。柱穴は一辺0.5m、深さ0.3~0.5m程度と小ぶりである。掘り方は茶褐粘土、明瞭に柱痕跡を残すものは2つしかない。柱穴出土遺物は須恵器小片である。

掘立柱建物2-12は掘立柱建物2-11の西南に重なる3×2間の総柱建物である(図47)。主

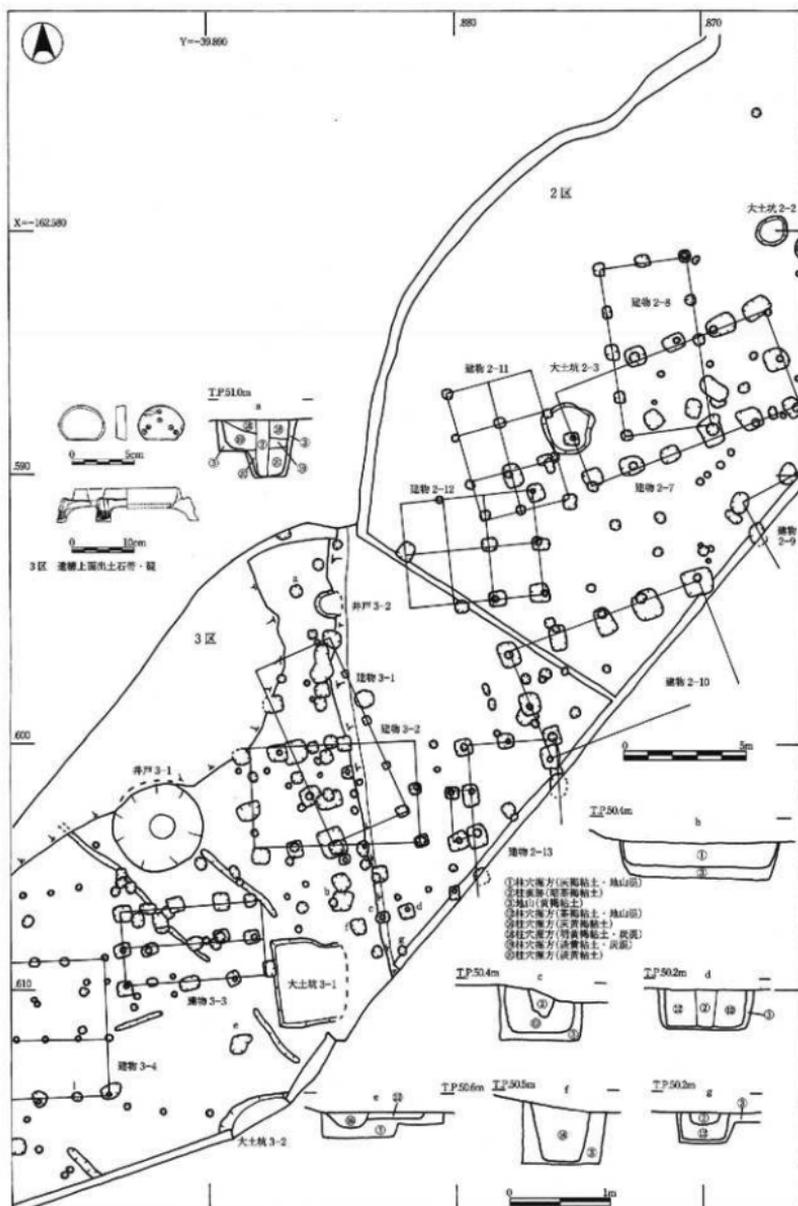


図43 2区・3区遺構図

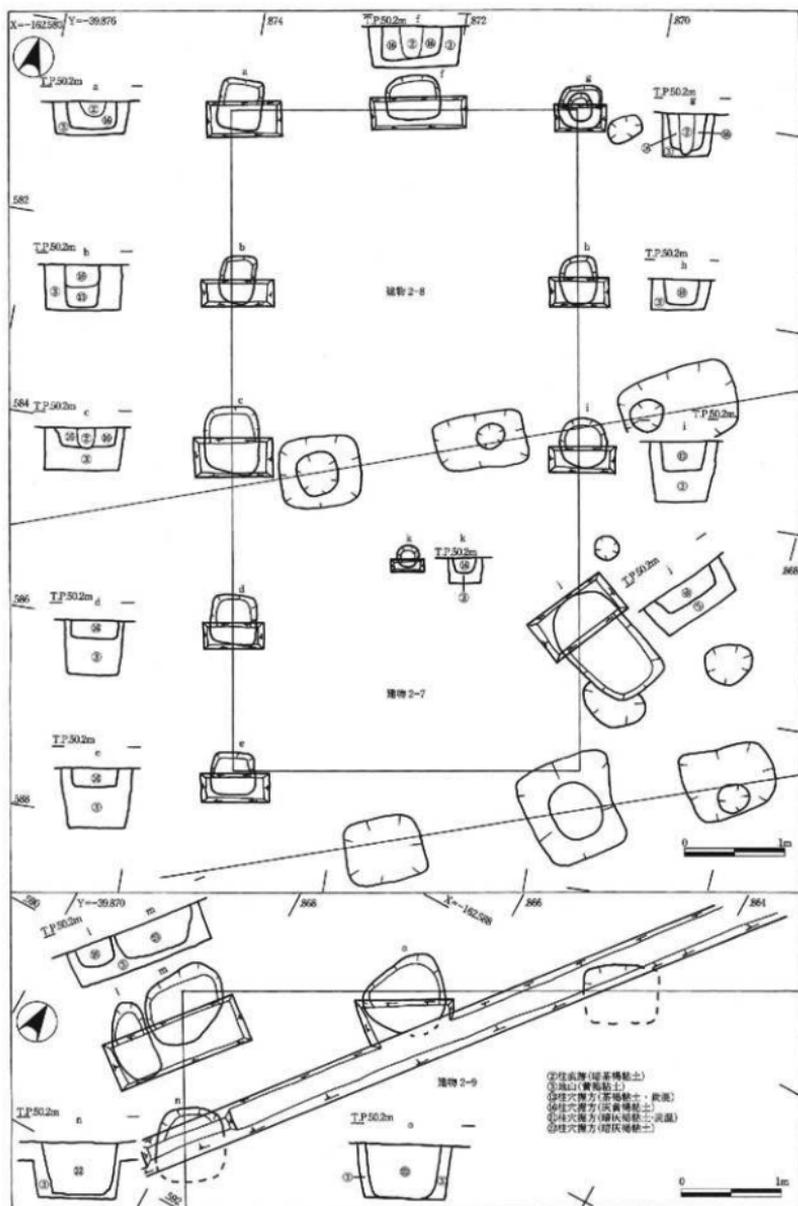


図45 建物2-8平面及断面図

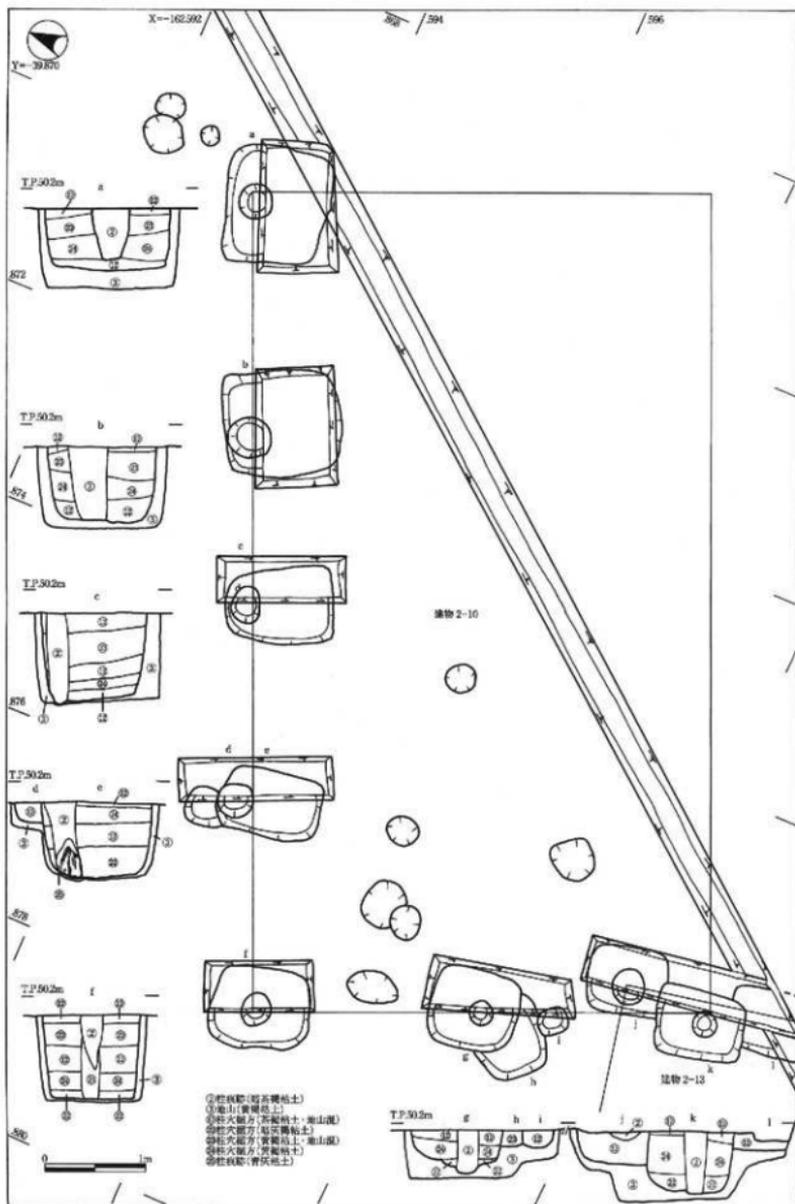


図46 建物 2-10平面及び断面図

軸はほぼ東西方向でB期と考える。北側と西側のいくつかの柱は削平されている。柱間は東西方向が1.8m、南北方向が2.1mを測る。柱穴は一辺0.6m、深さ0.5m程度と小ぶりである。掘り方は茶褐粘土、大半は明瞭に柱痕跡を残す。柱穴出土遺物は須恵器小片である。

掘立柱建物2-13は掘立柱建物2-10に重なる3×2間以上の南北建物である(図48)。主軸はほぼ真北で、B期と考える。西側に庇状の小柱穴が2個ある。柱間は東西方向が1.75m、南北方向が1.8mを測る。柱穴は一辺1m、深さ0.5m程度、すべて柱痕跡が残る。掘り方は茶褐粘土で柱穴出土遺物は須恵器小片である。

掘立柱建物2-10はA期であるが、検出当時はB期の建物2-13の北西二つの柱穴を切る形で発見された。断ち割り状況にもあらわれる。これまでの検討ではA期建物はB期建物より古く、

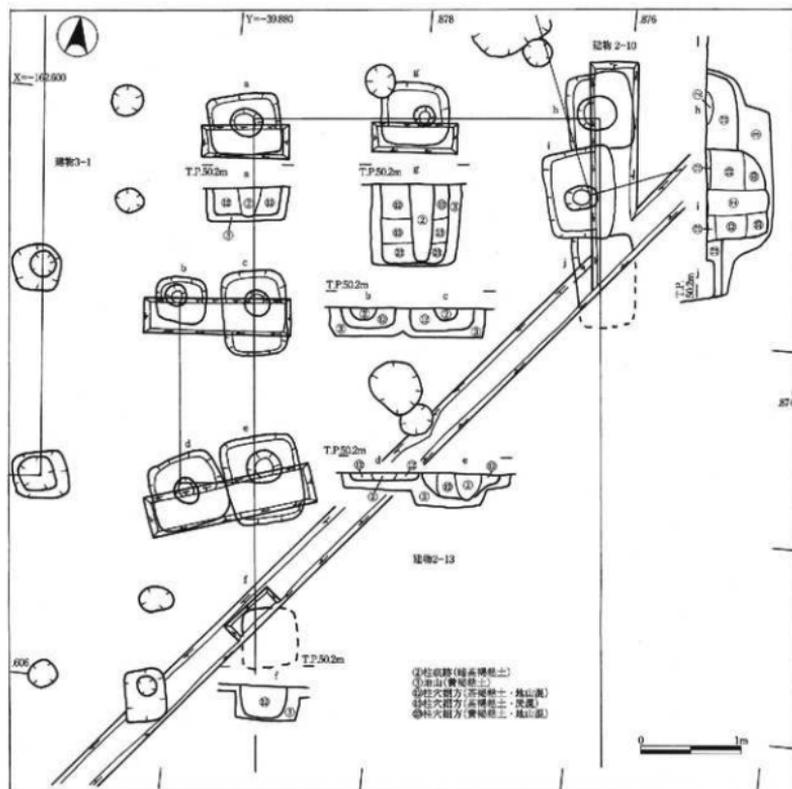


図48 建物2-13平面及び断面図

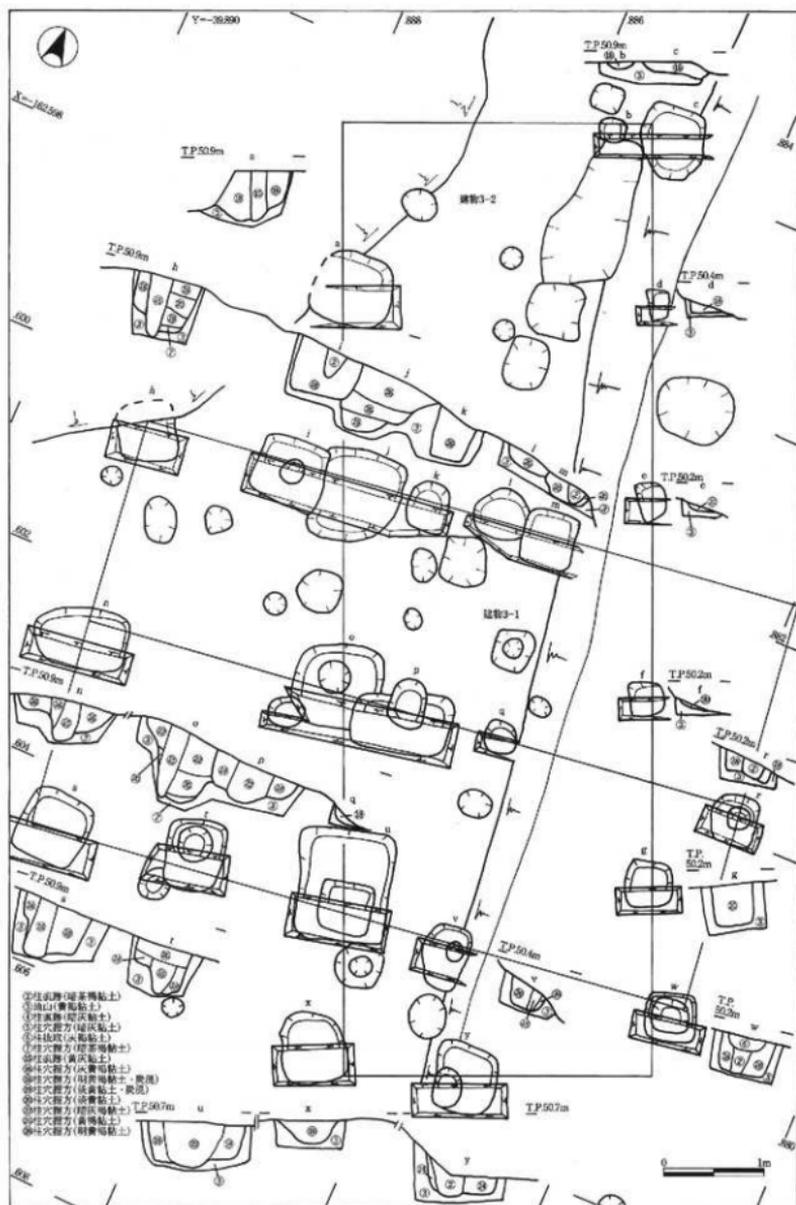


図49 建物3-1・3-2平面及び断面図

切られる場合のみである。矛盾するために図上で再度観察したところ、切りあいではなく、柱穴を意図的によけるよう接する形で掘削された可能性が高い。

掘立柱建物3-1は2・3区の境に位置する4×2間の東西建物である(図49)。主軸はやや振れておりA期と考える。東側は大きく削平され、段をなす。柱間は東西方向が2.1m、南北方向が1.7mを測る。柱穴は一辺0.5~1m、深さ0.5~0.8m程度と小ぶりである。掘り方は明黄褐粘土、残された柱は明瞭に柱痕跡を残す。柱穴出土遺物は須恵器小片である。

掘立柱建物3-2は掘立柱建物3-1に重なる5×1間の南北建物である(図49)。主軸はほぼ真北で、B期と考える。東側の柱は削平がはげしく痕跡のみである。柱間は東西方向が約3m、南北方向が1.9mを測る。柱穴は一辺約1m、深さ0.3~0.5m程度である。掘り方は明黄褐粘土、

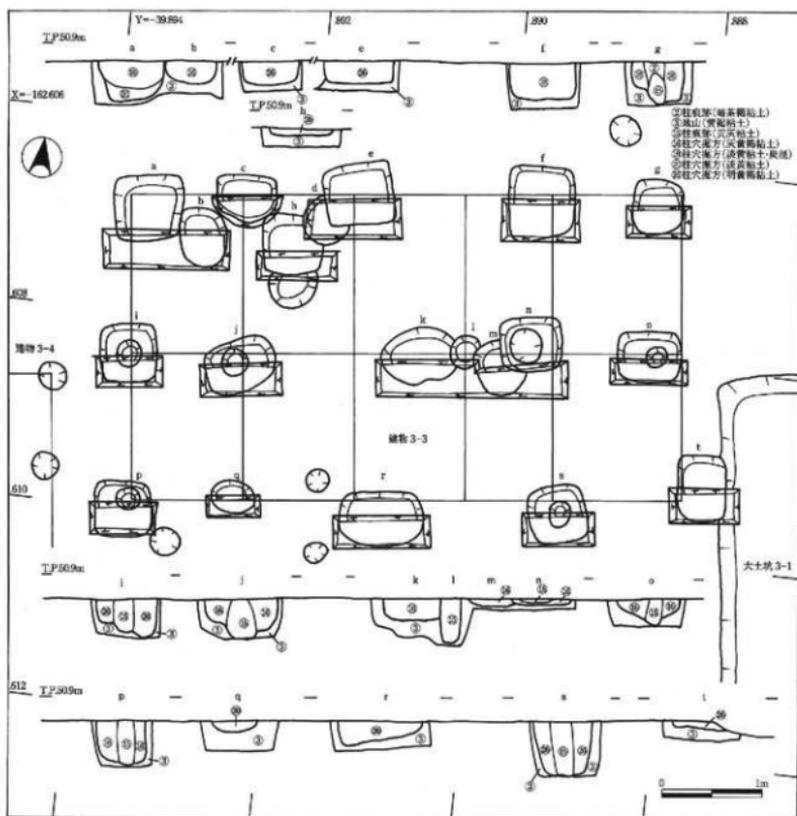


図50 建物3-3平面及び断面図

明瞭に柱痕跡を残すものはない。柱穴が折り重なるところにあり、櫛列の可能性もある。

掘立柱建物 3-3・3-4 は掘立柱建物 3-1 の西に並ぶ総柱の東西建物である (図 50・51)。主軸は東西で B 期と考える。柱間と柱穴の大きさにばらつきが目立つ。掘り方は明黄褐粘土、明瞭に柱痕跡を残すものは少ない。柱穴出土遺物は須恵器小片である。

井戸 3-1 は出土遺物とともに 11 節にまとめて詳述する (77 頁・102 頁参照)。

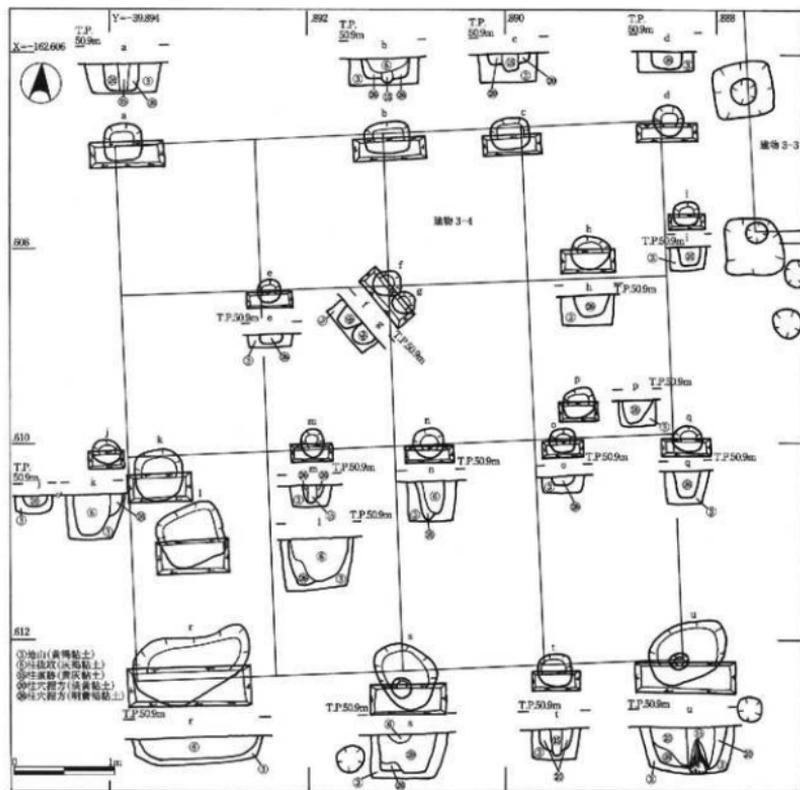


図51 建物 3-4 平面及び断面図

8 南部1の調査（4区・02年度調査区）（図版1・2）

3区の南調査区外は地山が急峻にくだり、西に向かって谷地形となる。今回調査地の南に建設された平尾小学校用地は谷を埋め立てて建設したものである。その谷の基点が4区付近にはじまる。

4区では西の谷におちる5条の東西溝を検出した。もっとも低い位置にある溝4-1が古く、南側斜面に刻まれた溝は後世にしゅんせつされたり、つくりたされていったものとする。斜面を登りきったところにある溝02-01は水田を区画する機能もかねる。

水田床土である遺物包含層は0.2~0.4m程度、地山に切り込まれた形で遺構面を形成し、地山のもっとも高いところは海拔51.5mをこえ、もっとも低いところとの比高は約1.5mを測る。

この地区では高い部分の遺構は削平を受け、掘立柱建物・井戸などは確認されていない。以下に遺構詳細を示す。

溝4-1は長さ19m以上、幅約1.5mの東西溝で上層は砂利混じりの灰褐粘土、下層は砂利混じりの黄灰粘土である。東側は削平されている。一部、最下層に灰白強粘土がみられ、流水と滯水が繰り返されていたと考える。溝内には握拳大の川原石が多数みられ、もともと側壁に石組みが採用されていたことを示唆するものの原位置を保っている石列はほとんどない。古代では官衙や寺院の区画溝に石組み溝はよくみられる。含まれる遺物は古代の須恵器・土師器に限られ、古代のうちに埋没したと考える（図53・54）。

溝4-2は溝4-1の南に位置する長さ22m以上、幅約4.5mの東西溝で、両端は調査区外へと続く。上層は砂利混じりの灰褐粘土、下層は砂利混じりの暗褐粘土である。一部、最下層に灰白強粘土がみられ、流水と滯水が繰り返されていたと考える。上層には中世の瓦器椀・白磁碗、平安時代の須恵器が含まれ、掘削が古代にさかのぼる可能性は否定できないが、おもに水田化がすすんだ後に機能した排水の溝と考える（図52・53）。

溝4-4は溝4-2の南に位置する長さ10m以上、幅約0.5mの東西溝で、東側は調査区外へと続く。埋め土は砂利混じりの暗褐粘土で、上面は溝4-2を覆う。一部、最下層に灰白強粘土がみられ、流水と滯水が繰り返されていたと考える。溝4-2のしゅんせつの過程で掘削された水田化の排水に伴う溝と考える（図53）。

溝4-3・4-5・4-6は溝4-2・4-4を切る幅約1.5mの南北溝である。埋め土は砂利混じりの暗褐粘土である（図53）。

溝02-01は溝4-5・4-6に切られる長さ22m以上、幅約2.5mの東西溝で、両端は調査区外へと続く。埋め土は砂利混じりの暗褐粘土である。溝4-2同様、掘削が古代にさかのぼる可能性は否定できないが、水田化に伴う排水溝と考える（図53）。

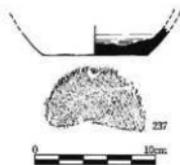


図52 溝4-2出土平安時代の須恵器

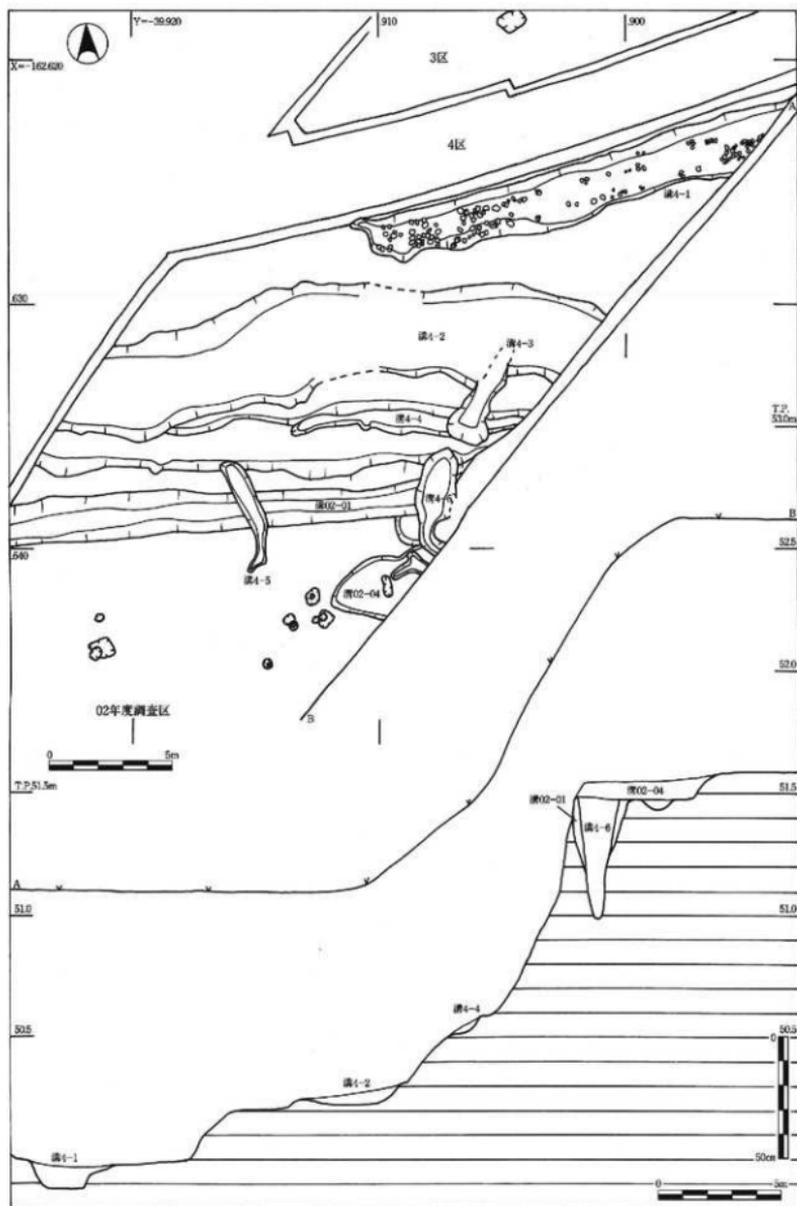


図53 4区遺構図及び断面図

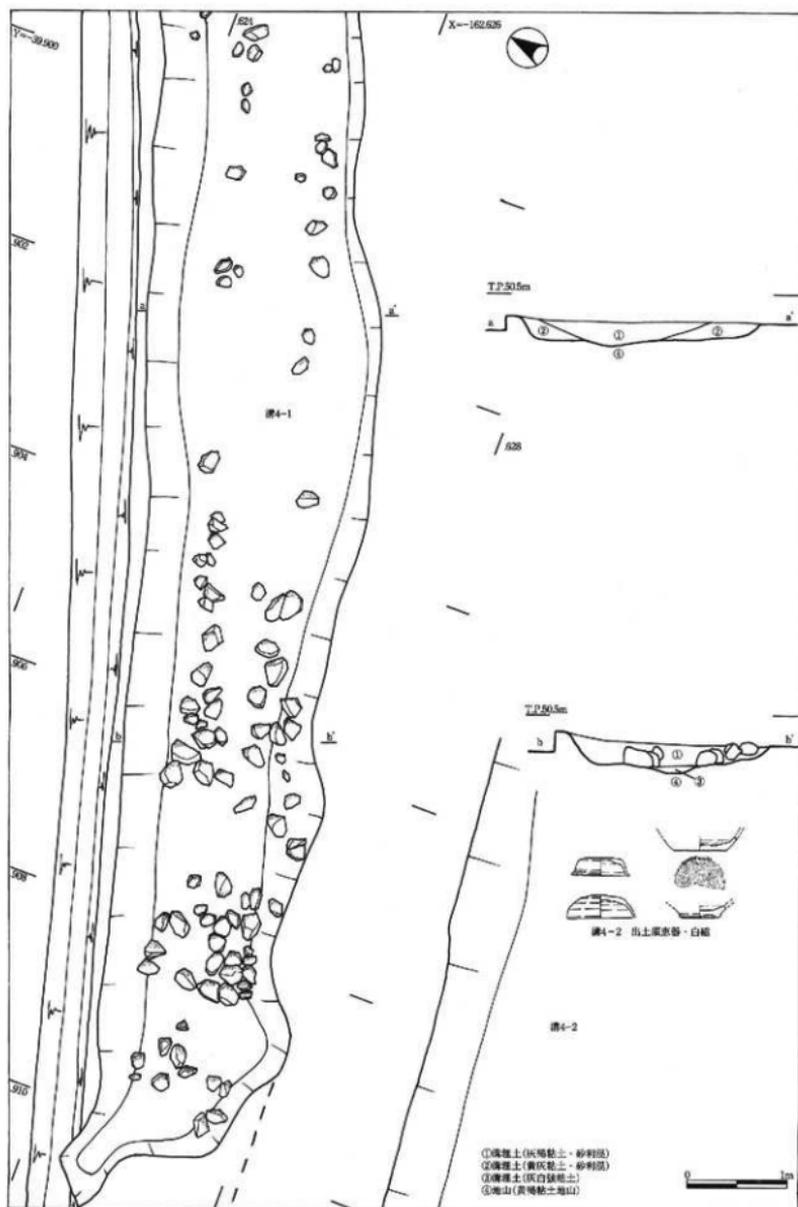


图54 溝4-1平面及び断面図

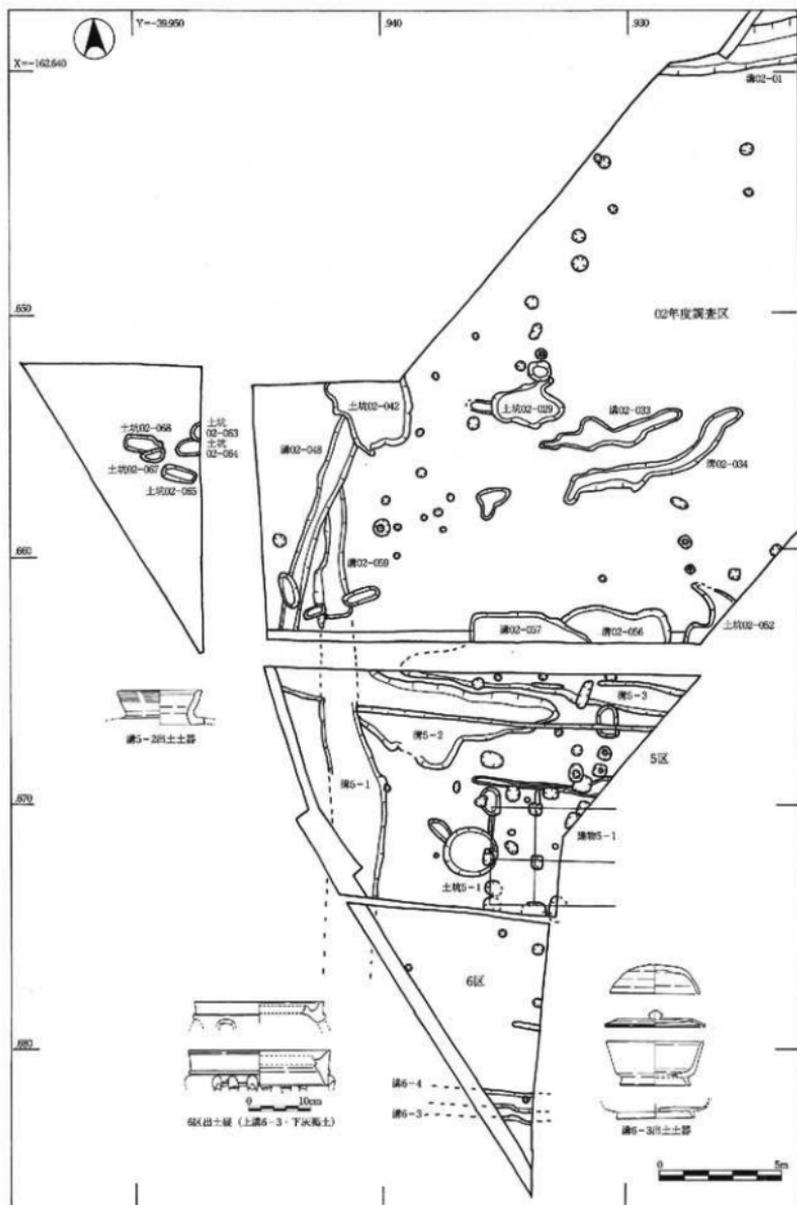


図55 02年度調査区・5区・6区遺構図

9 南部2の調査(02年度調査区・5区・6区)(図版2)

02年度調査区の南半は平坦化されており、西にむかってやや高くなる。水田床土である遺物包含層は0.2~0.4m程度、地山に切り込まれた形で遺構面を形成し、地山のもっとも高いところは海拔52mを測る。

その南側の5・6区では東西方向と南北方向に区画された溝をいくつか検出でき、掘立柱建物が見られた。瓦や遺物の散在も多く、生活の痕跡がさらに南西に続くことがわかる。以下に遺構詳細を示す。

溝02-059は長さ5m、幅約1mの南北溝で、南側は溝5-1に取りつき、長さ18m以上になると考える。埋め土は暗褐粘土である。北側は溝02-048に切られる。この溝も同じ機能の区画溝と考える。少量の土器が含まれ、流水と滞水が繰り返されていたと考える(図55)。

溝5-2は溝5-1に切られる長さ12m、幅約1mの東西溝である。その東に溝02-057・溝02-056・溝5-3があり、一連のものとする。埋め土は暗褐粘土で、これらの溝も同じ機能の区画溝と考える。流水と滞水が繰り返され、少量の須恵器・土師器が含まれる(図55)。

溝6-3・6-4は調査区南端で発見された長さ3m以上、幅約0.5mの東西溝である。一連のものだろう。埋め土は暗褐粘土で、これらの溝も同じ機能の区画溝と考える。少量の土器とともに須恵器碗が発見された(図55)。

掘立柱建物5-1は溝5-1の東で発見された2×2間以上の総柱建物である(図57)。主軸はほぼ東西方向でB期と考える。柱間は東西方向が2m、南北方向が2.1mを測る。柱穴は一辺0.6m、深さ0.5m程度と小ぶりである。掘り方は灰黄褐粘土、明瞭に柱痕跡を残すものはない。柱穴出土遺物は須恵器小片である。

土坑5-1は掘立柱建物5-1に切られる直径2.1m、深さ0.3mを測る円形土坑である。掘り底は平たく、暗茶褐粘土に覆われる。遺物は発見されていない(図57)。

土坑02-042は溝02-048を切る長径約2.6m、深さ約0.3mを測る不定形土坑である。掘り底は平たく、茶褐粘土に覆われる。遺物は発見されていない(図55)。

土坑02-029は土坑02-042の東に位置する長径2.5m、深さ0.2mを測る不定形土坑である。掘り底は平たく、茶褐粘土に覆われる。遺物は発見されていない(図55)。

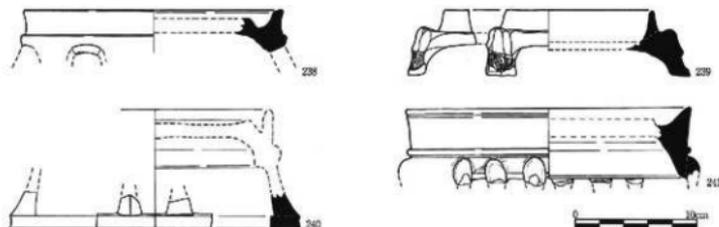


図56 今回調査出土硯

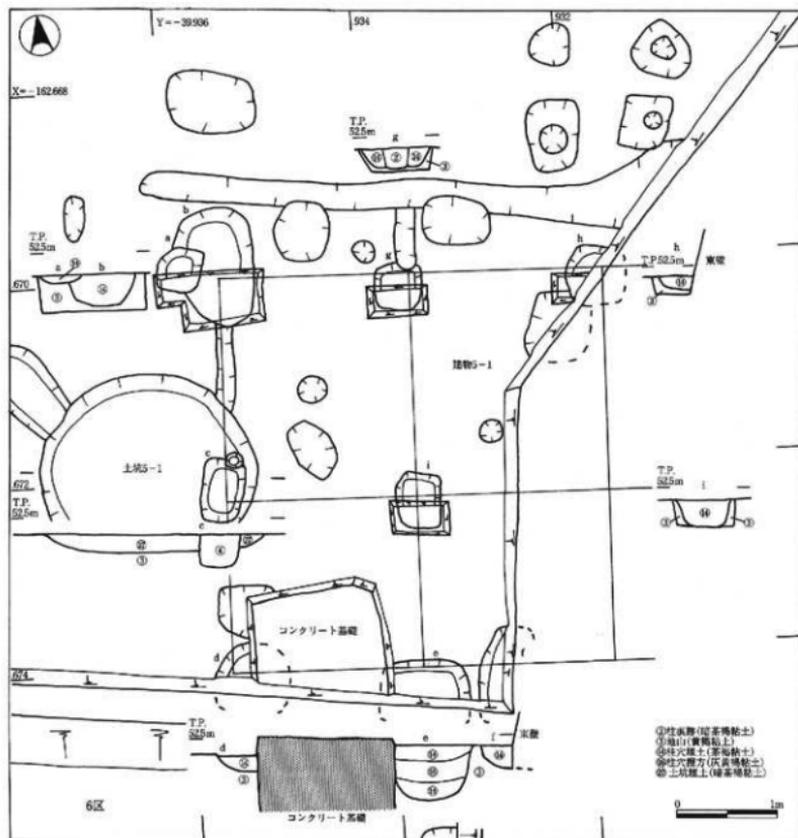


図57 建物5-1平面及び断面図

10 その他の調査（9区）（図版2）

今回調査区の現地調査中に2区中央の南側で民間開発があり、美原町教育委員会が対応した。開発は水路の建設で水田床土を掘削して、一部地山面に到達することがわかった。建設の過程で2区の遺構に連続する掘立柱建物や遺物が確認された。関連することとして、本書に概略を記す。

調査区は2区の南に位置し、ほぼ南北に長さが50m、幅1.5mである。地山の標高は49.5～50mで南にくだる。遺構は掘立柱建物・溝・土坑などが確認されている。

掘立柱建物9-1は南北に並ぶ4個の柱穴が確認された。北側と東側は調査区外へと続く南北棟と考える。西側に続くとすれば掘立柱建物9-2に切りあう建物となるが、南妻柱は調査区内に見られず、東にのびると判断した。柱間は1m、柱痕跡を確認できるものは1つだけで埋め土は暗茶褐粘土、遺物は含まれない。建物の軸はほぼ南北でB期と考える（図59）。

掘立柱建物9-2は掘立柱建物9-1の南で南北に並ぶ4個の柱穴が確認された。西側は調査区外へと続く南北棟と考える。東側に続くとすれば掘立柱建物9-1に切りあう建物となるが、南妻柱は調査区内に見られず、西にのびると判断した。柱間は1.6m、柱痕跡を確認できるものは1つ、埋め土は暗茶褐粘土、遺物は含まれない。建物の軸はやや振れ、A期と考える（図59）。

掘立柱建物9-3は掘立柱建物9-2の南に南北に並ぶ2個の柱穴が確認された。西側は調査区外へと続く東西棟と考える。柱間は1.3m、建物は西か東かにのびると考える。2つの柱穴ともに柱痕跡を確認でき、柱間は2.7m、埋め土は暗茶褐粘土、遺物は含まれない。建物の軸はほぼ南北でB期と考える（図59）。

掘立柱建物9-4は掘立柱建物9-3の南に位置し、南北に並ぶ6個の柱穴が確認された。東側は調査区外へと続く南北棟と考える。西側にのびる可能性もある。すべての柱穴で柱痕跡を確認でき、柱根を残すものもある。建物の軸はやや振れをもち、A期と考える。柱間は1.7m、埋め土は暗茶褐粘土、遺物は含まれない。遺構上面から不明鉄器が発見された（図58・59）。

溝9-1は掘立柱建物9-4の西側で発見された南北溝で、北側は西に、南側は東に振れをもち、中央で途切れる部分があるが、長さ6.4m以上、幅0.5m、深さ0.1mを測る。両端は調査区外へと続く。埋め土は暗灰粘土で遺物は含まれない（図59）。

溝9-2は溝9-1の南で発見された東西溝である。長さ1.5m以上、幅0.4m、深さ0.2mを測る。両端は調査区外へと続く。埋め土は暗灰粘土で遺物は含まれない（図59）。

溝9-3は溝9-2の南で発見された東西溝である。長さ1.5m以上、幅1.6m、深さ0.1mを測る。両端は調査区外へと続く。埋め土は暗褐粘土で遺物は含まれない。

溝9-4は溝9-3の南で発見された東西溝である。長さ1.5m以上、幅1.1m、深さ0.1mを測る。両端は調査区外へと続く。埋め土は淡灰褐砂で遺物は含まれない。これらの溝の南は遺構が散乱とし、遺跡の南端にあたる可能性もある。

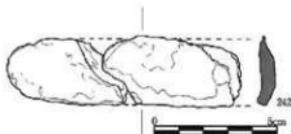


図58 9区出土鉄器

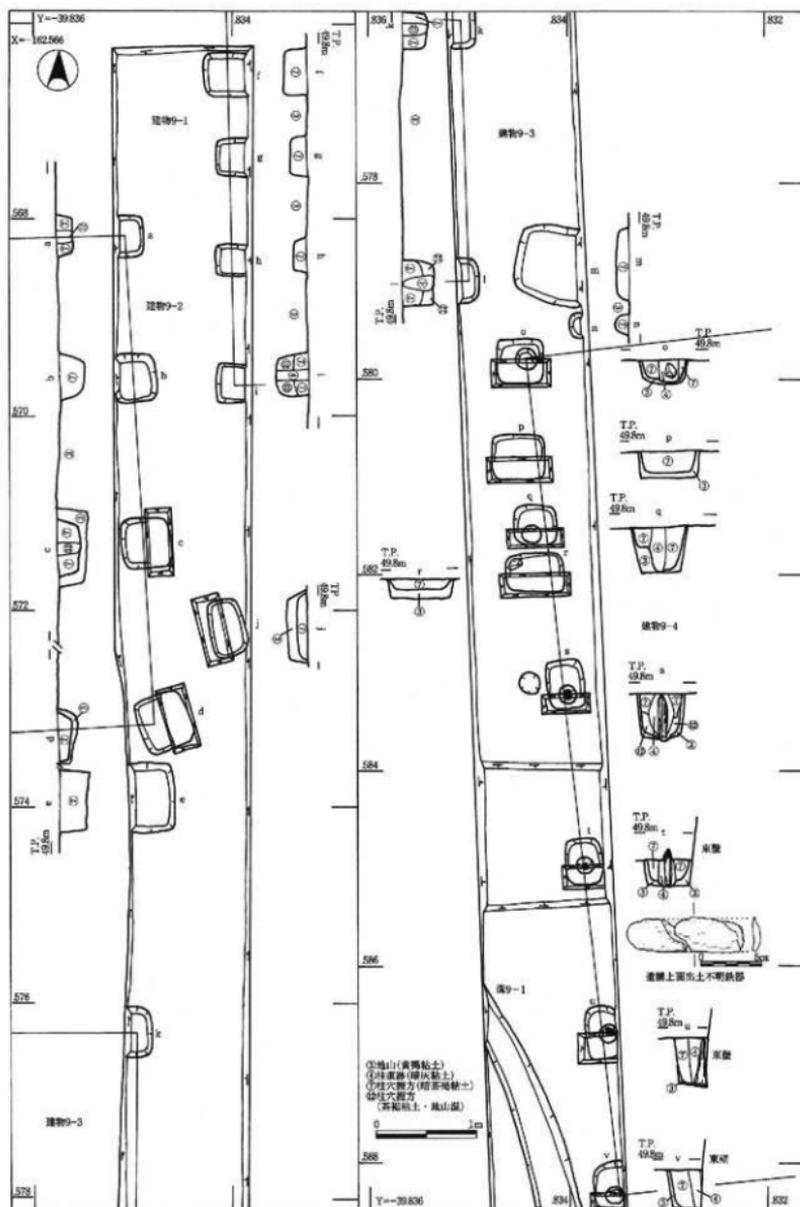


图59 建物9-1~9-4平面及び断面图

11 井戸の調査 (図版3)

今回の調査では4基の素彫り井戸を確認している。2つは古代のもので2区中央の井戸2-1と3区東北隅の井戸3-1である。あとの2つは近世のもので、1区東端の井戸1-1と井戸3-1のすぐ東で発見された井戸3-2である。前者は生活用水を確保するもので、後者は農兼用と考える。また、73・74年度調査時には4基の井戸が確認されており、水の確保に井戸が重視されていたことがわかる。

ただし、調査区東方には東除川があり、主な用水はここを水源としていたと考える。

調査区の東に流れる東除川は現在海拔46mのところには水際があり、当時はこの高さまで侵食されていないとしても、井戸の掘り底は海拔49mを下回っておらず、調査でも湧水のある砂礫層に達していないことがわかった。つまり、いずれの井戸も雨水をためておくものだったと考える。以上を踏まえ、井戸を構成する部材や包含していた遺物をあわせて詳述する。

井戸2-1は上面の直径が約2.5m、深さ2.6mを測る(図60)。上半はすり鉢状にすばまり約0.5mの深さで垂直に掘り込まれる。この垂直部分の直径は約1mでその内側に直径約1.5mの杉材を半裁してくりぬいた部材を井戸枠としてすえている。井戸枠の表面や上端は腐れ、ハツリ痕跡やケガキ線などは見られず、現存長は3.4mである。ただし、井戸枠の下部にはだぼ穴が残ることから、全長7m以上のくり舟を切断し、井戸枠に転用したようだ(図63)。

井戸2-1の上層は暗褐粘土で埋められていた。本来この部分には井戸枠の続きの部分が上部構造として地上までのびていたようだが、井戸廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。この埋め土は自然堆積によるものではなく、地山粘土ブロックを含むことから廃絶時に一気に埋め立てられたと考える。混入と思われる土師器・須恵器片が含まれ、もっとも新しいものは平城Ⅱ段階の特徴をもつ土師器高盤・須恵器広口壺などがある(図80)。

井戸2-1の下層は灰褐強粘土・暗灰強粘土など互層に堆積しており、その中に多くの土器・木器が含まれていた。井戸掘り方は、井戸枠の外側を地山粘土ブロックによって充填、その上部は暗灰粘土だった。この部分から須恵器杯蓋・身(463)・壺頸部小片(468)が発見された。造営年代を藤原宮期と示唆するが、混入したものである。

井戸枠内の下層には11個体の土師器甕と1個体の土師器杯、1個体の土師器碗がそれぞれ完形のまま投げ捨てられていた(図78)。いずれの容器も外面底部が煤けており、把手を欠落させるなど、日常に使われていたことがうかがえる。しかし、粗製で規格がそろふことなどから、祭祀のために用意され、役割が終わった段階で投棄された容器だろう。井戸枠内からはこれらの土師器以外に混入と思われる須恵器・土師器の小片が少量発見されている。いずれも藤原宮期頃(飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ段階)と考える。

井戸枠下層からは土器以外に多くの木器が発見された。木器には全長23.2cmと18.4cmの杉板の両端を尖らせ、切込みをいれた2種類の齋串が5本以上ある。その他、杓の柄と思われる棒状品、小型の曲物側板、チョウナの柄、直径12.4cmで器高11.6cmを測るヒノキをくり抜き、内側に漆

を塗ったコップ状木器などである(図79)。以上より、井戸2-1は680年前後につくられ、720年前後に廃絶したものと考える。

井戸3-1は上面の直径が約3.8m、深さ3.4mを測る。上半は深さ1.2mまですり鉢状にすぼまり、一辺0.8mの深さで隅丸方形に垂直に掘り込まれる。この垂直部分の内側には長辺0.6mのヒノキ板材を組み上げて井戸枠としてすえる(図60)。井戸枠は最上段を1.1m程度の板材で、繰り込みを入れて井桁状にする。厚みと幅は不ぞろいであり、転用材と考える。本来、この上方にも井桁があったのだろうが腐れた木片がみられた(図64)。

下から1~4段の井戸枠は長辺約0.8m、短辺約0.3m、厚さ約6cmの板材両端を凸凹形に加工して枘形に組んだ頑丈な構造である(表1)。各板材はハツリ痕跡が明瞭に残り、保存状態もよい(図65・66)。

井戸3-1の上層は暗褐色粘土で埋められていた。井戸2-1同様、本来この部分には井戸枠の続きの部分が上部構造として地上までのびていたようだが、井戸廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。この埋め土は自然堆積によるものではなく、地山粘土ブロックを含むことから廃絶時に一気に埋め立てられたと考える。混入と思われる土師器・須恵器片が含まれ、もっとも新しいものは平城Ⅱ段階の特徴をもつ須恵器広口壺(489)・(490)などがある(図81)。

井戸3-1の下層は青灰強粘土・暗灰砂などが互層に堆積しており、遺物はほとんどなかった。井戸掘り方は、井戸枠の外側を地山粘土ブロックによって充填、その上部は灰白粘土などがみられた。井戸枠内の下層からは混入と思われる須恵器(481)・土師器片(482)が少量発見されている。いずれも上層出土遺物と同じ型式で下層の埋め土も廃絶時のもののようだ。

井戸枠に使われた板材はすべてヒノキで、東西南北の四辺に一枚ずつ、四段の計16枚がみつかった。厳密に規格化されていることから、転用材ではないと考える。板材の中には辺材部分が残されており、年輪年代測定法によって伐採年代の測定を試みた(付載1 117頁参照)。

その結果、一段目の3枚、二段目と四段目にそれぞれ1枚ずつ、計5枚の板材において年代計測が可能であった。他は、辺材部分が残されておらず、計測していない。計測結果は667・672・675年に $\pm\alpha$ 年というグループと695・704年に $\pm\alpha$ 年というグループに分かれた。

樹齢500年前後のヒノキは辺材から樹皮までの厚みが2.5~3cm程度で、20~30年分の年輪をもつことがわかっていて、今回発見の板材は年輪の密度や形状から樹齢が若いものはないと推定できる。さらに、計測した板材は辺材の厚みが1~2cm程度残っており、個々に伐採年まで加味すべき年数を推定することができる。以上を踏まえると前者のグループは680年代に伐採年を求められ、後者のグループは710~720年頃に伐採年を求められる。

この年代差が、板材の再利用や差し替えを意味するのか、偶然のものであるかは結論が出ない。ただし、もっとも新しい720年頃に伐採された一段目西側に使われていた板材をもって、井戸造営年代の一端とすることができる。井戸3-1から発見されている土器片の型式は飛鳥V~平城Ⅱ段階である。これらは井戸廃絶期の埋め土に混入されていたもので、この井戸は平城Ⅱ段階に

造営され、平城Ⅱ段階の内に廃絶したことがうかがえる。

井戸1-1は1区の中央で発見された直径約3m、深さ4.6mを測る素彫り井戸である。上半はすり鉢状にすばまり約1mの深さで垂直に掘り込まれる。この垂直部分の直径は約0.8mで最下層はガマになっている(図62)。

井戸1-1上層は暗褐色土で埋められていた。本来、井戸枠などの上部構造はなかったと考える。埋め上は自然堆積ではなく、地山粘土ブロックを含むことから廃絶時に一気に埋め立てられたと考える。混入と思われる陶磁器片のうち、もっとも新しいものは江戸時代前期の特徴をもつ。井戸1-1下層は青灰強粘土・暗灰強粘土などが互層に堆積しており、その中に遺物はほとんどみられなかった。

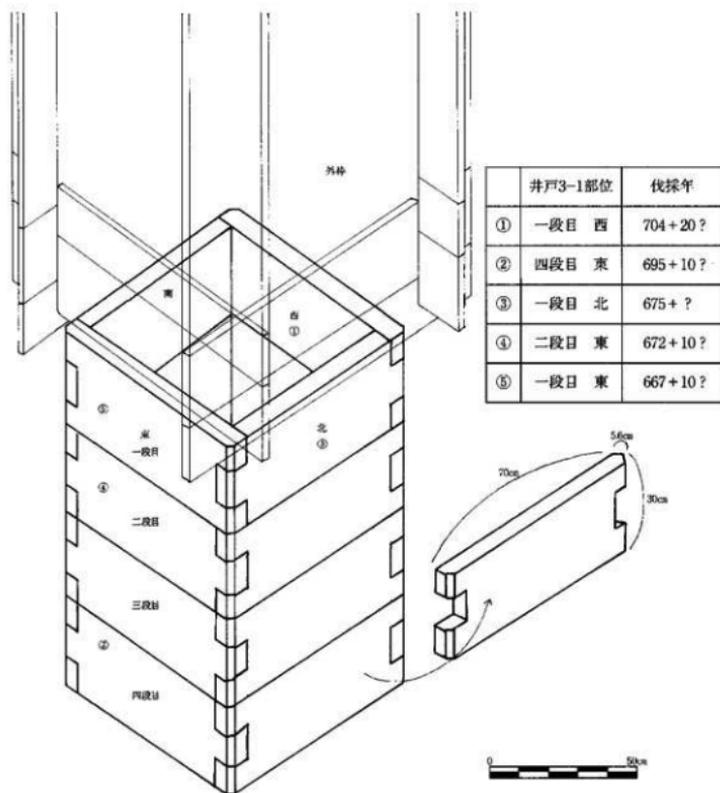


図61 井戸3-1井戸枠復元図

以上より、近世の農業用井戸であることがわかる。現在、この井戸の上面にコンクリート水路が構築されており、水ための機能が喪失していったと考える。

井戸3-2は3区北端の里道の脇で発見された直径約1m、深さ0.4mを測る肥溜め状の井戸である。上半は削平されており、井戸の形態にそって、杉材による木桶がはめられている(図62)。混入と思われる陶磁器片のうち、もっとも新しいものは江戸時代後期の特徴をもつ(522)。以上より、この井戸も近世～近代の農業用井戸であることがわかる。

井戸3-2は暗茶褐色粘土で埋没しており、上面や井戸中より数多くの瓦が発見された。瓦は井戸枠などの上部構造で、近代になって加えられたと考える。埋め土は自然堆積の砂利を含み、埋め立てられた土ではない。

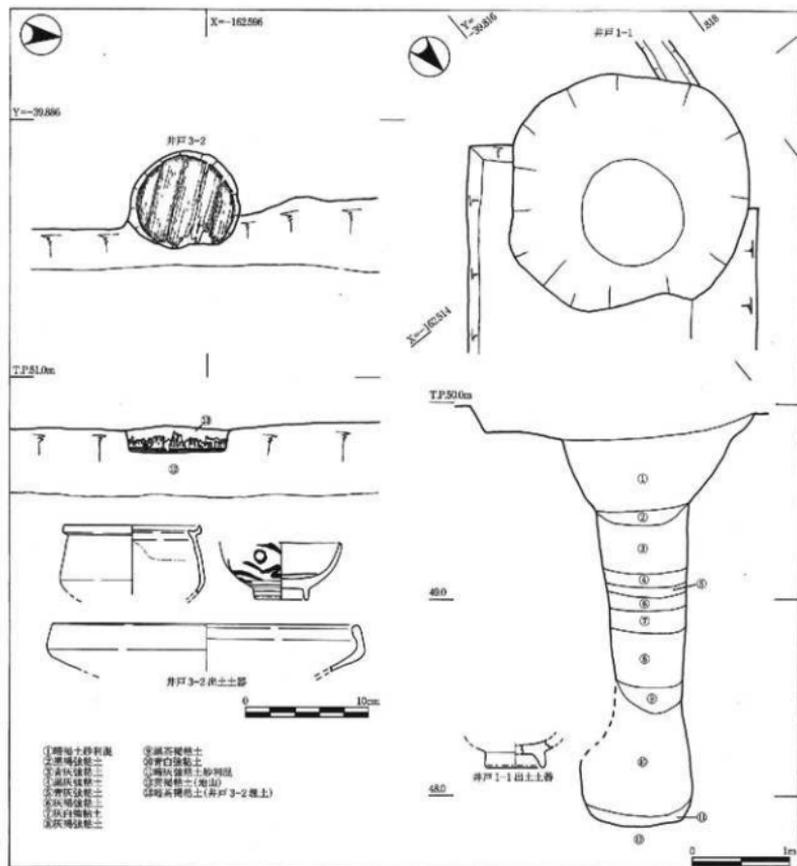


図62 井戸1-1・3-2平面及び断面図



圖63 井戸2-1 井戸枠

| 挿図番号 | 井戸枠段数 | 方角 | 法量 (cm) | | | 挿図番号 | 井戸枠段数 | 方角 | 法量 (cm) | | |
|------|-------|----|---------|------|-----|------|-------|----|---------|------|-----|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | 長さ | 幅 | 厚さ |
| 247 | 一段目外枠 | 東 | 112.6 | 17.1 | 3.7 | 257 | 二段目 | 南 | 77.4 | 28.7 | 5.9 |
| 248 | 一段目外枠 | 西 | 114.1 | 24.7 | 4.1 | 258 | 二段目 | 北 | 76.4 | 29.5 | 5.2 |
| 249 | 一段目外枠 | 南 | 110.1 | 25.0 | 3.8 | 259 | 三段目 | 東 | 77.8 | 29.5 | 6.7 |
| 250 | 一段目外枠 | 北 | 111.7 | 17.7 | 6.7 | 260 | 三段目 | 西 | 76.0 | 28.5 | 5.6 |
| 251 | 一段目 | 東 | 77.1 | 28.3 | 5.9 | 261 | 三段目 | 南 | 77.9 | 29.9 | 6.8 |
| 252 | 一段目 | 西 | 77.1 | 29.6 | 6.2 | 262 | 三段目 | 北 | 76.4 | 29.1 | 6.8 |
| 253 | 一段目 | 南 | 75.1 | 28.2 | 6.0 | 263 | 四段目 | 東 | 77.4 | 30.0 | 7.1 |
| 254 | 一段目 | 北 | 77.0 | 28.0 | 6.0 | 264 | 四段目 | 西 | 76.6 | 30.1 | 7.0 |
| 255 | 二段目 | 東 | 75.5 | 29.3 | 5.7 | 265 | 四段目 | 南 | 77.6 | 30.1 | 7.1 |
| 256 | 二段目 | 西 | 75.5 | 28.2 | 6.5 | 266 | 四段目 | 北 | 77.2 | 29.7 | 6.8 |

表1 井戸3-1出土部材計測表

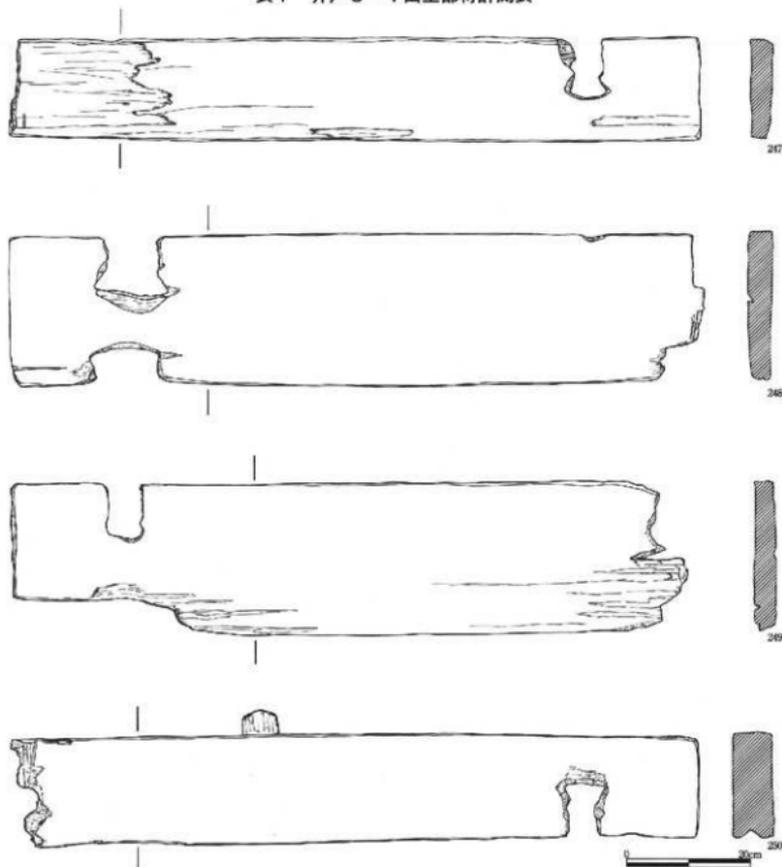


図64 井戸3-1上層井戸枠

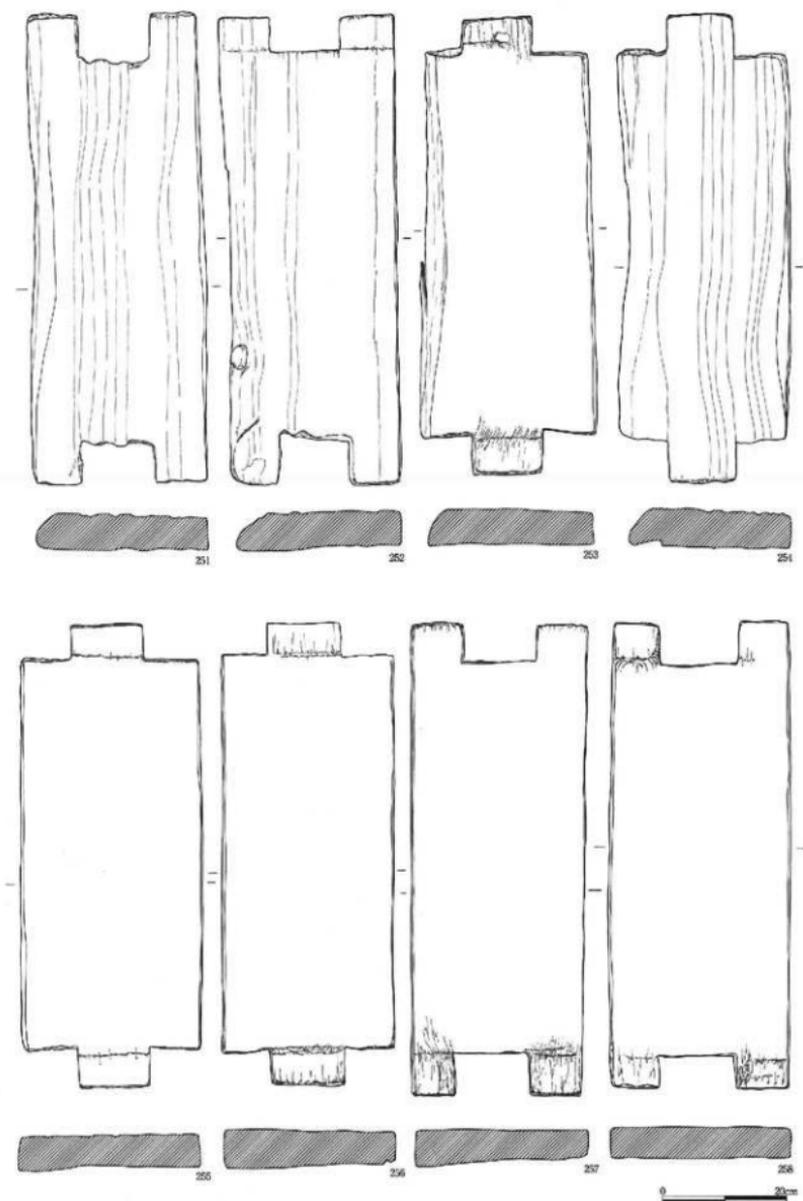


図65 井戸3-1下層井戸樫(1)

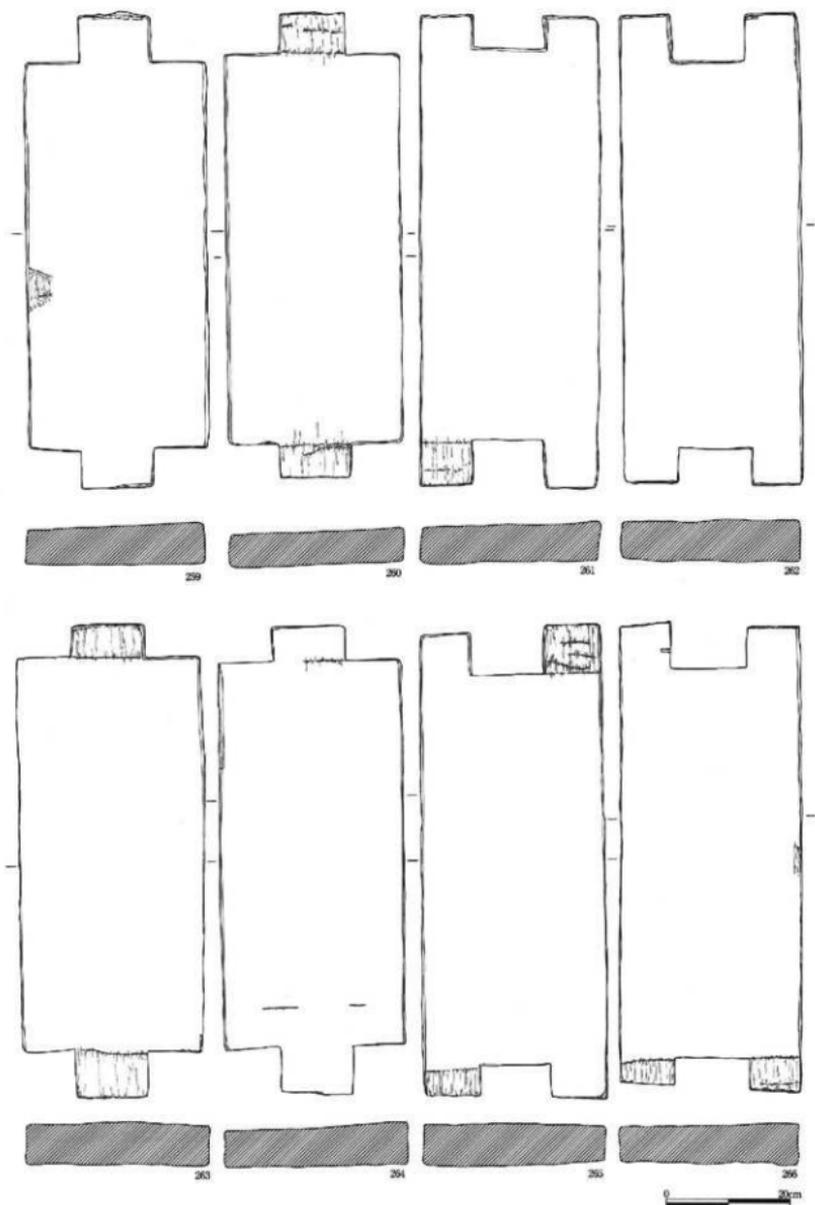


図66 井戸3-1下層井戸枠(2)

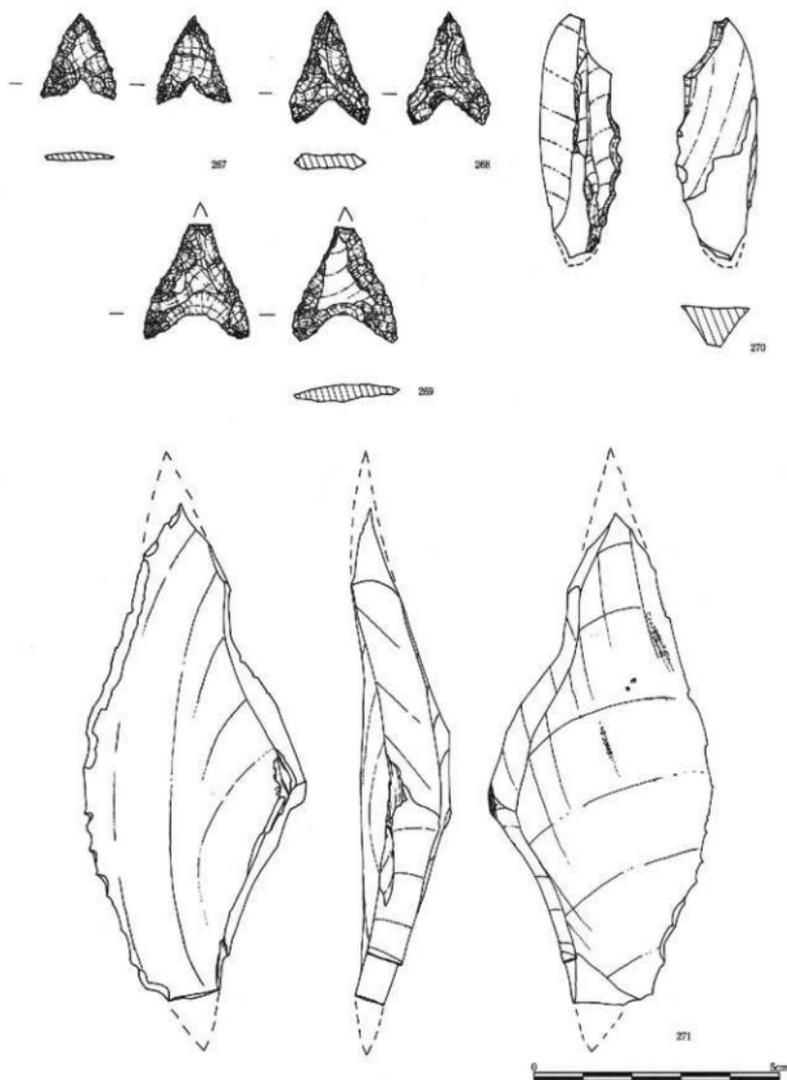


図67 今回調査出土打製石器

12 出土遺物

今回調査ではコンテナ約80箱程の遺物が発見された。大半は土器類で飛鳥・奈良時代のものである。土器のほかになわずかにサヌカイト製石器、剥片などがある。石製品・鉄器は1点ずつ、木器は井戸に伴うものと掘立柱建物の柱根である。

a 飛鳥時代以前の遺物 (図版4)

全長360mに及ぶ細長い調査区の各地からサヌカイト製打製石器と石器製作に伴う剥片が発見された (図67)。また、1・2区を中心に円筒埴輪片が多数確認された (図68)。いずれも遺構に伴うものではなく、小片である。石器時代の地表面は後世の土地改変で削平が著しく、遺構は残されていないと考える。同様に、埴輪の発見から1・2区北部付近の高所にかけて古墳があったと理解したい。現在はその痕跡は失われている (図21)。

石器はすべてサヌカイト製で、旧石器時代のものとしてナイフ形石器と翼状剥片がある (270)・(271)。両者の端部は欠損しており、最大長は不明であるが、前者の現存長は5.1cm・最大幅は1.8cmである。後者の現存長は10.1cm・最大幅は4.4cmである。

その他、縄紋時代後・晩期の特徴をもつ石鏃が3点発見されている (267) ~ (269)。いずれ

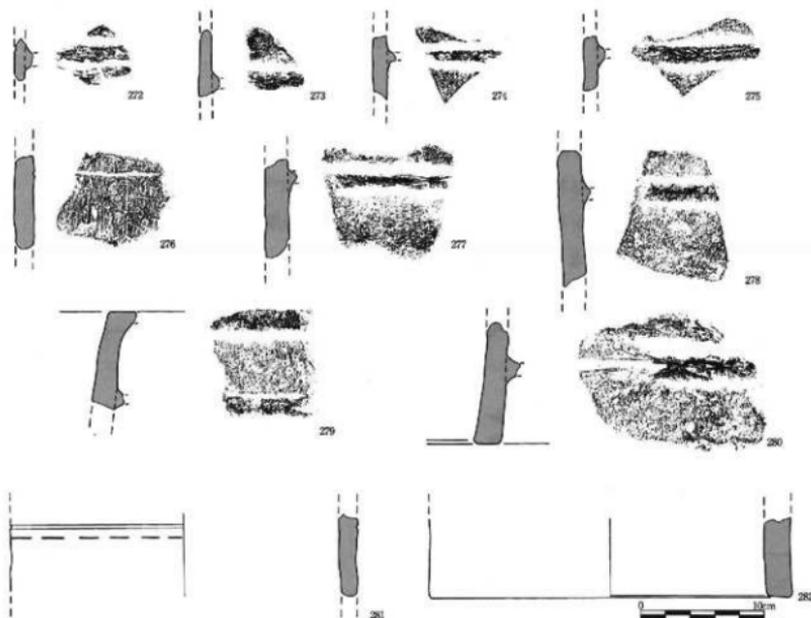


図68 今回調査出土円筒埴輪

も凹基式で丁寧に左右対称の三角形の形態をつくり出す。左右の辺は直線にならず、基部にふくらみをもつ特徴がある。もっとも小さな1点は現存長が1.8cm、最大幅は1.6cmで3区の柱穴から発見された。もう1点は現存長は2.3cm、最大幅は1.7cmで8区の柱穴から発見された。残る1点は頂部を欠損し、現存長は2.5cm、最大幅は2.2cmで4区地山上面から発見された。

埴輪は円筒埴輪の小片ばかりである(272)～(282)。突帯は太い粘土紐を貼りつけたもので、その上下は丁寧にナデ仕上げされる。円筒部は細かい縦ハケが密に施される。口縁部の破片は口径を測れるものではないが、やや開き気味で頂部を平らに仕上げ、外側につまみ出す。口縁端部より約10cm下に最上段の突帯を設ける。底部は体部とほぼ同じ太さでやや内傾させる。底部端から約10cm上に最下段の突帯を設ける。底部外径のわかるものは1点のみで約29.5cm、体部外形のわかるものも1点のみで約28cmを測る。すべて明赤褐色の素焼きで、黒斑を有する。古式の埴輪と考えるが、付近ではこの時期の古墳の発見例はない。注目すべき資料と考える。

b 飛鳥・奈良時代の遺物 (図版4～7)

飛鳥～奈良時代の遺物は今回調査区ではもっとも多く、大半は須恵器・土師器の食器類と貯蔵用の甕・壺類である。これらの中には2点の墨書土器と漆塗、その蓋にされたものがある。その他、平瓦・丸瓦・軒瓦・道具瓦があり、陶硯、土師器カマドなどの特殊用途の土器、鋳型片と鍛造用フイゴ羽口がある。その他、腰帯飾りの石製丸柄と用途不明鉄製品が1点ずつある(図69～81)。

発見された土器の年代観は平尾遺跡北部の調査で発見された土器群と組成・形態の特徴が共通するもので少量の飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階のものを含み、大半が飛鳥Ⅳ・Ⅴ(平城Ⅰ)段階のものである。もっとも新しい時期の土器は井戸の埋め土に含まれるものなどで平城Ⅱ段階に及ぶ。

このことから七世紀中頃から八世紀前半までの100年足らずの期間、営まれた遺跡と考える。

杯蓋は口縁部に返りがなく、端部を丸く仕上げる(283)～(286)。外面天井部はヘラ切り

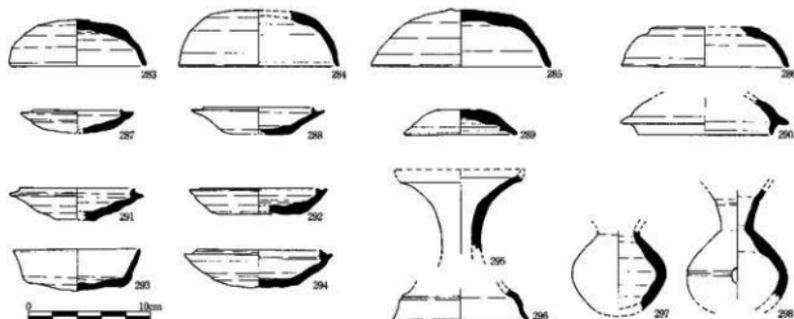


図69 今回調査出土須恵器(1)

後未調整のものが多く、粗く回転ヘラ削りするものもある (283)。口径は11.0cm～14.4cm、器高は3.3cm～4.7cmである。

杯蓋Gは口縁部に内傾する浅い返りをとどめる器形である (289)。頂部に宝珠つまみをもつと考えられ、口径は12.8cmを測る小型品である。

杯身Hは杯蓋Gにつくりが共通するもので、立ち上がりはいずれも短い。底部ヘラ切り痕を明瞭に残すものと (287)・(288)、未調整のもの (291)・(292)・(294) がある。口径約7cm～10cm、器高1.9cm～3.1cmを測る。

杯身Gは粗く平らにした底部にヘラ切り痕が残る (293)。立ち上がりは直線的でやや外反し、口縁端部は丸くつくり出す。口径11.3cm、器高3.4cmを測る。

これらの蓋杯は概して小型化が進んだものばかりで、器厚が厚く、口縁部のみ薄くつまみ出す特徴などから飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階のものと考えられる。

高杯は1点のみ発見された。脚端部を丸く仕上げ、底径11.0cmを測る小型品である (296)。

ハソウは頸部が細く直立し、口縁部が大きく開く形態である (295)・(297)・(298)。体部外面は粗くナデられるのみで波状紋などの装飾はない。体部中央と頸部に沈線を施す1点は内面に黒漆の付着があり、漆壺に転用されている (298)。高杯・ハソウも形骸化・小型化が進んだ末期的様相であり、飛鳥Ⅳ段階にはみられなくなることから、その直前のものと考えられる。

壺蓋は天井部がほぼ平らで口縁部を外側に開くもの (299)～(301)、高い宝珠つまみをもち、平らな体部に口縁部のみ直角に折り返すものがある (302)。後者の1点は口縁端部を欠損するが、口径約13.9cmを測る。

壺蓋は口縁部を不規則に焦がす灯明皿に転用されたもの (301)、口縁部内側に漆が付着する漆壺の蓋がある (299)。口径8.5cm・器高1.8cm (299)、口径9.2cm・器高2.9cm (300)、口径11cm・器高3.1cmを測る (301)。

杯蓋Bは大型が目立つ。痕跡器官としての返りがあるものが少量、無いものが大半をしめる。これは飛鳥Ⅳ段階の組成に共通する。返りのあるものは宝珠つまみがやや扁平で、傘形の高い器高をもつ (304)・(305)。返りはつまみ出されたもので、外面天井部は広範囲にヘラ削りする。口径15.8cm・器高2.3cm (304)、口径16.4cmを測る (305)。

返りのないものは口縁部をゆるく屈曲させ、端部を下方に折り返すもの (309)・(310)・(312)～(314)、体部・口縁部がほぼ同じ厚みで水平になり、端部のみを垂直に折り返すものがある (306)～(308)・(311)～(314)。口縁部を屈曲させるものには高い宝珠つまみをもつものもある。口径は14cm～16.2cmを測る。その一方、体部が扁平で、器高が低いものはやはり扁平な宝珠つまみをつける (311)・(314)。口径は12.8cm～16.9cmを測る。

杯身Aは底部が平らで、立ち上がりは体部は斜めに直線的に開く立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。底部と体部の境を回転ヘラ削りするものもある (316)・(317)。形態は共通するものの口径は9.8cm～17.8cmで器高は2.8～4.0cmと、大・中・小の多様がみられる (315)～(323)。

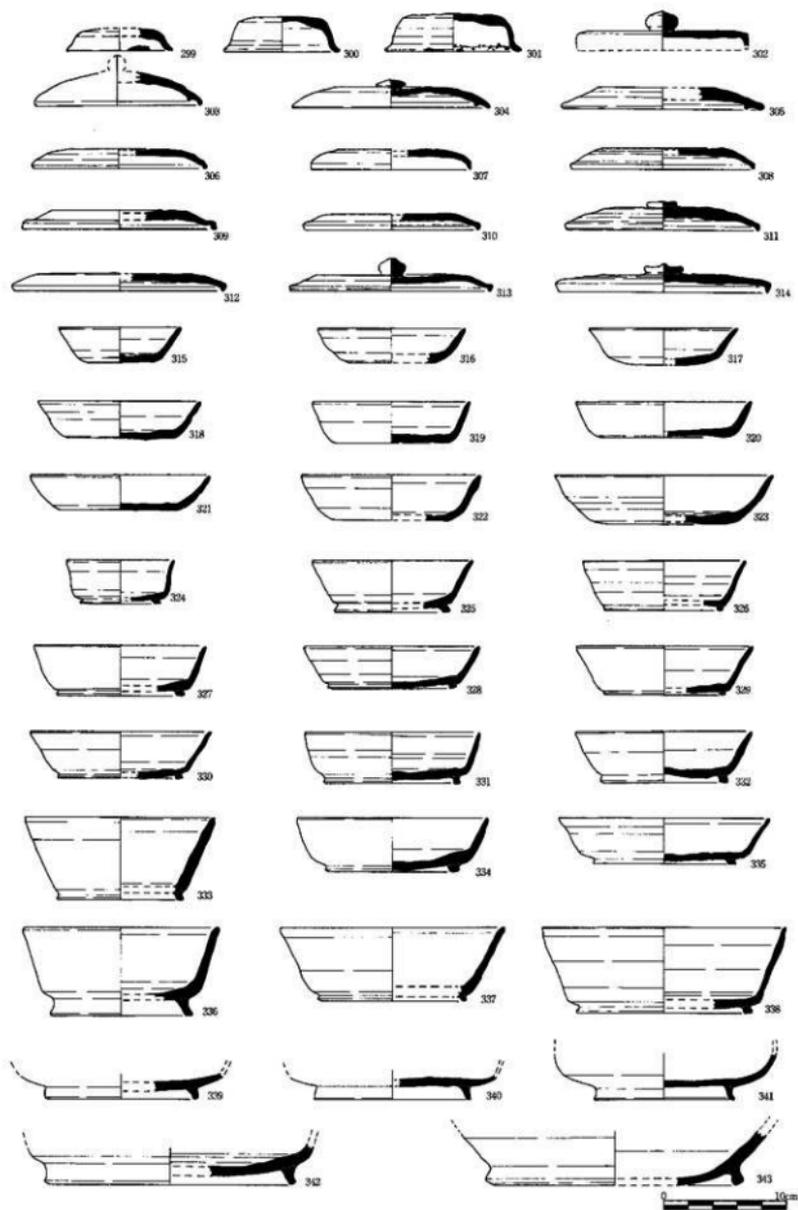


図70 今回調査出土須恵器（2）

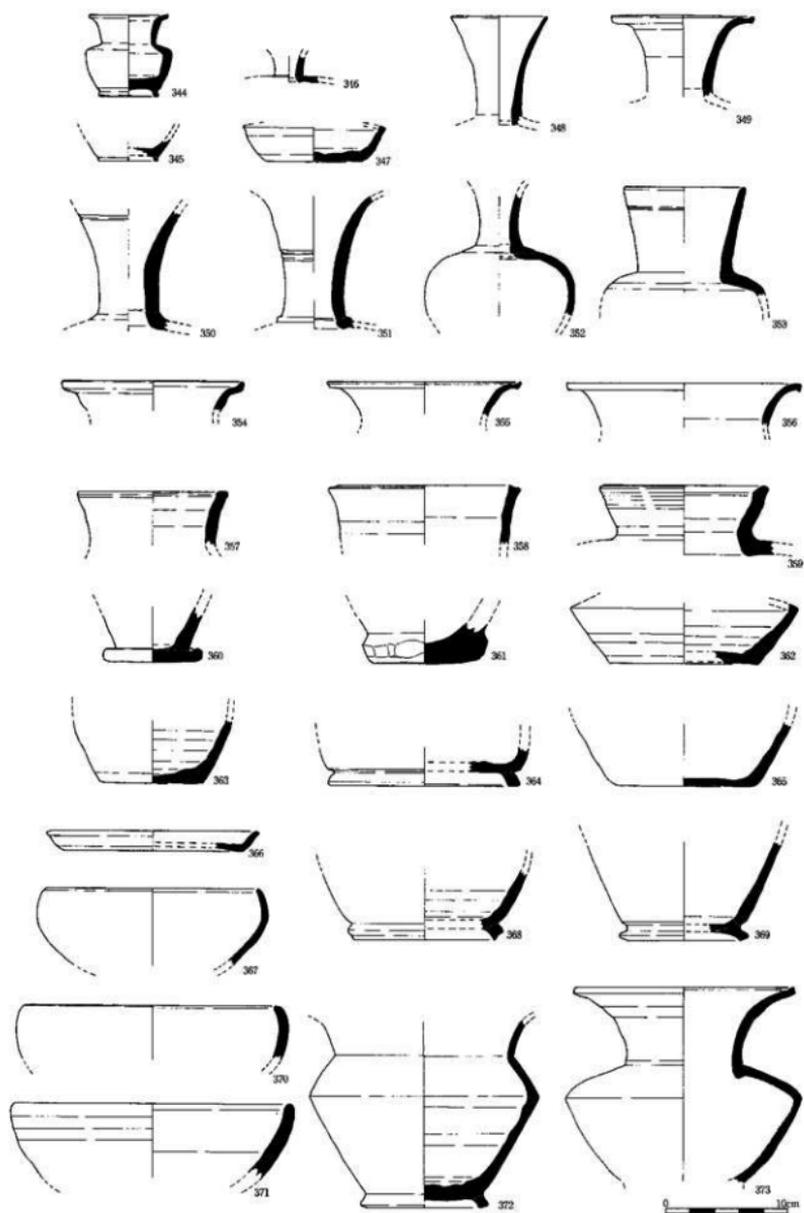


圖71 今回調査出土須恵器(3)

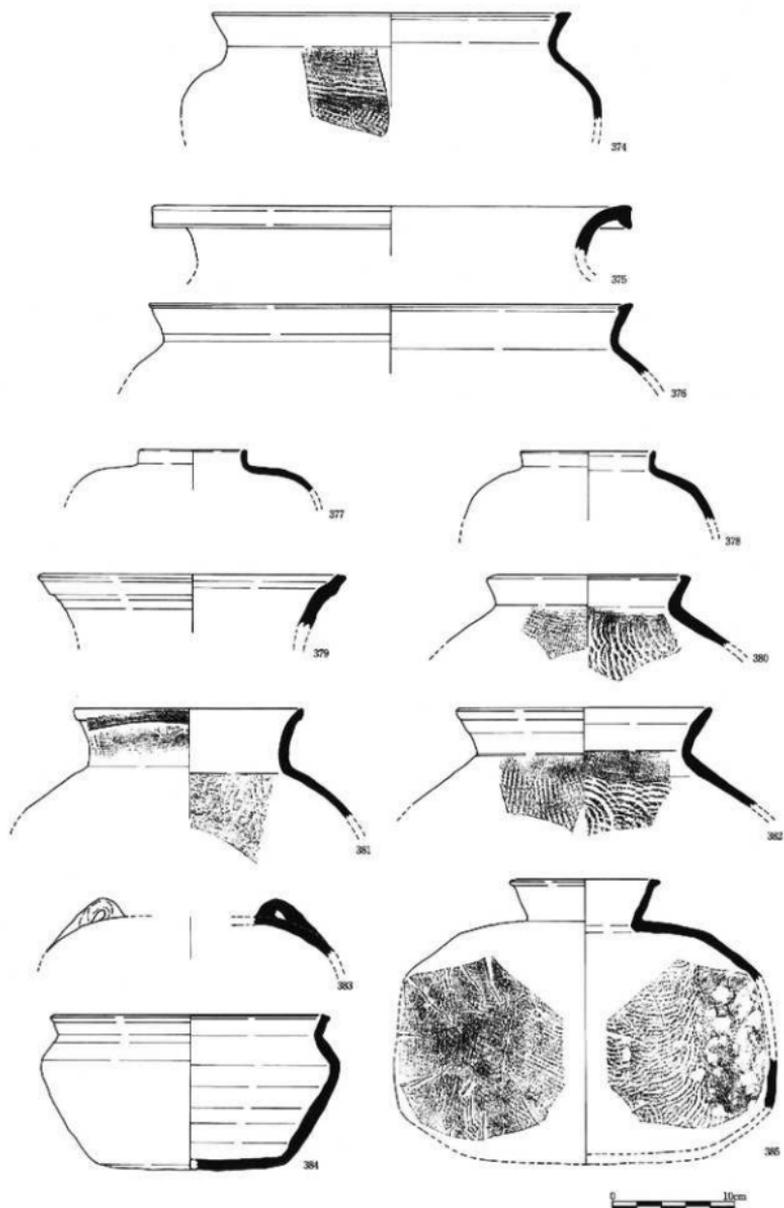


図72 今回調査出土須恵器（4）

杯身Bは底部に高台をつけ、立ち上がりは直線的に開く。器高3～4cmの小型品(324)～(332)・(334)・(335)、6～7cmの中型品がある(333)・(336)～(338)。もっとも小型のものは口径8.6cm・器高3.6cmを測る(324)。また、高台がしっかりと開く大型品もあり、鋭角的で金属器模倣がうかがえる(340・341)。高台径は11.2cm～24.2cmを測る。底部から立ち上がりの屈曲部分が高台に接することなく、高台が一回り小さい径である特徴はこの器種の中でも古式の様相を示す。

須恵器の皿はほとんどない。皿Cは器高が低く、立ち上がりは直線的に開き、口縁部は平たい(366)。口径18.4cm、器高1.9cmを測る。

壺には短頸壺と長頸壺があり、それぞれの小壺がある。直立する短い口縁部を作り出す広口壺の壺Aは肩が張り、外面を丁寧にナデ仕上げする。肩部に杯蓋などを置いて重ね焼きした痕跡が残る1点は、口径8.5cmを測る(377)。他の1点は口径10.8cmを測る(378)。

長頸壺は頸部のつけ根が狭くすばまって口縁部がラッパ状に開く壺L(348)～(352)、頸部のつけ根が広く、口縁部がラッパ状に開く壺H(354)～(356)・(372)・(373)、頸部のつけ根が広く口縁部までほぼ直立するものがある(353)。頸部が直立する長頸壺は口径9.6cmを測る。

頸部のつけ根が狭く、口縁部がラッパ状に開く壺Lは、球形の体部で外反する頸部の中央に沈線をもつ。体部と頸部の接合部がわかるものは、接合部の処理が粗雑である(352)。壺Lには口縁部が直線的で端部を丸く仕上げるもの(348)、口縁部がラッパ状で端部を屈曲させ、真上につまみ上げるもの(349)、口縁部がラッパ状で端部を下へつまみおろすものがある。口縁部が直線的なものは口径9.8cmを測り(348)、その他は14.6cm～19.4cmを測る。

頸部のつけ根が広く、口縁部がラッパ状に開く壺Hは算盤玉形に張り出した体部でしっかりと踏ん張った高台をもつ(372)・(373)。この器種は平城Ⅱ段階に流行するもので今回調査区ではもっとも新しい時期である。

壺の底部は断面がハ字形に踏ん張る高台のもの(364)・(368)・(369)、平底のもの(363)・(365)がある。平底の1点は底部をへら削りしたままで(363)、もう1点は削った後を丁寧にナデ消す(365)。杯・鉢の底部と峻別しにくいものもある(342)・(343)。球形に近い肩部で、粘土紐による耳を左右につけた壺Nは内面も丁寧にナデ仕上げする(383)。

壺Lには小型もあり、蓋を伴う。特殊な用途がうかがえる。口縁部はラッパ状に外反し、端部を丸く外側に開く(344)。口径6.4cm、器高6.7cm、高台径4.6cmを測る。同様の形態と考える底部細片があり、高台径4.8cmを測る(345)。横瓶は直線的に開く厚い口縁部をもち、口縁端部は平らにする。体部外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキ、内面には閉塞したときの粘土板痕跡と指頭圧痕が明瞭に残る(385)。口径10.4cmを測る。

横瓶の口縁部は直立気味に開き、端部が平らなものと(357)、短く厚い口縁端部を平らにして内傾するものがある(359)。口径は9.9cm(357)、13.0cmを測る(359)。

平瓶は大小ある。底部は平底で、扁平な算盤玉形の体部となる。小型は底径7.8cm(347)、大型は底径12cmを測る(362)。

こね鉢は体部の器厚が厚く、直線的に開くコップ形で、底部は粘土円盤による(360)・(361)。口縁部は直立し、端部を平らに仕上げる(358)。底部径は8cm程度、厚さは1cm程度を測る。

鉢は底部がとがり、体部が丸く口縁部を内傾させる鉄鉢形である(367)・(370)・(371)。鉢の口径は17.2cm(367)、20.8cm(370)、22.1cm(371)を測る。胎土が密で焼きがよく、外面は丁寧にヘラで磨き、滑らかにする。

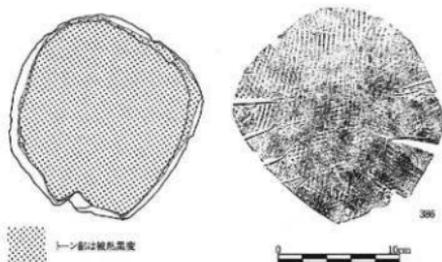


図73 今回調査出土須恵器(5)

甕はほぼ球形の体部で、ラッパ状に開く短い口縁部をもつ甕Aが大半を占める。外面は格子目タタキで、ナデ仕上げするものもある。甕は口縁端部の形態がいくつかある。すなわち、端部を平らにして内側につまみ出すもの(374)、丸く仕上げるもの(382)、端部を肥大させて下方につまんで曲げたり(375)、段を作るもの(379)などである。口縁端部を玉縁状に折り返して肥大させたものは頸部にH字形と↑印形のヘラ記号をもち、口径16.4cmを測る(381)。

また、底部が平らで、屈曲部を緩やかに作り出し、平らな口縁端部をもつ甕もある(384)。焼きがあまく、つくりも粗雑である。口径21.6cm、器高12.7cm、底径15.0cmを測る。他に、内面のみ焼けてこげた甕の底部破片が8区自然河川8-1からみつまっている(386)。須恵器が直接火にかけられた珍しい例である(図73)。

硯は蹄脚円面視と獣脚円面視があり、いずれも破片である(図56)。6区の溝下層から発見された蹄脚硯は脚部をヘラで削って透かしを作り出す小片で外堤径20.9cm、陸部径15.5cmを測る(238)。6区の遺構上面からみつかった1点は側面に突帯をめぐらせ、突帯の下に珠紋状の蹄脚を貼り付ける(241)。外堤径は23cmを測る。8区の遺構上面から見つかった破片(240)はヘラで削り出された蹄脚の一部分で、底径23.6cmを測る。蹄脚円面視はいずれも大型である。

獣脚硯はヘラで削り出した脚端部に拍爪を刻む。外堤は直立して端部に小さな面をもつ。外堤径16.8cm・器高5.3cmを測る(239)。焼成はよく暗紫褐色で半島製の可能性もある。府内では類例が土師里遺跡・陶君波遺跡に、奈良県では飛鳥池遺跡・飛鳥古宮・藤原宮跡にある。

土師器は大半が表面剥離したり、磨耗が激しく、出土量に対し詳細な観察ができるものは少ない。杯・皿・高杯・高盤(高杯A)・甕・カマドなどがある(図74・75)。

杯は底部に小さな平坦面をつくり、口縁端部を内側に曲げるもの(387)～(389)と、丸底で口縁端部を丸く仕上げるものがある(390)。法量は口径8.4cm・器高2.9cm(387)、口径11.8cm・器高3.0cm(388)、口径13.5cm・器高3.4cm(389)、口径13.3cm・器高4.5cm(390)、である。内・外面の調整や暗紋は摩滅で観察できない。

皿は平底で緩やかに立ち上がり、端部を丸くおさめるもの(403)・(404)、端部を上につまみ

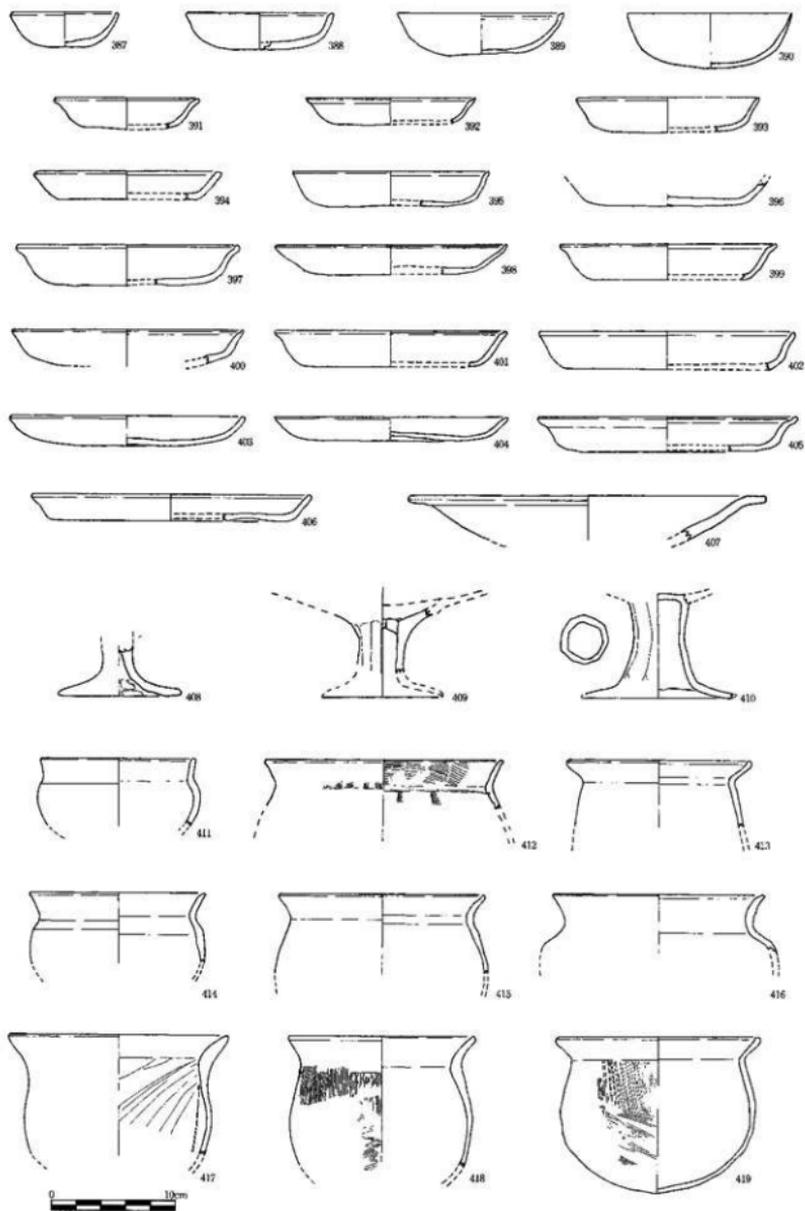


図74 今回調査出土土師器(1)

出すもの (394)・(395)・(402)、口縁端部を屈曲させて、上につまむものがある (391)・(392)・(397)～(400)・(405)・(406)。口径は11.4cm～最大で22.2cmを測り、15cm前後、18cm前後、21cm前後にまとまりがみられる。内・外面の調整や暗紋は摩滅で観察できない。

高杯は小型で、脚端部が広がり、つけ根は棒状で細く、脚内面に指頭圧痕が残る (408)。

高盤 (高杯A) は皿に脚を伴うもので、脚部は棒状のものと筒状のものがある (407)・(409)・(410)。脚部が筒状のものは低く、縦方向にヘラ削りで9面の面取りをする。皿部の内面には放射状暗紋がある (407)。脚径は12.8cmを測る。高杯は飛鳥Ⅲ段階以降はほとんど見られなくなり、かわって大型の高盤が飛鳥Ⅳ段階以降隆盛する。初期の高盤は脚が非常に短く、つくりが丁寧である。今回発見されたものはやや脚が長く、奈良時代初頭まで降ると考えられる。

甕は把手を伴う大型の甕Bと把手のない小型の甕Aに大別でき、後者が大半である。体部は球形と長胴形があり、外面をハケメ調整し、内面に削りの痕跡や指頭圧痕が残る。甕Bは口縁端部の形態で区別することが出来る。端部を丸く仕上げるもの (411)・(414)・(416)、端部を上につまみ上げて尖らせるものである (415)・(419)。長胴形甕の口縁部も同様の多様性がある。概して、外面から口縁部にかけて煤けたものが多く、煮沸容器と考える。内・外面の調整は摩滅でよく観

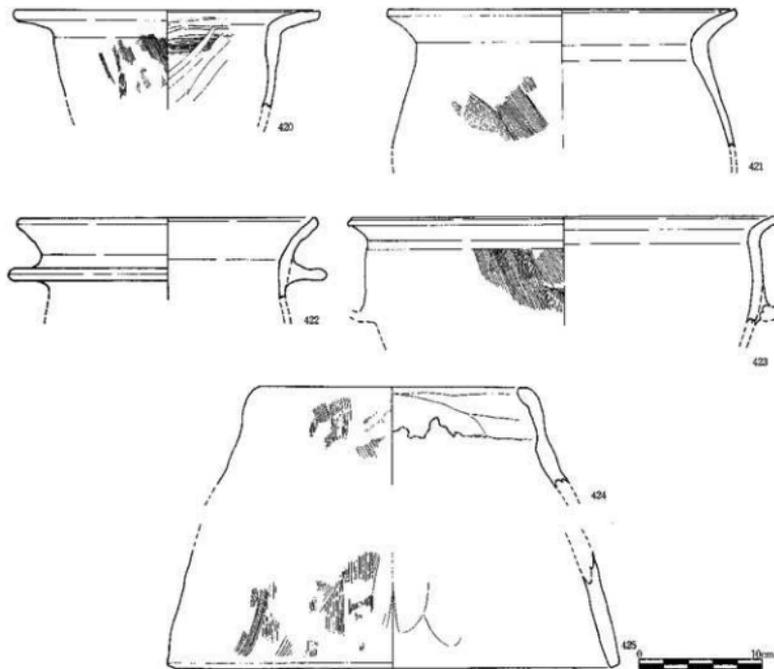


図75 今回調査出土土師器 (2)



図76 今回調査出土銅型・フイゴ羽口

察できないものが多い。

甕Bは体部中央の左右に舌状の把手をつける。口縁端部は外傾する平らな面をもつ(423)。体部外面はハケメ調整し、口縁部外面から体部にかけて煤が付着する。口径34.2cmを測る。

長胴甕は鑄がつくものとつかないものがある(421)・(422)。口縁部を丸く仕上げ、屈曲部の下方に長さが3cm程度の鑄を環状につける(422)。体部はハケメ仕上げする。暗褐色の胎土で、雲母と角閃石を多く含むことから中河内の生産だろう。今回見つかった鑄つきの甕はすべて同じ胎土だった。口径のわかるものは23.6cmを測る。

カマドは中型のものが2点ある(424)・(425)。口縁部は内傾し、端部を丸く仕上げる。底部は直線的に開き、端部は平たい。外面は粗くハケメ調整され、内部は削りやナデ仕上げした痕跡がみられる。体部の破片は胎土が明褐色で、0.1~0.3cm大の砂粒と金雲母を多く含む。口径21.6cm、厚さ1.0cmを測る(424)。底部の破片は胎土が淡黄色で、細砂粒を含み、体部とは異なる胎土である。底径35.7cm、厚さ1.3cm測る(425)。カマドに取りつくコシキの破片も見られる。乳白色で焼成があまい棒状の把手や口縁部の破片などである。

その他、鑄造関連遺物である銅型片とフイゴ羽口片、鍛造関連のフイゴ羽口片がある。銅型は表面が平らで灰白色の緻密な砂が塗られた面をもつ(426)。この部分が真土で平たい製品を鑄込んだと考えるが細片のため、製品は不明である。胎土は気泡を多く含む粘土でもろい。スサ混じりによく焼かれたと考える。73・74年度の調査では小型のトリベが数点みつかっており、関連がうかがえる。

フイゴ羽口は直径6.0cm程度の筒状の土製品で、表面にガラス質のカスが付着する。いずれも先端部に近いと考える。内径が3.8cmの薄手のものは鍛造用羽口の基部かもしれないが外径に対する内径の大ききより、鑄造用と理解できる(427)。鑄造の送風装置は強い風で一気に原料を熔かすのではなく、一定の強さで恒常的に風を送って原料を熔かすため、内径が大きい。その一方、瞬間的に強い風を送って、局部的に原料を熔かし、タタキ鍛える鍛造用の送風装置は強い風を送るために羽口の内径が1~2cm程度の小ささである。前者鑄造用は内径が3.8cmの薄手である(427)。後者鍛造用は内径が2.0cmで器厚も同程度である(428)・(429)。

その他、須恵器杯(233)と土師器杯(234)の高台内に墨書があった(図34)。いずれも一字だけで、摩滅により判読できなかった。前者は「中」・「小」の可能性もあり、後者は「一」・「十」などの可能性がある。硯の出土とともに識字の実態を知る手がかりと考える。いずれも8区自然河川8-1出土で、堆積状況の差によって墨書が判別できたと考える。

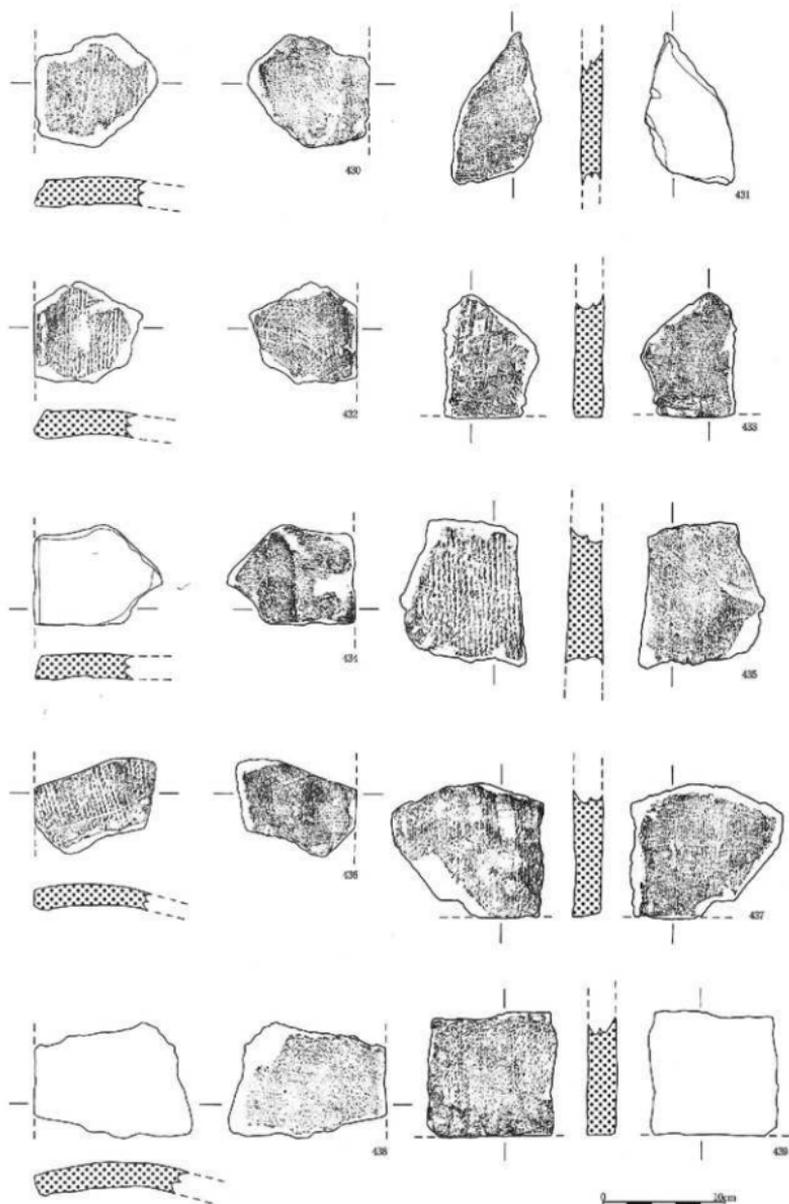


图77 今回調査出土瓦

瓦は平瓦・丸瓦・軒瓦・鬼瓦がある(図77)。発見された建物や柱穴の数に比べ、出土量は少ない。平瓦は凸面に縄目痕、またはヘラ削り痕があり、凹面に布目痕や桶巻きつくりの横骨痕をもつ(430)・(432)～(439)。凸面には格子目タタキを施す平瓦もある(433)。いずれも端部はヘラ削りで角を整える。厚さにばらつきがあり、薄いもので1.6cm、厚いものは2.6cmを測る。

丸瓦は平瓦の量に対して少なく、厚さは1.6cmを測る(431)。

軒丸瓦は小片2点だけで、瓦当面の残るものは、外区の圏線と連珠紋がわかる程度である。外縁は断面形がやや丸く、内側に傾く面をもつ。直径や時期は不明である(230)。もう1つは丸瓦部凸面に縦方向のヘラ削りを施し、厚さは1.8cmを測る(231)。鬼瓦と考える瓦片は沈線を刻む。形状や部位は不明である。最大厚3.2cmを測る(232)。

鉄製品は9区の建物上面から発見された(図58)。幅約6cm、現存長9.8cmを測る。断面が層状で鍛造品と考えるが用途はわからない(242)。

c 飛鳥・奈良時代の井戸出土遺物(図版5～7)

飛鳥・奈良時代の井戸が2基検出された。井戸には井戸枠にされた木製品のほか、井戸の底から祭祀に使われた木器・土器などが発見された。また、掘り方や最終的に埋め戻された埋没土からは土器が発見されている(図78～81)。

井戸2-1は前節(75頁)で示したとおり、井戸枠は転用された二枚のくりぬきの船材である。井戸枠内底には暗灰強粘土が厚く堆積し、10個体の土師器甕と杯・鉢が1個体ずつが完形のまま沈んでいた(440)～(451)。

沈んでいた土師器のうち、もっとも小さな杯Cは底部に平坦部をもち、体部を丸くするもので、口縁部はほぼ直立し、端部は丸く仕上げる(442)。内面は平滑で外面は指頭圧痕がよく残る薄手の型つくり製で、胎土に雲母を若干含む。口径12.9cm、器高4.1cmを測る。

鉢は粘土紐巻上げ成形で、ボール状に体部を作り出し、口縁部に片口を設ける(443)。口縁部外面は強く横ナデし、その下方に指頭圧痕が並ぶ。内面はヘラで横ナデし、平滑にする。口径18.2cm、器高8.6cmを測る。

甕は体部が球形で、外面に煤が付着する実用されたものである。把手の有無によって甕A・Bに分けられる。さらに大・中・小に分けられ、大が甕Bで2個体、中が甕Aで2個体、小が甕Aで6個体ある(440)・(441)・(444)～(451)。小型の甕Aは粘土紐巻き上げ成形で、内面はヘラ削り、口縁部は横ナデが施されている。外面は無調整か粗くナデられるのみでつくりは悪い。水漏れする可能性のあるものもみられる。いずれも、火にかけられた煤の付着が明瞭である。外面の煤と内面の焦げが全面に及ぶものもある(440)・(441)。口縁端部は丸みをもつが平らな面をつくることを意識している。小さいものから口径10.2cm・器高12.8cm、口径10.6cm・器高12.7cm、口径13.9cm・器高12.1cm、口径14.6cm・器高11.7cm、口径15.6cm・器高12.8cm、口径15.6cm・器高12.8cmを測る(440)・(441)・(444)～(447)。

中型の甕Aは小型の甕Aと形態と調整が共通する。口縁端部は平らにつくり出し、胴曲部が緩やかである。口径19.6cm・器高16.8cm、口径20cm・器高18.4cmを測る（448）・（449）。

大型で把手をもつ甕Bも形態と調整は甕Aに共通する。焼成前に体部中央の左右に穿孔を施し、端部を上曲げた把手を内側から取り付けている。把手は甕を支えられるほどのつくりではなく、装飾化しているが、使用に際してすべて欠落している。口径36.5cm、器高20.7cm、口径27.5cm・器高21.6cmを測る。（450）・（451）。

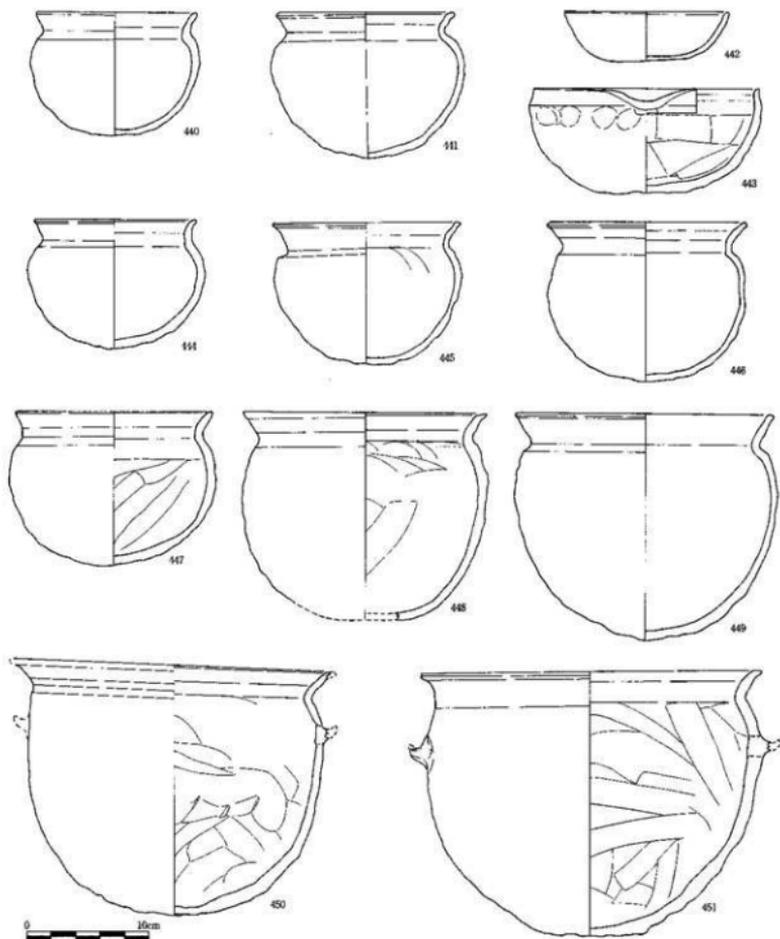


図78 井戸2-1下層出土土器

以上の土師器は完形で沈んでおり、これらによって水を汲むことに障害がおきるほど井戸内部でかきまわることから井戸廃絶時の祭祀、あるいは儀式用の井戸だったと考える。同時に発見された斎申はこれらに伴うと考える。

井戸2-1の井戸枠内下層より土師器とともに発見された木製品には斎申、曲物、手斧の柄、漆塗り木挽き杓、ひょうたんの杓、棒状の柄などがある。

斎申は杉板を刀子で加工するものである。全部で5個体以上発見された。全形がわかるものは2種類ある。小型は長さ18.1cm・幅2.0cm(457)、大型は長さ23.1cm・幅2.3cmを測る(458)。残りの3点は大きい方が2点(454)・(456)、小さいほうが1点と考える(455)。いずれも厚さ0.2cmの板材の上下を人形に加工して頭部と手足を作り出す。

曲物は杉板を薄く削って直径15cm程度の枠にしたもので、両端が重なる部分に穴をあけて桜とおもわれる樹皮を通して結合させる。底板はみつからない。

手斧の柄は斧を装着するつけ根から把手にかけての小片である。枝の分岐部分を削りだして利用しており、身と柄を一体につくる。斧装着部分の幅は2.9cm、厚さは1.3cmを測る(452)。

漆塗り木挽き杓はもともと容器だったものに柄をつけて転用したと考える(453)。ヒノキの一木を木挽きによって削り貫いてつくりだす。底部外面にロクロに固定した痕跡が残る。内面のみ漆が薄く塗られている。底部断面は厚く1.5cmある。体部は薄く、0.5cm以下である。後に0.3cm大の孔が2列に6箇所、口縁部付近に0.5cm大の孔が3箇所にあけられる。その対面側にも1cm大の孔が1箇所あけられている。これらの孔は柄を取り付けるためのものである。口径は12.4cm、器高11.4cmを測る。

ひょうたんの杓は厚さ0.2~0.3cmの小型ひょうたんの実を半裁したもので出土したときは破片となっていた。複数個体あった可能性もある。

棒状の柄は細長い自然木の両端を加工したり、皮をはずして面取りしたものである。前述の漆塗り木挽き杓やひょうたんの杓の柄も含まれると考えるが、特定できなかった(159)~(462)。

井戸2-1からは井戸枠の下層以外に井戸枠外側の掘り方より須恵器杯Aが発見されている(463)。この遺物は井戸枠を据え付けるとき、井戸枠外側を充填した砂利に含まれていたもので井戸造営時のものである。杯Aは底部が平たく、直線的に立ち上がり口縁短部を丸く仕上げる。口径12.9cm、器高3.3cmを測る。飛鳥Ⅲ・Ⅳ段階ものと考えられる。ただし、この遺物は掘り方埋め土に混入した可能性もあり、正確には井戸の造営時期が土器の製作時期以降である以上に限定することはできない。

これに対し、井戸の埋め土にもいくつかの土器片が混入しており、これらの土器群から井戸の廃絶時期を限定することができる。発見された土器は須恵器杯蓋B、壺L、コシキと、土師器杯C、高盤、甕A、鋳付甕などである。

須恵器の杯蓋Bは傘形で口縁端部を下方方向にわずかに折る大型品で、口径30.6cmを測る(465)。壺Lは口縁部の小片のみである。1点は頭部がラッパ状に外反し、口縁端部を丸く仕上げる(464)。

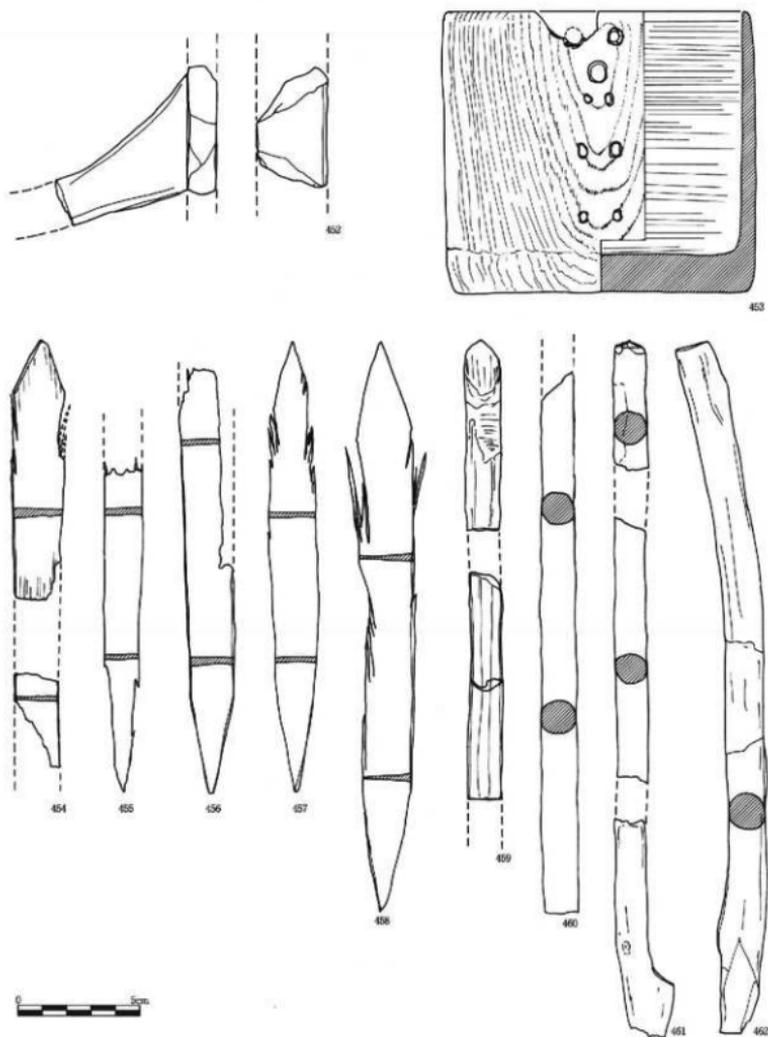


圖79 井戸2-1下層出土木器

口径は14.9cmを測る。口縁部を屈曲させ、口縁端部に面をもたせて上方につまみあげる1点は口径10.2cmを測る(466)。

コシキは体部が直立し、口縁端部は丸く仕上げ、内面をナデてうすくする。体部中央の左右に長さ4cmの角状把手がつく。内面には煤が付着する。口径26.8cmを測る(470)。

土師器杯Cは底部の平坦面が小さく、底部から緩やかに内傾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。口径12.8cm、器高3.5cmを測る(467)。器面調整は摩滅が激しく不明である。

高盤は筒状の短い脚部をへら削りで7面の面取り仕上げする(469)。

甕Aは球形の体部で、緩やかな屈曲部をつくり口縁端部は平らな面をもつ(471)・(472)。体部外面には粘土紐の痕跡が残り、煤が付着する。1点は口径が19.8cm、もう1点は口径22cmを測る。

長胴壺は口縁部の小片で、屈曲部に長さ3cm程度の鈎が環状にめぐる。口縁部は短く直線的に開き、端部は丸く仕上げる。胎土は暗褐色で、雲母と粗い砂粒を多く含む。口径29.3cmを測る(473)。

以上、井戸2-1上層の埋め土出土土器は大半が飛鳥IV~V段階の特徴を示すものの、土師器高盤は脚部の肥大化が進み、新しい特徴をもつ。平城II段階に降るものと考えられる。したがって、井戸の廃絶時期も奈良時代前期に降ることがわかり、井戸2-1の廃絶時期は遺跡の廃絶時期にも対応すると考える。

井戸3-1は最大径3.75mで井戸底にヒノキ板材を桁形に組んだ井戸枠を残す。遺構の詳細は

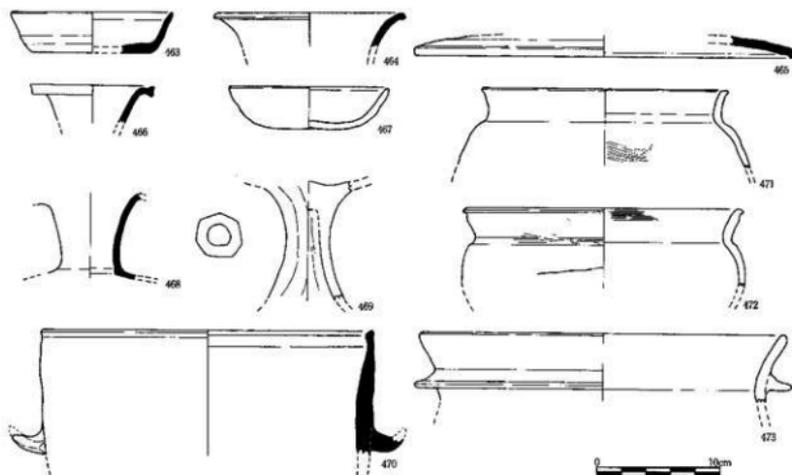


図80 井戸2-1上層出土土器

前節（77頁）に示すとおりである。井戸枠内の下層から少量の土器片・木器が発見された。これらは井戸使用時に混入したものとする。その上層の埋め土から須恵器杯・杯蓋・壺、土師器皿・高杯などがみつかった。これらの土器は井戸廃絶時のものとする（図81）。

井戸枠下層の遺物には須恵器杯蓋B、壺H、壺L、土師器高杯がある。破片が目立ち、最下層の泥層も少ないことから何度かしゅんせつされている可能性が高い。

杯蓋Bは傘形でやや器高が高く、大振りな宝珠つまみをもつ。口縁端部は屈曲し、下方へつまむ。口径14.6cm、器高2.6cmを測る（481）。

壺Hは算盤玉形に肩が張る体部をもち、頸部は広口でラッパ状に外反する（489）・（490）。2個体ともほぼ同じ大きさで、1点は高台径10.5cm、最大径17.6cm、1点は最大径18.4cmを測る。

壺Lは小型で、高台をもつ球形の胴部に長頸がつく（492）。

土師器高杯は手づくねのミニチュアである。口径6.5cm、器高2.3cm、脚径2.3cmを測る（482）。

井戸の廃絶時期を示唆する上層出土土器には須恵器杯身、杯蓋B、壺H、壺L、土師器皿、甕Aがある。壺Hは平城Ⅱ段階に出現する器種で井戸枠内からも発見されている。

須恵器杯身は高台をもたないものばかりである（474）・（475）・（477）・（478）。1点は古い様

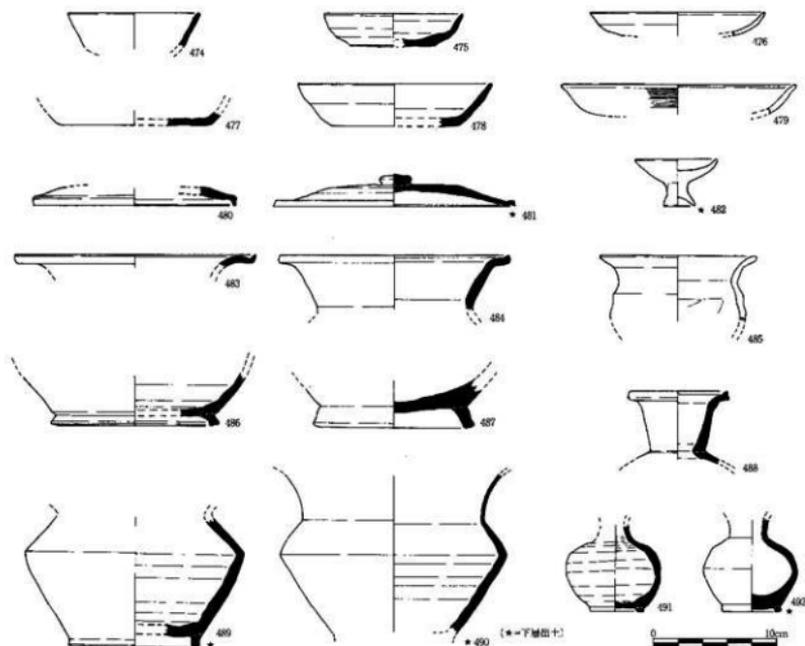


図81 井戸3-1出土土器

相を示す杯身Hである(475)。底部は無調整で器厚が厚く、粘土紐の痕跡が明瞭に残り、口縁端部のつまみ出して細く、丸く仕上げる粗製である。杯身は底部が平らで立ち上がりは直線的に開く(478)。口径15.5cm、器高3.5cmを測る。

杯蓋Bは小片で、傘形で器高が高い。口縁端部は屈曲し、下方へつまむ(480)。

壺Hは広口で口縁部ラッパ状に開き、端部を屈曲させ上方につまみ上げる(483)・(484)。1点は口径19.3cm、他は口径18.6cmを測る。壺底部は高台がハ字形にしっかり踏ん張る形態である(486)・(487)。1点は高台径13.0cm、他は高台径13.6cmを測る。いずれも小片だが、上層出土遺物の中でもっとも時期が降るものである。同じ器種が井戸枠の下層からも出土している。

壺Lは同じ井戸下層出土の壺Lと形態が共通する小型の長頸壺である(491)。ロクロ目が強く残る。高台径4.4cmを測る。

土師器皿は大小二点あり、丁寧なつくりで口縁端部を丸く仕上げ、ともに横方向に強くナデた痕跡が残る(476)・(479)。小は口径15.8cmを、大は口径18.8cmを測る。

土師器甕Aは小型で球形の体部、屈曲部は横ナデで緩やかにつくり出し、短い口縁部は強く開く。口縁端部は丸く仕上げる(485)。口径12.8cmを測る。

d 飛鳥・奈良時代以降の遺物(図版7)

今回調査では調査区の各所から中世・近世の遺物がみつまっている。遺構に伴うものは近世の井戸1-1・井戸3-2出土のみである(図52・82・83)。

この他、平安時代の須恵器壺が1点のみ、4区の溝4-2から発見されている。この溝には中世の遺物も多く含み、南から流れ込んだと考える(図52)。底部には糸切り痕があり、内外面とも青灰色で、胎土は粗い川砂を多量に含む。底部径8.4cmを測る(237)。

中世の遺物には中国製磁器の白磁・青磁・青花、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、土師質土器、瀬戸褐釉壺などがある(図82)。

白磁は碗のみで、底部を浅く削りだして高台をつくる(493)～(496)。1点は高台径6.6cm、他の1点は高台径7.6cmを測る。立ち上がりは外側に直線的に開き、端部を厚く折り曲げ、玉縁にする。1点は口径15.2cm、他の1点は口径16.0cmを測る。福建省廈門碗窯に類品が知られ、鎌倉時代前期までのものだろう。

青磁も碗のみで、見込みにスタンプを押して紋様とするもの、外面に硬直化した蓮弁紋を飾るものがある(498)・(499)。いずれも高台が無軸で、削りだし高台。見込みにスタンプのある1点は高台径5.7cmを測る(497)。蓮弁紋を飾る碗は高台径が4.4cmとなる(498)。鎌倉時代後半から室町時代前半にかけてのものだろう。

染付磁器である青花には碗と皿がある(500)・(501)。碗は高台内に二重圏線をめぐらせ、その中心に文字を描く。高台端部は欠損するが、高台径約4cmとなる。皿は高台・口縁部ともに欠損、底部のみ残存する小片である。見込みに具須で蟹を描く。いずれも、国産磁器が出現する

直前の一六世紀末から一七世紀初頭と考える。

土師質土器皿は磨耗が激しい。いずれも、扁平で口縁端部を厚く丸く仕上げる (502)・(503)・(506)。底部を平たくするもの (502)、やや丸くするものがある (506)。1点は口径7.5cm・器高1.5cm、一点は口径8.1cm・器高1.2cm、もっとも大型の一点は口径14.2cm・器高1.6cmを測る。

土師質土器羽釜は口縁部の違いによって、二つに細分できる。一つは口縁部が直立気味で、端部をくの字に屈曲させるものである (515)。内面はハケメ調整後にナデ、外面は横ナデを施す。鈔は欠損し、鈔下径は20cmを測る。内面には焦げ、鈔直下には煤がつく。他は口縁部が急角度で内傾し、端部は平らに仕上げる。口縁部外面は三条の沈線を施し、段をなす (516)・(517)。鈔下の体部は縦方向につよくへら削りする。口径は約21cm、鈔下径は22.6cmを測る。内面には焦げ、

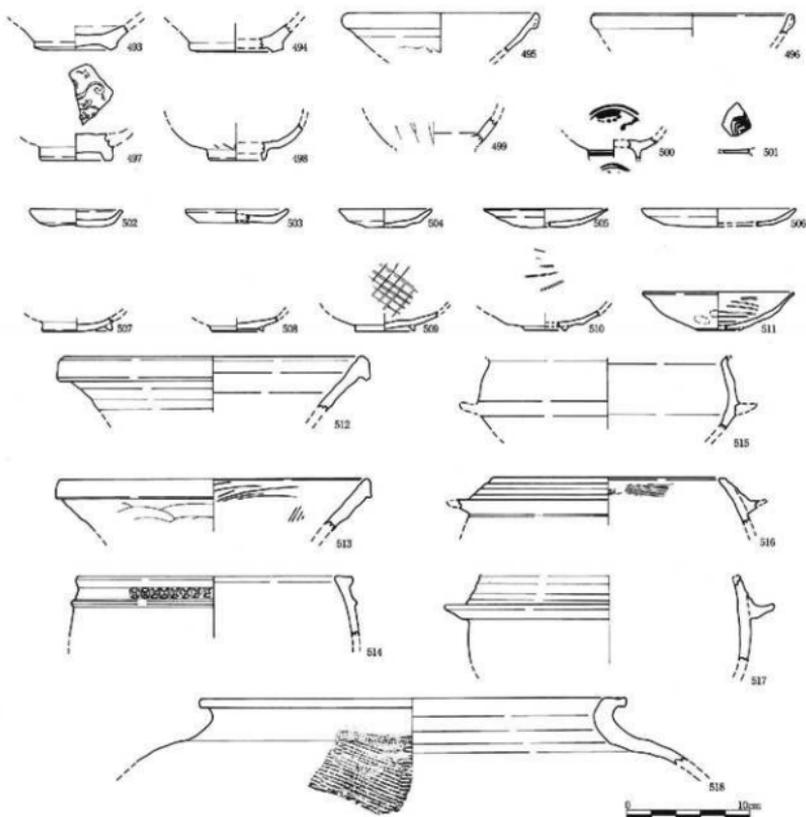


図82 今回調査出土中世遺物

鈎直下には煤がつく。

瓦器は皿と碗がある。皿は小型で口縁端部をやや丸く仕上げる (504)・(505)。1点は口径7.8cm・器高1.5cm、他は口径9.8cm・器高1.6cmを測る。いずれも摩滅が激しい (505)。

瓦器碗は確認できたものすべてが和泉型である (507)～(511)。高台は断面形が三角形で、形骸化が著しい。口径に対し、高台径が極端に小さい1点は、口径12cm・高台径3.6cm・器高3.2cmを測る (511)。

瓦質土器にはすり鉢、火舎、羽釜、甕がある。いずれも室町時代のものだろう。

すり鉢は形態が東播系のすり鉢に酷似する (513)。直線的に立ち上がり、底部は小さい。内面には粗いすり目を入れる。すり目の直上にはハケメ痕が残り、体部外面はヘラ削りを施す。口径24.6cmを測る (513)。

火舎は体部を直立気味に内傾させ、口縁部外面に突帯を施し、口縁端部との間にスタンプを密に施す (514)。羽釜は口縁部を緩やかに内傾させ、外面にほぼ等間隔で三条の沈線を入れ、段を形作る。内面はハケメ痕が残り、外面の鈎下はヘラ削りを施す。口径18.2cm、鈎下径22.6cmを測る (517)。

甕は体部外面にタキ痕跡、内面にハケメ痕がある。屈曲部は分厚く口縁端部近くで強くくびれ、平らな端面をつくる。口径34.4cmを測る (518)。

東播系すり鉢は直線的に立ち上がり、内外面共に粗くナデ、口縁端部を折り返し、下方向にやや

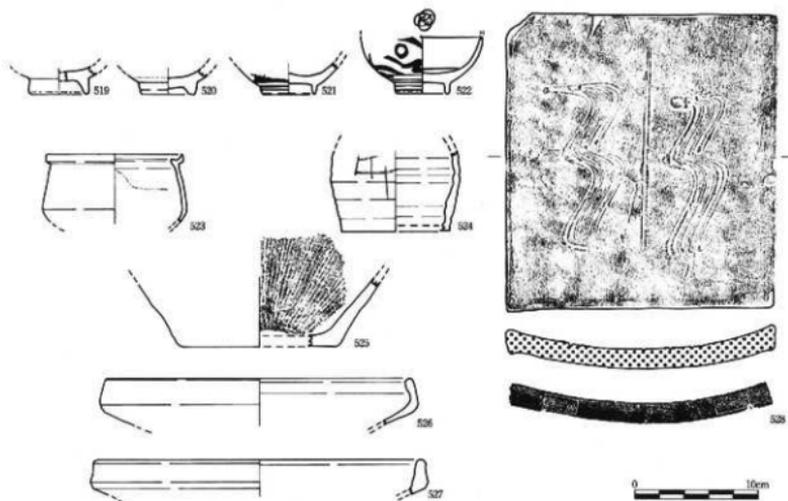


図93 今回調査出土近世遺物

尖らせて厚く仕上げる。口径24.0cmを測る (512)。

近世の遺物には肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・備前焼・京焼系陶器・土師質土器・瓦などがある。陶磁器は一七世紀後半から一八世紀初頭の特徴をもつものももっとも古く、一七世紀前半の近世初頭の資料はない (図83)。

肥前磁器は碗、皿、仏飯具、紅皿など、様々なものがみつかった。

草花紋碗はいわゆる「くらわんか碗」である。高台径4.2cmを測る (521)。荒磯紋碗は直立する高い高台で、体部が厚く丸みをもつ。高台径4.2cmを測る (522)。肥前陶器には兵器手碗と、内野山系の外面に銅緑釉、内面に透明釉の掛け分け碗がある (519)・(520)。いずれも高台のみを残す小片である。

京焼系灰釉土鍋は口縁部内面のみ無釉で、内外面共に灰釉を掛ける。口径10.9cmを測る (523)。備前焼壺は薄手のほぼ直立する体部で、ロクロ痕跡が強く残る。ヘラ記号が体部外面にある。底部は平らで底径8.8cmを測る (524)。

丹波焼すり鉢は底部のみの小片である。体部は直線的に開き、外面は指押えの痕を粗くナデ消す。底部は未調整で、底径12.2cmを測る (525)。

土師質土器焙烙の一つはやや薄手で口縁部を内傾ぎみに屈曲させ、口縁端部を肥大化させて丸く仕上げる。口径24.6cmを測る (526)。もう一つは厚手で、口縁部を短く垂直に立ち上げる。底部と口縁部の境はヘラ削りし、口径26.4cmを測る (527)。

井戸1-1・井戸3-2周辺からは瓦がまとまって発見された。井戸枠に利用された厚熨斗瓦と考える。同じ「多瓦勘」の刻印をもつものが多くある。凹面はナデ調整、凸面は未調整、四周をヘラ削りして形態を整える。凹面には中央に直線、その両脇に波状の擲目を入れる。側面には「多瓦勘」の刻印が2箇所押され、熨斗瓦として半分に割って使用する場合も両辺に刻印が残るようにしている。縦24.0cm、横21.6cm、厚さ1.6cmを測る (528)。近代まで降ると考えられ、井戸の使用が近世から近代まで続いた可能性が高い。

第V章 まとめ

第Ⅲ章4節で示したとおり、73・74年度調査では平尾遺跡の建物群について、時期・性格を明瞭に出来ず、官衙か豪族の本拠地か、あるいは豪族本拠地から官衙への移行など、諸説が提示され結論をみなかった。また、遺跡が街道沿いに位置することから布屋敷かその前身的な機能をもつ施設が付随する可能性、官衙あるいは豪族の邸宅としても、先行する集落と後続する集落が検出されたという解釈も示された。

今回、前回調査建物群の南側で約6000㎡を調査し、さらに37棟以上の建物を確認した。建物群の範囲は450m四方に連綿と広がる大規模なものであることがわかった。

建物群は東西か南北に軸をそろえ、軸の方向などから大きく二時期に大別できる。建物の切り合いや建て替えは各時期に一度あるかないかで、限られた期間のみの使用がうかがえる。中心建物や倉庫群など、整然とした配列は認められない。

一部の建物には瓦が伴う。また、須恵器・土師器などの生活雑器のほか、陶硯・石製腰帯飾りや銅製腰帯飾りなど、通常集落ではみられない特殊な遺物が発見された。

発見された須恵器・土師器はもっとも古いもので飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階のものが少量で、大半は飛鳥Ⅳ・Ⅴ（平城Ⅰ）段階のものである。もっとも新しい時期の土器は平城Ⅱ段階でこれも少量である。つまり、650年前後に建物群の造営が始められ、680～700年前後に建物群がでそろい、720年代には廃絶したことを示すと考える。

なかでも井戸3-1は700年代に造営、遺跡廃絶時期である720年代に埋められたことがわかった。井戸枠ヒノキ材の年輪年代測定での測定結果は704年+ α 年だった。

73・74年度の調査出土遺物約100箱を再整理した結果、これまで8世紀中ごろから後半まで継続的に遺跡が存在したと考えられていたが、実態は今回調査と同様、少量の平城Ⅱ段階を含むのみで、飛鳥時代後半から奈良時代初頭の土器が大半であることが確かめられた。

以上を踏まえると多治比氏の本拠地とするには存続期間が限定的で氏族の盛衰と合致せず、瓦葺建物や腰帯飾り・陶硯が含まれるなど、不自然である（表2）。また、先行集落や後出集落を含むほど遺跡の消長は長くない。

結論として、街道沿いの要衝に藤原宮期の多治比郡都衙が展開したと推定する。その前身は650年代に認められるとしても小規模で、その廃絶は飛鳥から平城への遷都が深く影響すると考える。難波・和泉と飛鳥を結ぶ交通の要衝としての機能が平尾遺跡を隆盛させ、平城京遷都によってその機能が欠如するとともに都衙の機能は移動したのではないだろうか。

その他、特記事項として、鑄造工人の活動を示すトリペ・フイゴ羽口・鑄型片などが発見され、蛍光エックス線分析により、銀製品を作製していたことが判明した。近隣の太井遺跡では奈良時代前期の銀製品製作工房が確認されており、少しさかのぼる段階に同工人がいたことがうかがえる。美原町域はのちの時代に鑄造工人が活躍する。草創期の資料として注目できる。

| 西暦 | 年号 | 出 来 事 | 土器編年 |
|-----|--------|---|--------------|
| 645 | 大化1年 | 大化改新。中大兄皇子らが蘇我氏を滅ぼす。 | 飛鳥Ⅰ・Ⅱ |
| 649 | 大化5年 | 右大臣蘇我石川麻呂に反乱の疑い。難波宮から軍も。山田寺で自害。 | |
| 655 | | 孝徳天皇が難波宮で逝去。皇極天皇が再び即位（斉明天皇）。 | |
| 663 | | 白村江の戦い。唐・新羅連合軍に日本・百濟連合軍が大敗。 | 飛鳥Ⅲ |
| 664 | | 防人を九州に。生駒に高安城を築く。冠位二十六階制定。 | |
| 667 | | 近江大津宮に遷都し、中大兄皇子が即位（天智天皇）。 | |
| 671 | | 大友皇子が太政大臣、大海人皇子は吉野へ出家。天智天皇の逝去。 | 飛鳥Ⅳ |
| 672 | | 大海人皇子が吉野で挙兵。壬申乱の勃発。飛鳥古京が占拠。 | |
| 673 | | 大海人皇子が飛鳥古京で即位（天武天皇）。 | |
| 684 | | 八色の姓を定め、丹比公に真人、丹比連に宿禰の姓を賜る。 | |
| 689 | | 天武天皇の遺志をついだ妻の持統女帝が飛鳥浄御原律令を施行。 | |
| 694 | | 藤原宮遷都。各国に鑄銭司を置く。藤原宮北方に多治比門の名有り。 | 飛鳥Ⅴ (平城Ⅰ) |
| 697 | | 持統天皇が譲位。皇太子即位（文武天皇）。丹比真人嶋、左大臣に。 | |
| 701 | 大宝1年 | 大宝律令の施行。諸国の公印が鑄造され、文書行政が本格化。 | 飛鳥Ⅴ (平城Ⅰ) |
| 704 | 慶雲1年 | 河内を含む7国で大飢饉。疫病が流行し、社会不安へ。 | |
| 707 | 慶雲4年 | 文武天皇の逝去。生母が即位（元明天皇）。 | |
| 708 | 和銅1年 | 武蔵から銅の献上。和銅年号にし、平城京の造営を開始。 | |
| 709 | 和銅2年 | 河内鑄銭司を司から兼に。丹比真人三宅麻呂を催鑄銭司に任用。 | |
| 710 | 和銅3年 | 平城京へ遷都。 | |
| 712 | 和銅5年 | 古事記・風土記の撰上。各国の名と行政区画を整備。68国2島へ。 | |
| 715 | 靈龜1年 | 元明天皇が譲位し、娘が即位（元正天皇）。郷里制が実施。505郡4012郷里へ。 | |
| 717 | 養老1年 | 丹比真人県守が遣唐使に。後正三位、中納言まで昇進。 | |
| 719 | 養老3年 | 丹比真人三宅麻呂が民部郷から河内国撰官に。 | |
| 720 | 養老4年 | 日本書紀を撰上。蝦夷叛き、丹比県守ら、討伐に赴く。 | |
| 723 | 養老7年 | 長屋王が三世一身の法を制定。公地公民の制が崩れる。 | |
| 724 | 神龜1年 | 元正天皇が譲位し、首皇子が即位（聖武天皇）。長屋王は左大臣に。 | |
| 729 | 天平1年 | 長屋王の変。藤原不比等の娘（光明子）が立后。 | |
| 733 | 天平5年 | 丹比真人広成を遣唐大使として、唐へ出発。広成は後に従三位、中納言へ | |
| 737 | 天平9年 | 丹比真人家守が鑄銭長官に。 | |
| 749 | 天平感宝1年 | 丹比真人屋主、大蔵少輔に任ぜられるが、後に左遷され大宰府へ。万葉集に歌有り。 | |
| 774 | 宝龜5年 | 丹比宿禰真繼、鑄銭次官に。 | |
| 782 | 延暦9年 | 丹比真人乙安、鑄銭長官に。 | |

表2 平尾遺跡関連年表

| 結 核 番 号 | 実測 番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 残存 | 結 核 番 号 | 実測 番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 残存 |
|------------------|----------|----------------|--------------|-------|----|------------------|----------|--------------------|------------------|-------|----|
| 1 | 209 | 第2トレンチ | - | 須置器杯身 | - | 74 | 6 | N-15・W75 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 2 | 183 | 第9・10トレンチ | 南半 | 須置器杯身 | - | 75 | 50 | 東校倉区 | 南半 灰褐色粘質土層 | 須置器杯身 | △ |
| 3 | 195 | 第9トレンチ | 中央落ち込み北側 | 須置器杯身 | - | | | | 神山麓上 | 須置器杯身 | △ |
| 4 | 152 | 第9・10トレンチ | 壁地層 | 須置器杯身 | - | 76 | 269 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - |
| 5 | 201 | 第9・10トレンチ | 南端 | 須置器杯身 | - | 77 | 41 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | △ |
| 6 | 191 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - | 78 | 53 | 東校倉区 | 南半 | 須置器杯身 | △ |
| 7 | 139 | 西地区 | 東部掘削区 | 須置器杯身 | - | 79 | 27 | S15・W135 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 8 | 141 | 西地区 | 南端掘削区 | 須置器杯身 | - | 80 | 72 | 2次・O・W150 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 9 | 187 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - | 81 | 203 | 第3トレンチ | - | 須置器杯身 | - |
| 10 | 213 | 第9トレンチ | 中央落ち込み北側 | 須置器杯身 | - | 82 | 122 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | △ |
| 11 | 184 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - | 83 | 44 | - | 北端付近 | 須置器杯身 | △ |
| 12 | 51 | 金雲山 | - | 須置器杯身 | - | 84 | 263 | E45-60 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 13 | 137 | D-7区 | 溝埋土 | 須置器杯身 | - | 85 | 36 | 第14トレンチ | 西半掘削土層 | 須置器杯身 | △ |
| 14 | 208 | 第2トレンチ | - | 須置器杯身 | - | 87 | 166 | 西区 | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 15 | 266 | 東校倉区 | 北半 壁地層 | 須置器杯身 | - | | | | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 16 | 142 | E-45 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | | | | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 17 | 167 | N30W75区 | 一括 | 須置器杯身 | - | | | | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 18 | 190 | 第9・10トレンチ | - | 須置器杯身 | - | | | | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 19 | 126 | - | 盛土内 | 須置器杯身 | - | | | | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 20 | 200 | 第5トレンチ | 東部掘削区 | 須置器杯身 | - | 89 | 11 | 2次 O・W120 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 21 | 183 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - | 90 | 33 | 第9・10トレンチ | 北端付近 | 須置器杯身 | △ |
| 22 | 248 | E45-60 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 91 | 43 | 第3トレンチ | - | 須置器杯身 | △ |
| 23 | 270 | E45 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 92 | 120 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - |
| 24 | 170 | E45 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 93 | 140 | OW135区 | 土器埋り | 須置器杯身 | - |
| 25 | 83 | - | あび土 | 須置器杯身 | △ | 94 | 124 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - |
| 26 | 199 | 第6トレンチ | 南端 暗褐色土層 | 須置器杯身 | - | 95 | 45 | S-171 | - | 須置器杯身 | △ |
| 27 | 217 | 第2トレンチ | 南端付近 | 須置器杯身 | - | 96 | 188 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - |
| 28 | 150 | 第9・10トレンチ | 惣堂 | 須置器杯身 | - | 97 | 157 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - |
| 29 | 151 | 第9・10トレンチ | 壁地層 | 須置器杯身 | - | 98 | 127 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - |
| 30 | 218 | 第2トレンチ | 南端付近 | 須置器杯身 | - | 99 | 156 | S30W135区 | 一括 | 須置器杯身 | - |
| 31 | 198 | 第3トレンチ | あび土 | 須置器杯身 | - | 100 | 123 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - |
| 32 | 256 | 第9・10トレンチ | 南半 | 須置器杯身 | - | 101 | 14 | QN15 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 33 | 214 | 第3トレンチ | 南半 | 須置器杯身 | - | 102 | 161 | 西区 | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 34 | 7 | N-15・W75 | 一括 | 須置器杯身 | △ | 103 | 70 | O・W150 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 35 | 153 | W55-W70 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 104 | 32 | - | あび土 | 須置器杯身 | △ |
| 36 | 202 | 第5トレンチ | 南端より5-15cm付近 | 須置器杯身 | - | 105 | 165 | 西区 | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 37 | 136 | OW90区 | 一括 | 須置器杯身 | - | 106 | 159 | 西区 | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - |
| 38 | 149 | D-3区 | 落ち込み埋土 | 須置器杯身 | - | 107 | 91 | 東校倉 | 南半 灰褐色土層 神山麓上 | 須置器杯身 | △ |
| 39 | 76 | 金雲山 | 盛土 | 須置器杯身 | △ | 108 | 13 | O・W120 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 40 | 77 | 第14トレンチ | 南半壁 | 須置器杯身 | - | 109 | 276 | OW135区 | 土器埋り | 須置器杯身 | - |
| 41 | 147 | 東校倉区 | 南半 灰褐色土層 | 須置器杯身 | - | 110 | 40 | 第10トレンチ | 北端付近 | 須置器杯身 | △ |
| 42 | 184 | 東校倉区 | 南半 灰褐色粘質土層 | 須置器杯身 | - | 111 | 206 | 第2トレンチ | - | 須置器杯身 | - |
| 43 | 135 | N15W30区 | 一括 | 須置器杯身 | - | 112 | 126 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - |
| 44 | 250 | 西辺界溝S3 | 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | - | 113 | 9 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 45 | 134 | 校倉 | 南半 灰褐色土層 | 須置器杯身 | - | 114 | 124 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - |
| 46 | 271 | D-3区 | 落ち込み埋土 | 須置器杯身 | - | 115 | 254 | OW-15 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - |
| 47 | 219 | 第2トレンチ | - | 須置器杯身 | - | 116 | 22 | 2次溝敷 | - | 須置器杯身 | - |
| 48 | 190 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - | 117 | 148 | 第9・10トレンチ | 南半 | 須置器杯身 | - |
| 49 | 289 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 118 | 212 | 第4トレンチ | 南端付近 暗褐色土層 | 土器埋り | △ |
| 50 | 193 | 第3トレンチ | - | 須置器杯身 | - | 119 | 74 | - | - | 須置器杯身 | △ |
| 51 | 54 | 第14トレンチ | 西半壁 | 須置器杯身 | △ | 120 | 171 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 52 | 143 | - | 東部井戸 | 須置器杯身 | - | 121 | 210 | 第1トレンチ | - | 須置器杯身 | △ |
| 53 | 172 | E45-60 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 122 | 264 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 54 | 275 | O135区 | 土器埋り | 須置器杯身 | - | 123 | 81 | 2次溝敷 W55 | 南北溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 55 | 133 | OW135区 | 土器埋り | 須置器杯身 | - | 124 | 211 | 第2トレンチ | - | 須置器杯身 | △ |
| 56 | 194 | 第3トレンチ | - | 須置器杯身 | - | 125 | 92 | 第9・10トレンチ | - | 須置器杯身 | △ |
| 57 | 274 | O135区 | 土器埋り | 須置器杯身 | - | 126 | 62 | S171 | - | 須置器杯身 | △ |
| 58 | 169 | E30-E45 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 127 | 146 | S30W135区 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 59 | 67 | 第3トレンチ | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | △ | 128 | 145 | 第9・10トレンチ | - | 須置器杯身 | △ |
| 60 | 162 | 西区 | - | 須置器杯身 | - | 129 | 48 | 第7トレンチ | - | 須置器杯身 | △ |
| 61 | 136 | E15 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | - | 130 | 1 | W-120-1 | 落ち込み | 須置器杯身 | △ |
| 62 | 186 | W120区I | 落ち込み | 須置器杯身 | - | 131 | 79 | W75 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 63 | 46 | 第6トレンチ | 南端暗褐色土層 | 須置器杯身 | △ | 132 | 144 | S15W75区 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 64 | 273 | O135区 | 土器埋り | 須置器杯身 | - | 133 | 197 | 第9・10トレンチ | 南半 包含 | 須置器杯身 | △ |
| 65 | 156 | S30W135区 | 一括 | 須置器杯身 | - | 134 | 155 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 66 | 154 | OW75区 | 一括 | 須置器杯身 | - | 135 | 269 | W70-W80 S15-S40 | 一括 | 須置器杯身 | △ |
| 67 | 225 | 第2トレンチ | - | 須置器杯身 | - | 136 | 263 | 西区 | 東南隅 暗褐色整地層 | 須置器杯身 | △ |
| 68 | 221 | 第9・10トレンチ | 北端付近 | 須置器杯身 | - | 137 | 182 | E15-30 | 東西溝埋土 | 須置器杯身 | △ |
| 69 | 18 | 2次 N40・W45D | 灰化粘質土層 | 須置器杯身 | △ | 138 | 205 | 第3トレンチ | 北方 | 須置器杯身 | △ |
| 70 | 268 | 第7トレンチ | 西端付近 | 須置器杯身 | - | | | | | | |
| 71 | 129 | 金雲山 | 盛土内 | 須置器杯身 | - | | | | | | |
| 72 | 37 | 第3トレンチ | 南端暗褐色土層 | 須置器杯身 | △ | | | | | | |
| 73 | 38 | - | - | 須置器杯身 | △ | | | | | | |

表3 実測遺物登録対照表(1)

| 総番号 | 実測番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 検出 |
|-----|------|-----------------|--------------|------------|----|
| 130 | 181 | 西区 | 東海部 緑褐色整地層 | 須恵器平皿 | - |
| 140 | 283 | 西区 | 東海部 緑褐色整地層 | 須恵器平皿 | - |
| 141 | 49 | - | - | 須恵器釜 | △ |
| 142 | 268 | E15~30 | 東海部埋土 | 須恵器釜 | - |
| 143 | 30 | 第9・10トレンチ | 北津付近 | 須恵器釜 | - |
| 144 | 215 | 第2トレンチ | 南備付付近 | 須恵器釜 | - |
| 145 | 28 | S15-W135 | 一括 | 須恵器釜 | △ |
| 146 | 19 | - | 東海部 | 須恵器釜 | △ |
| 147 | 60 | 第9・10トレンチ | 飯塚部北端付近 壁地層 | 須恵器釜 | △ |
| 148 | 224 | 第4トレンチ | 南ビット群 | 須恵器釜 | - |
| 149 | 89 | S017 | - | 須恵器釜 | △ |
| 150 | 68 | 東校倉区 | 南半 灰褐色土層 地上上 | 須恵器釜 | △ |
| 151 | 4 | 2次 W-20-1 | 落ち込み | 須恵器釜 | △ |
| 152 | 3 | O-W120 | 一括 | 須恵器釜 | △ |
| 153 | 645 | 東海部埋土 | 一括 | 須恵器釜 | - |
| 154 | 25 | N30-W60 | 一括 | 須恵器釜 | △ |
| 155 | 90 | 東校倉区? | 溝 下層 | 須恵器釜 | - |
| 156 | 169 | 2次 東校倉区 | 南半 灰褐色土層 地上上 | 須恵器磁器類 | - |
| 157 | 29 | S30-W135 | 一括 | 須恵器釜 | △ |
| 158 | 78 | 2次 W65 | 南北埋土 | 須恵器磁器手付片口腹 | △ |
| 159 | 234 | 西地区 | 東海部被覆区 | 須恵器磁器手付片口腹 | - |
| 160 | 258 | W55 N30付近 | 溝 | 須恵器磁器手付片 | - |
| 161 | 245 | 第3トレンチ | - | 須恵器磁器類 | - |
| 162 | 132 | F105区 | 南北埋土 | 須恵器釜 | - |
| 163 | 55 | 2次 E15-30 | 東海部埋土 | 土師器杯 | △ |
| 164 | 232 | 第4トレンチ | 南ビット群 | 土師器杯 | - |
| 165 | 272 | W55 N30付近 | 溝 | 土師器皿 | △ |
| 166 | 94 | 2次 E15-30 | 東海部埋土 | 土師器皿 | △ |
| 167 | 277 | S15-W135 | 一括 | 土師器皿 | - |
| 168 | 279 | S15-W75区 | 一括 | 土師器皿 | - |
| 169 | 251 | - | 東海部 | 土師器皿 | △ |
| 170 | 69 | 第1トレンチ | - | 土師器皿 | △ |
| 171 | 93 | 東校倉区 | 南半 | 土師器皿 | △ |
| 172 | 282 | 第12トレンチ | - | 土師器杯 | - |
| 173 | 278 | S15-W75区 | 一括 | 土師器杯 | - |
| 174 | 176 | W120区-J | 落ち込み | 土師器酒杯 | - |
| 175 | 177 | W120区-J | 落ち込み | 土師器酒杯 | - |
| 176 | 241 | 第9・10トレンチ | 南半 | 土師器酒杯 | - |
| 177 | 227 | 第9・10トレンチ | 南半倉倉 | 土師器酒杯 | - |
| 178 | 233 | 第2トレンチ | 南ビット群 | 土師器酒杯 | - |
| 179 | 237 | W70-W80 S15-S40 | 一括 | 土師器高盤 | - |
| 180 | 175 | W70-W80 S15-S40 | 一括 | 土師器高盤 | - |
| 181 | 228 | 第9・10トレンチ | 壁地層 | 土師器高盤 | - |
| 182 | 257 | W70-W80 S15-S40 | 一括 | 土師器高盤 | - |
| 183 | 128 | 第9・10トレンチ | 中央付近 | 土師器蓋 | - |
| 184 | 262 | G-4区 | 建物 廻り方 | 土師器蓋 | - |
| 185 | 252 | 西区東側スミ | 緑褐色整地層 | 須恵器釜 | - |
| 186 | 131 | 第12トレンチ | 南備付地層 | 土師器蓋 | - |
| 187 | 281 | 第12トレンチ | - | 土師器蓋 | - |

| 総番号 | 実測番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 検出 | |
|-----|------|-----------------|-------------------|------------|-----|---|
| 188 | 242 | S16-W143地点 | 南北溝 黄灰色粘土層 | 土師器長胴壺 | - | |
| 189 | 240 | W70-W80 S15-S40 | 一括 | 土師器長胴壺 | - | |
| 190 | 178 | W70-W80 S15-S40 | 一括 | 土師器長胴壺 | - | |
| 191 | 243 | W120区 | 落ち込み | 土師器長胴壺 | - | |
| 192 | 244 | S16-W143地点 | 南北溝黄灰色粘土層 | 土師器長胴壺 | - | |
| 193 | 64 | E15-30 | 東海部埋土 | 土師器長胴壺 | △ | |
| 194 | 130 | 第12トレンチ | 南備付地層 | 土師器蓋 | - | |
| 195 | 236 | W120区 | 落ち込み | 土師器蓋 | - | |
| 196 | 239 | W120区 | 落ち込み | 土師器長胴壺 | - | |
| 197 | 245 | OW75区 | 一括 | 土師器蓋 | - | |
| 198 | 109 | 第9・10トレンチ | 飯塚部北端付近 壁地層 | トリベ | △ | |
| 199 | 88 | 東校倉区 | 南半 灰褐色土層 地上上 | トリベ | △ | |
| 200 | 87 | E2区 | 南付近 | トリベ | △ | |
| 201 | 86 | 第9・10トレンチ | 飯塚部北端付近 壁地層 | トリベ | △ | |
| 202 | 111 | 金堂山 | - | 軒杵瓦 | △ | |
| 203 | 112 | 第3トレンチ | - | 軒杵瓦 | △ | |
| 204 | 280 | 第3トレンチ | - | 軒杵瓦 | - | |
| 205 | 291 | 金堂山 | 堀土内 | 瓦 | - | |
| 206 | 290 | 第9・10トレンチ | 落ち込みF内 | 平瓦 | - | |
| 207 | 298 | 金堂山 | 堀土内 | 平瓦 | - | |
| 209 | 110 | 東校倉区 | 南半 灰褐色土層 地上上 (2次) | 帯金具 | ○ | |
| 210 | 84 | - | - | 金属製品 | ○ | |
| 211 | 85 | 第9トレンチ | 北側 | 瓦葺板 | △ | |
| 212 | 97 | - | - | 瓦葺板 | △ | |
| 213 | 85 | 2次 O-W15 | 東海部被覆区 | 瓦葺板 | △ | |
| 214 | 98 | 第9・10トレンチ | 南側 | 鉋形陶器器蓋手摺 | △ | |
| 215 | 100 | 2次調査 | - | 鉋形陶器磁器 漆片塊 | △ | |
| 216 | 280 | S15-W75区 | 一括 | 中国製青磁碗 | △ | |
| 217 | 82 | 2次 O-E30 | 東海部付近 | 中国製青磁碗 | △ | |
| 218 | 101 | 第1区 | 壁地層 | 鉋形磁器漆片塊 | △ | |
| 219 | 108 | 第1区 | 壁地層 | 鉋形磁器漆片塊 | △ | |
| 220 | 102 | 第1区 | 壁地層 | 鉋形磁器漆片塊 | △ | |
| 221 | 103 | 第1区 | 壁地層 | 鉋形磁器漆片塊 | △ | |
| 222 | 105 | 第1区 | 壁地層 | 鉋形陶器銅毛目文鉢 | △ | |
| 223 | 107 | 金堂動 | - | 黄褐色土師行平蓋 | - | |
| 224 | 106 | 金堂山 | - | 黄褐色土師行平蓋 | - | |
| 225 | 104 | 第3トレンチ | - | 漆・明石系陶器 漆 | △ | |
| 226 | 284 | 第4トレンチ | 南半 | 万葉土器瓦葺板 | - | |
| 227 | 196 | 第3トレンチ | - | 土師器蓋 | - | |
| 228 | 259 | 不明 | 不明 | 軒杵瓦 | - | |
| 229 | 288 | - | - | 金堂山 | 軒杵瓦 | - |

73・74年度調査

ほぼ完形=○
 石膏部分破元=●
 現物未確認=-
 石膏破元=○
 破片=△

表3 実測遺物登録対照表(2)

| 観測番号 | 実測番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 保存 | 観測番号 | 実測番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 保存 | |
|------|------|-----|----------|--------|-----|------|------|-----|---------|--------|-------|---|
| 208 | 14 | 365 | 灰褐色土層 | 石製線漆施 | ○ | 307 | 7 | 11区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 230 | 251 | 762 | 灰褐色土層 | 軒先瓦 | △ | 306 | 82 | 33区 | 層連灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 231 | 252 | 652 | 河川B-1 | 軒先瓦 | △ | 309 | 5 | 11区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 232 | 306 | 356 | 灰褐色土層 | 瓦 | △ | 310 | 262 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 233 | 116 | 656 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 311 | 53 | 43区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 234 | 196 | 936 | 自然河川B-1 | +須恵器杯蓋 | △ | 312 | 281 | 02 | 年 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 235 | 58 | 226 | 柱穴2-81 | 須恵器杯蓋 | ○ | 313 | 106 | 02 | 年 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 236 | 64 | 236 | 柱穴2-81 | 須恵器杯蓋 | ○ | | | | 溝6-3 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 237 | 86 | 426 | 溝4-2-1上層 | 須恵器杯蓋 | ○ | 314 | 77 | 68区 | 排水 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 238 | 298 | 626 | 溝6-3 | 須恵器杯蓋 | △ | 315 | 268 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 239 | 15 | 336 | 漆柱 | 須恵器杯蓋 | △ | 316 | 273 | 76区 | 溝7-61 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 240 | 17 | 836 | 東郷水溝 | 須恵器杯蓋 | △ | 317 | 92 | 36区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 241 | 307 | 626 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 318 | 173 | 76区 | 溝7-61 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 242 | 231 | 926 | 南平灰褐色土層 | 不听说 | △ | 319 | 69 | 68区 | 大土坑B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 243 | 350 | 226 | 井戸2-1 | 木製井戸枠 | ○ | 320 | 81 | 68区 | 自然河川B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 244 | 352 | 226 | 井戸2-1 | 木製井戸枠 | △ | 321 | 65 | 36区 | 漆柱 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 245 | 351 | 226 | 井戸2-1 | 木製井戸枠 | ○ | 322 | 267 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 246 | 353 | 226 | 井戸2-1 | 木製井戸枠 | △ | 323 | 99 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 247 | 339 | 336 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 324 | 63 | 36区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 248 | 311 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 325 | 102 | 75区 | 溝7-43 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 249 | 330 | 336 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 326 | 30 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 250 | 332 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 327 | 61 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 251 | 341 | 336 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 328 | 66 | 68区 | 大土坑B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 252 | 348 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 329 | 1 | 11区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 253 | 347 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 330 | 100 | 75区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 254 | 338 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 331 | 78 | 02 | 年 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ |
| 255 | 342 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 332 | 227 | 75区 | 溝7-61 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 256 | 336 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 333 | 268 | 43区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 257 | 346 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 334 | 119 | 22区 | 大土坑2-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 258 | 345 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 335 | 67 | 68区 | 大土坑B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 259 | 344 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 336 | 63 | 68区 | 溝6-3 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 261 | 340 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 337 | 80 | 33区 | 層連灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 262 | 335 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 338 | 56 | 68区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 263 | 333 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 339 | 271 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 264 | 343 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 340 | 101 | 02 | 年 | 溝6-3 | 須恵器杯蓋 | △ |
| 265 | 337 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 341 | 62 | 68区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 266 | 339 | 326 | 井戸3-1 | 木製井戸枠 | ○ | 342 | 90 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 267 | 213 | 326 | 柱穴3-344 | 石礎 | ○ | 343 | 285 | 43区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋? | △ | |
| 268 | 214 | 626 | 柱穴6-56 | 石礎 | ○ | 344 | 179 | 75区 | 溝7-61 | 須恵器杯蓋? | △ | |
| 269 | 212 | 226 | 灰褐色土層 | 石礎 | ○ | 345 | 179 | 75区 | 溝7-61 | 須恵器杯蓋? | △ | |
| 270 | 215 | 226 | 灰褐色土層 | 瓦形石礎 | ○ | 346 | 88 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 271 | 211 | 426 | 溝4-2上層 | 敷瓦片片 | ○ | 346 | 13 | 68区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 272 | 233 | 226 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 347 | 68 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 273 | 235 | 226 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 348 | 216 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 274 | 239 | 116 | 池山土層 | 円筒埴輪 | △ | 349 | 109 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 275 | 238 | 116 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 350 | 317 | 43区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 276 | 222 | 726 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 351 | 9 | 11区 | 黄土 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 277 | 243 | 326 | 井戸3-1上層 | 円筒埴輪 | △ | 352 | 290 | 02 | 年 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 278 | 241 | 626 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 353 | 291 | 68区 | 自然河川B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 279 | 237 | 656 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 354 | 324 | 43区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 280 | 242 | 326 | 井戸3-1 | 円筒埴輪 | △ | 355 | 323 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 281 | 236 | 726 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 356 | 127 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 282 | 256 | 326 | 灰褐色土層 | 円筒埴輪 | △ | 357 | 322 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 283 | 74 | 426 | 溝4-2上層 | 須恵器杯蓋 | ○ | 358 | 320 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 284 | 79 | 226 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 359 | 128 | 43区 | 溝4-2 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 285 | 104 | 656 | 溝6-3 | 須恵器杯蓋 | △ | 360 | 278 | 43区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 286 | 12 | 116 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 361 | 70 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 287 | 4 | 116 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 362 | 73 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 288 | 78 | 226 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 363 | 72 | 33区 | 層連灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 289 | 275 | 656 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | ● | 364 | 318 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 290 | 94 | 326 | 溝3 | 須恵器杯蓋 | △ | 365 | 123 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 291 | 96 | 226 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 366 | 83 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 292 | 95 | 326 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 367 | 288 | 68区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 293 | 113 | 226 | 大土坑2-1 | 須恵器杯蓋 | △ | 368 | 319 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 294 | 58 | 226 | 方溝2-1 | 須恵器杯蓋 | △ | 369 | 64 | 68区 | 東郷水溝 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 295 | 141 | 326 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 370 | 280 | 68区 | 大土坑B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 296 | 87 | 226 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | ● | 371 | 193 | 33区 | 層連灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 297 | 276 | 626 | 自然河川B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | 372 | 37 | 75区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 298 | 130 | 656 | 自然河川B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | 373 | 112 | 68区 | 自然河川B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 299 | 174 | 226 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 374 | 328 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 300 | 36 | 426 | 溝4-2上層 | 須恵器杯蓋 | () | 375 | 287 | 11区 | 黄土 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 301 | 117 | 656 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 376 | 116 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 302 | 283 | 326 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 377 | 275 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 303 | 327 | 326 | 層連灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 378 | 124 | 33区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 304 | 75 | 226 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | 379 | 292 | 22区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 305 | 265 | 656 | 自然河川B-1 | 須恵器杯蓋 | △ | 380 | 325 | 11区 | 灰褐色土層 | 須恵器杯蓋 | △ | |
| 306 | 6 | 116 | 溝1-5 | 須恵器杯蓋 | △ | | | | | | | |

表3 実測遺物登録対照表(3)

| 観測番号 | 実測番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 検存 | 観測番号 | 実測番号 | 地区 | 遺構番号・土層 | 遺物名 | 検存 |
|------|------|----|-----------|-------|----|------|------|----|-----------|----------|----|
| 381 | 107 | 6区 | 河川B-1 | 須恵磁器 | △ | 457 | 41 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 | ○ |
| 382 | 240 | 02 | 表土 | 須恵磁器 | △ | 458 | 42 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 | ○ |
| 383 | 266 | 3区 | 溝 | 須恵磁器 | △ | 459 | 47 | 2区 | 井戸2-1墓下層 | 木筒 柄 | △ |
| 384 | 304 | 7区 | 灰褐色土層 | 須恵磁器 | △ | 460 | 46 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 木筒 柄 | △ |
| 385 | 209 | 02 | 灰褐色土層 | 須恵磁器 | △ | 461 | 45 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 木筒 柄 | ○ |
| 386 | 139 | 6区 | 土柱B-6 | 須恵磁器 | △ | 462 | 44 | 2区 | 井戸2-1墓下層 | 須恵磁器 | ○ |
| 387 | 153 | 2区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 463 | 150 | 2区 | 井戸2-1東方土層 | 須恵磁器 | △ |
| 388 | 159 | 6区 | 灰白色土層 | 土師器杯 | △ | 464 | 148 | 2区 | 井戸2-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 389 | 164 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 465 | 142 | 2区 | 井戸2-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 390 | 163 | 2区 | 方形溝2-1 | 土師器杯 | △ | 466 | 148 | 2区 | 井戸2-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 391 | 312 | 6区 | 溝9-3 | 土師器杯 | △ | 467 | 151 | 2区 | 井戸2-1上層 | 土師器杯 | △ |
| 392 | 308 | 6区 | 北平 | 土師器杯 | △ | 468 | 149 | 2区 | 井戸2-1上層 | 須恵磁器ハソウ | △ |
| 393 | 160 | 2区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 469 | 143 | 2区 | 井戸2-1上層 | 土師器高麗 | △ |
| 394 | 315 | 7区 | 溝7-61 | 土師器杯 | △ | 470 | 147 | 2区 | 井戸2-1上層 | 土師器コシキ | △ |
| 395 | 154 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 471 | 145 | 2区 | 井戸2-1上層 | 土師器 | △ |
| 396 | 181 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 472 | 144 | 2区 | 井戸2-1上層 | 土師器 | △ |
| 397 | 181 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 473 | 152 | 2区 | 井戸2-1上層 | 土師器高麗 | △ |
| 398 | 156 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 474 | 260 | 3区 | 井戸3-1下層 | 須恵磁器 | △ |
| 399 | 113 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 475 | 263 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 400 | 162 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 476 | 309 | 3区 | 井戸3-1上層 | 土師器 | △ |
| 401 | 158 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 477 | 19 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 402 | 314 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 478 | 261 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 403 | 180 | 6区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 479 | 311 | 3区 | 井戸3-1上層 | 土師器 | △ |
| 404 | 155 | 6区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 480 | 259 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 405 | 157 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器杯 | △ | 481 | 22 | 3区 | 井戸3-1下層 | 須恵磁器 | △ |
| 406 | 152 | 7区 | 溝7-61 | 土師器杯 | △ | 482 | 26 | 3区 | 井戸3-1下層 | 土師器高麗 | △ |
| 407 | 171 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 483 | 263 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 408 | 165 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 484 | 126 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 409 | 355 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 485 | 284 | 3区 | 井戸3-1下層 | 土師器 | △ |
| 410 | 177 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 486 | 264 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 411 | 167 | 2区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 487 | 21 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 412 | 366 | 3区 | 穴2-15B | 土師器高麗 | △ | 488 | 20 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 413 | 169 | 6区 | 自然河川B-1 | 土師器高麗 | △ | 489 | 24 | 3区 | 井戸3-1下層 | 須恵磁器 | △ |
| 414 | 168 | 2区 | 墳山道上 | 土師器高麗 | △ | 490 | 26 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 415 | 170 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 491 | 16 | 3区 | 井戸3-1下層 | 須恵磁器 | △ |
| 416 | 316 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 492 | 23 | 3区 | 井戸3-1上層 | 須恵磁器 | △ |
| 417 | 122 | 2区 | 大土柱2-1 | 土師器高麗 | △ | 493 | 52 | 4区 | 溝4-2上層 | 中国製白磁碗 | △ |
| 418 | 120 | 2区 | 大土柱2-1 | 土師器高麗 | △ | 494 | 202 | 7区 | 灰褐色土層 | 中国製白磁碗 | △ |
| 419 | 305 | 6区 | 土柱B-14 | 土師器高麗 | △ | 495 | 51 | 02 | 溝6-3 | 中国製白磁碗 | △ |
| 420 | 172 | 1区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 496 | 289 | 7区 | 灰褐色土層 | 中国製白磁碗 | △ |
| 421 | 121 | 2区 | 大土柱2-1 | 土師器高麗 | △ | 497 | 54 | 5区 | 灰褐色土層 | 中国製白磁碗 | △ |
| 422 | 203 | 6区 | 自然河川B-1 | 土師器高麗 | △ | 498 | 53 | 7区 | 灰褐色土層 | 中国製白磁碗 | △ |
| 423 | 175 | 3区 | 灰褐色土層 | 土師器高麗 | △ | 499 | 327 | 7区 | 灰褐色土層 | 中国製白磁碗 | △ |
| 424 | 175 | 7区 | 溝7-61 | 土師器高麗 | △ | 500 | 200 | 2区 | 灰褐色土層 | 中国製青花碗 | △ |
| 425 | 178 | 6区 | 自然河川B-1下層 | 土師器高麗 | △ | 501 | 299 | 1区 | 溝土 | 中国製青花碗 | △ |
| 426 | 20 | 1区 | 溝土 | 土師器高麗 | △ | 502 | 182 | 7区 | 灰褐色土層 | 土師器土師器 | △ |
| 427 | 55 | 6区 | 大土柱B-1 | 土師器高麗 | △ | 503 | 183 | 7区 | 灰褐色土層 | 土師器土師器 | △ |
| 428 | 216 | 6区 | 自然河川B-1下層 | 土師器高麗 | △ | 504 | 187 | 3区 | 灰褐色土層 | 瓦葺品 | △ |
| 429 | 216 | 6区 | 自然河川B-1下層 | 土師器高麗 | △ | 505 | 185 | 2区 | 灰褐色土層 | 瓦葺品 | ● |
| 430 | 217 | 6区 | 自然河川B-1 | 土師器高麗 | △ | 506 | 186 | 7区 | 東割溝 | 土師器土師器 | △ |
| 431 | 250 | 2区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ | 507 | 190 | 4区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ |
| 432 | 254 | 4区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ | 508 | 306 | 3区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ |
| 433 | 244 | 3区 | 溝 | 瓦葺 | △ | 509 | 189 | 5区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ |
| 434 | 245 | 6区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ | 510 | 191 | 4区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ |
| 435 | 249 | 6区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ | 511 | 188 | 7区 | 溝7-1 | 瓦葺 | △ |
| 436 | 246 | 7区 | 溝土 | 瓦葺 | △ | 512 | 195 | 6区 | 自然河川B-1 | 東割溝 | △ |
| 437 | 247 | 4区 | 灰褐色土層 | 瓦葺 | △ | 513 | 196 | 6区 | 自然河川B-1 | 瓦葺土葺土葺 | △ |
| 438 | 250 | 6区 | 溝6-3 | 瓦葺 | △ | 514 | 205 | 6区 | 自然河川B-1 | 瓦葺土葺土葺 | △ |
| 439 | 248 | 1区 | 溝土 | 瓦葺 | △ | 515 | 207 | 4区 | 灰褐色土層 | 土師器土師器 | △ |
| 440 | 25 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 516 | 206 | 6区 | 自然河川B-1 | 瓦葺土葺土葺 | △ |
| 441 | 26 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 517 | 206 | 6区 | 自然河川B-1 | 瓦葺土葺土葺 | △ |
| 442 | 33 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 518 | 204 | 7区 | 灰褐色土層 | 瓦葺土葺土葺 | △ |
| 443 | 27 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 519 | 207 | 1区 | 井戸1-1下層 | 肥前磁器瓦葺片葺 | △ |
| 444 | 35 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 520 | 199 | 1区 | 溝土 | 肥前磁器瓦葺片葺 | △ |
| 445 | 111 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 521 | 220 | 3区 | 東割溝 | 肥前磁器瓦葺片葺 | △ |
| 446 | 110 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 522 | 218 | 3区 | 井戸3-2下層 | 肥前磁器瓦葺片葺 | △ |
| 447 | 38 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 523 | 222 | 3区 | 東割溝 | 瓦葺土葺土葺 | △ |
| 448 | 132 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 524 | 196 | 7区 | 灰褐色土層 | 備前磁器 | △ |
| 449 | 32 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 525 | 228 | 1区 | 溝土 | 丹波磁器 | △ |
| 450 | 29 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 526 | 221 | 3区 | 東割溝 | 土師器土師器 | △ |
| 451 | 34 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 土師器高麗 | ○ | 527 | 225 | 3区 | 東割溝 | 土師器土師器 | △ |
| 452 | 48 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 柄 | △ | 528 | 226 | 3区 | 東割溝 | 土師器土師器 | ○ |
| 453 | 50 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 柄 | △ | | | | | | |
| 454 | 39 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 柄 | △ | | | | | | |
| 455 | 40 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 柄 | △ | | | | | | |
| 456 | 43 | 2区 | 井戸2-1納内下層 | 漆車 柄 | △ | | | | | | |

ぼろ形＝○
 石葺復元＝○
 石葺部分復元＝●
 破片＝△

表3 実測遺物登録対照表(4)

付載 1 平尾遺跡出土ヒノキ井戸枠の年輪年代測定法による暦年代の測定

光谷拓実 (独立行政法人奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)
西川寿勝 (大阪府教育委員会文化財保護課)

1 はじめに

調査は堺市美原町平尾で平成15年度に国道バイパス建設に先立って実施されたもので、飛鳥時代から奈良時代初頭の掘立柱建物・区画溝・井戸などがみつかった。また、建物群は規模が大きく、瓦が伴うこと、役人の礼服腰帯飾りである石製丸柄や大型の陶硯などが含まれることより、平尾遺跡は丹比郡衙だったと推測されている。

ちなみに、平尾遺跡は1973・74年、府立美原高校建設に先立って30000㎡に及ぶ調査が行われたことによって判明した遺跡である。この調査は今回調査区のすぐ北側で行われ、方位にそって整然と並ぶ掘立柱建物群や区画溝がみつき、注目を受けた。ただし、この調査では遺構を掘削せず、用地全体を盛り土保存したため、遺跡の年代や性格は確定できなかった。

平尾遺跡は古代の官道である「茅渟道」沿いにあり、飛鳥・藤原宮と難波宮をむすぶ交通の要衝にあることが知られる。遺跡の性格をめぐっては、この地域の有力氏族丹比(多治比)氏の本拠地から発展したものか、飛鳥・奈良時代の官衙跡であるのか、という2説が知られ、結論は出なかった。

今回の調査では掘立柱建物・道状遺溝・区画溝などとそれに伴う遺物が調査区のほぼ全域から発見された。発見された土器はコンテナ80箱程度に及ぶ。飛鳥Ⅳ～Ⅴ段階の土器(藤原宮期)が大半で、ごく少量の飛鳥Ⅲ段階と平城Ⅱ段階の土器が伴う。

2 井戸3-1について

南西部の調査区では掘立柱建物に伴って2基の井戸が発見された。3区北端で発見された井戸3-1は下層に井桁状に組まれたヒノキ板材による井戸枠が残されていた。ヒノキ板材のうち、5枚は樹皮に近い辺材部分が残っていたため、年輪年代測定法による伐採年代測定を実施した。

井戸3-1は上面の直径が約3.8m、深さ3.4mを測る。上半は深さ1.2mまですり鉢状にすぼまり、一辺0.8mの深さで隅丸方形に垂直に掘り込まれる。この垂直部分の内側には長辺0.6mのヒノキ板材を組み上げて井戸枠として据え付ける。

井戸枠は最上段を1.1m程度の板材で、繰り込みを入れて井桁状にする。厚みと幅は不ぞろいであり、転用材と考える。本来、この上方にも井桁があったのだろうが腐れた木片がいくつかみられた。

下から一～四段の井戸枠は長辺約0.8m、短辺約0.3m、厚さ約6cmの板材両端を凸凹形に加工して桁形に組んだ頑丈な構造である。各板材はハツリ痕跡が明瞭に残り、保存状態もよい。

井戸3-1の上層は暗褐色土で埋められていた。井戸2-1同様、本来この部分には井戸枠の続きの部分が上部構造として地上までのびていたようだが、井戸廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。この埋め土は自然堆積によるものではなく、地山粘土ブロックを含むことから廃絶時に一気に埋め立てられたと考える。混入と思われる土師器・須恵器片が含まれ、もっとも新しいものは平城Ⅱ段階の特徴をもつ須恵器広口壺などがある。

井戸3-1の下層は青灰強粘土・暗灰砂などが互層に堆積しており、遺物はほとんどなかった。井戸掘り方は、井戸枠の外側を地山粘土ブロックによって充填、その上部は白灰粘土などがみられた。井戸枠内の下層からは混入と思われる須恵器・土師器片が少量発見されている。いずれも上層出土遺物と同じ型式で下層の埋め土も廃絶時のものようだ。

井戸枠に使われた板材はすべてヒノキで、東西南北の四辺に一枚ずつ、四段の計16枚がみつかった。板材の中には辺材部分が目視できるものが含まれた。

その結果、一段目の3枚、二段目と四段目にそれぞれ1枚ずつ、計5枚の板材において年代計測が可能であった。他は、辺材部分が残されておらず、計測していない。

3 年輪年代の計測

まず、年輪年代測定法の原理を概観する。樹木の年輪幅を10 μ の単位で計測し、その変化を経年的に調べると、生育環境が似かよった一定地域のなかでは、樹種ごとに固有の年輪変動パターン（年輪パターン）を描くことが判明している。つまり、同年代に一定の地域の中で生育した樹木であれば、その年輪パターンはほぼ同じものになるのである。こうした性質をもった樹木の年輪パターンを手がかりにすれば、同年代に形成された年輪かどうかの判別が、指紋の照合をおこなうがごとく可能となる。

研究開始当初、このような特性をもった樹木は無いと思われていたが、ヒノキやスギをはじめ、針葉樹10種類、広葉樹2種類（ブナ、ミズナラ）の総数14種類に照合が可能であることが判明した。次に、樹種・地域を考慮して伐採年の判明している多数の現生木試料から、年輪幅の計測値（年輪データ）を収集し、これを総平均する。それにより個体差が消去される結果、暦年標準パターンを作成することができる。そして、古建築部材や遺跡出土材を多数収集し、それから計測、収集した年輪データを用いて作成した年輪パターンと、すでに作成済みの暦年標準パターンとを順次照合していく。その重複位置で連鎖すると長期にさかのぼる暦年標準パターンが作成できる。

次に、年代不明の木材、例えば遺跡出土木材をとりあげ、その年輪幅を計測して、試料の年輪パターン（試料パターン）を作成する。最後に、暦年標準パターンのなかで合致するところを探し求めれば、暦年標準パターンの暦年を試料パターンにあてることができる。つまり、試料材の

年輪は今から何年前のものかがわかることになる。

このとき、試料材に樹皮が一部でも残存しているか、あるいは成長していた当時の最外年輪が残存している形状のものであれば、試料材の伐採年、あるいは枯死年を暦年代で正確に確定できる。なお、年輪パターンの照合には、年輪パターンそのものを肉眼で観察する場合と、年輪データをパソコンで統計処理する場合がある。

肉眼で観察するためには、ヨコ軸に等間隔（通常5mm間隔）で年代をとり、タテ軸には各年の年輪幅を片対数グラフにプロットし、これをつないでいくことによって、鋸歯状の折れ線グラフが作成できる。これが年輪パターングラフである。一方、コンピュータによる年輪パターンの照合は、時系列解析に用いられる相関分析手法を採用している。

現在、ヒノキが紀元前912年まで、スギが紀元前1313年まで、コウヤマキが22~741年、ヒバが924~1325年まで、標準パターンが完成している。この年代範囲なら1年単位の年代測定が可能である。

年輪幅の計測は双眼実体顕微鏡付きの専用の年輪読取り器（0.01mmまで計測）を使用し、木口面か柀目面でおこなう。奈良文化財研究所ではアメリカ製のものを含め、現在3台を使用して、各種木質古文化財の年輪計測をおこなっている。

実際は、試料から直接計測する場合と、試料から採取した標本から測る場合とがある。試料そのものから計測するのが一番であるが、対象物が大きい場合などは、棒状標本を採取しなければならないこともある。このとき、古建築部材などの乾燥材からはドリルを使った専用の標本抜きとり器（直径1cm、最大長30cmまでは採取可能である）を使う。また、発掘調査で出土した木材など湿潤状態にあるものからは、スウェーデン製の成長錐を使って直径5mmの棒状標本を採取することができる。

柱材などから採取した円盤標本は、年輪があまり乱れていない箇所に測線を複数方向設定し、この部分にそって表面をカッターナイフなどで薄く削り、平滑にしてから胡粉（貝殻を焼いて製した炭酸カルシウムの粉末）を塗布する。棒状標本であれば、試料台に固定し、ナイフなどの刃物で表面を削り、胡粉を塗布する。こうすることによって、年輪界が明瞭となり、計測が容易となる。

4 資料の年代

計測結果は667・672・675年に $+ \alpha$ 年というグループと695・704年に $+ \alpha$ 年というグループに分けられる。 α 年は樹皮から板材最外部の年輪までの間で亡失してしまった年輪数である。

樹齢500年前後のヒノキは辺材から樹皮までの厚みが2.5~3cm程度で、20~30年分の年輪をもつことがわかっている。今回発見の板材は年輪の密度や形状から樹齢が若いものはなかった。さらに、計測した板材は辺材の厚みが1~2cm程度残っており、個々に亡失した年輪数を推定する

ことができる。以上を踏まえると前者のグループは680年代に伐採年を求められ、後者のグループは710～720年頃に伐採年を求められる。

この年代差が、板材の再利用や差し替えを意味するのか、偶然のものであるかは結論が出ない。ただし、もっとも新しい720年頃に伐採された一段目西側に使われていた板材をもって、井戸造営年代の一端とすることができ、測定値は土器などから位置づけされている遺跡の消長内におさまる。

井戸3-1から発見されている土器片の型式は飛鳥Ⅴ～平城Ⅱ段階である。これらは井戸廃絶期の埋め土に混入されていたものと考えられる。したがって、この井戸は平城Ⅱ段階に造営され、平城Ⅱ段階の内に廃絶したことがうかがえる。

平尾遺跡では飛鳥Ⅳ～Ⅴ段階の土器が発見遺物の大半を占め、平城Ⅱ段階に降る土器が少量含まれることから廃絶の時期と位置づけられている。井戸3-1は平城Ⅱ段階に造営されたものである。井戸の廃絶は遺跡の廃絶時期に対応するものだろう。

(本文は1・2節を西川が、3節を光谷が執筆し、4節を両者でとりまとめた。)

| 井戸枠部位 (井戸3-1) | 計測年 (西暦年) | 辺材の厚み | 計測年輪幅 (本) |
|------------------|--------------|--------|--------------|
| 一段目 西側 | 704 | 約1cm | 309 |
| 四段目 東側 | 695 | 約1.8cm | 270 |
| 一段目 北側 | 675 | 確定できず | 299 |
| 二段目 東側 | 672 | 約2cm | 272 |
| 一段目 東側 | 667 | 約2cm | 279 |

※樹齢500年前後のヒノキは辺材の厚みが2.5～3cm (20～30年)。伐採年は辺材の残りによって計測年に加味する必要がある。

付載2 平尾遺跡出土鑄造関連遺物の蛍光エックス線分析成果

橋本俊範・佐々木健太郎（奈良大学大学院文学研究科）

1 はじめに

大阪府堺市美原町所在の平尾遺跡では飛鳥時代末～奈良時代初頭にかけての建物群が大規模に確認・調査され、丹比郡衙と推定されている。

そのうち、調査地から出土した鑄造関連遺物トリベ・フイゴ羽口・鑄型片について、奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室で蛍光エックス線分析を行った。なお、個々の遺物は包含層出土資料で一括発見されたものではない。また、遺跡内では鑄造関連遺構も未発見である。時期を細かく限定できないものの、包含層中の遺物は飛鳥時代末～奈良時代初頭にほぼ限られる。

2 分析資料

分析資料はトリベ片4点（トリベ3・4・5・6）、フイゴ羽口片2点、鑄型片1点の合計7点である。トリベは74年度の調査資料で、他は03年度の調査資料である。トリベの直径は約8.4～12.8cm、厚さ1.8cm前後に復元できる。碗形の土製品で表面は淡赤灰色、内面は灰褐色に変色する。羽口は復元内径約3.8cm、明赤灰色で先端にガラス化した不純物がつく。器厚より鑄造用とわかる。鑄型片は約5cm四方の平滑面をもつ土製品で、外枠部分は風化して、形状をとどめない。平滑面に残る真土部分は硬く焼けており、使用されたと考える。

3 分析方法

蛍光エックス線による非破壊分析を行い、遺物表面に付着する金属成分を抽出、鑄造の実態解明を目的とした。蛍光エックス線分析の原理は、物質にエックス線を照射すると元素に固有の波長をもつ特性エックス線が発生する。この波長やエネルギーの強度から物質に含まれる元素の種類や含有量を読み取る分析法である。蛍光エックス線分析にはエネルギーを測定するエネルギー分散型と波長を測定する波長分散型がある。

今回の分析は奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室でエネルギー分散型微小蛍光エックス線分析装置（EDAX Inc社製 EAGLE II XXL-NR、クロムターゲット）を使用した。分析は同大学西山要一教授の指導で2006年に実施し、西川寿勝氏の協力を得た。

測定条件は真空下で、電圧 25～30kV、電流 650～800 μ Aに設定し、分析範囲 ϕ 0.1mm、測定時間 200secとした。各遺物につき複数箇所を分析した。

4 分析結果

トリベ3（201） トリベ内面の焼けて、灰褐色に変色した部分を分析した。検出した主な元素は

アルミニウム (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である。いずれも、土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素が検出された。熔かした金属に関連する元素はない (図左 中段)。

トリベ4 (200) 二箇所分析した。まず、内面に弧を描くように残存する黒灰色の付着物である。さらに外面の注ぎ口付近に付着していた直径約 1 mm の黒色異物を分析した。前者、黒灰色付着物の付着範囲は熔かした金属を注いだ痕跡と考え、マッピング分析も併せて行った。前者から検出した主な元素はアルミニウム (Al)、珪素 (Si)、硫黄 (S)、銀 (Ag)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である。いずれも、銀以外は土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素である。(図右 上段)。

一方、後者の外面の注ぎ口付近の黒色異物は銀 (Ag)、塩化物イオン (Cl)、臭素 (Br) を検出した。銀は高い含有量でこの異物が飛び散った銀粒であることがわかる。臭素・塩素は埋蔵時の土壌もしくは出土後に空気中成分と銀が結合し、臭化銀・塩化銀となったため含有されたと考える (図左 上段)。

さらに、前者の分析範囲を広げ、マッピング分析を行った結果、灰黒色のライン上に銀 (Ag) の分布を確認し、その範囲は内面・注ぎ口・口縁部付近に広がることがわかった。以上より、トリベの溶解物は純度の高い銀であることが判明した。

トリベ6 (198) 内面の焼けて赤褐色ないし灰黒色に変色した部分を分析した。検出した主な元素はアルミニウム (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である。いずれも、土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素が検出された。熔かした金属に関連する元素はない。

トリベ7 (199) 内面の焼けて赤褐色ないし灰黒色に変色した部分を分析した。検出した主な元素はアルミニウム (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である。いずれも、土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素が検出された。熔かした金属に関連する元素はない。

羽口 (大) (428) 炉の焼成部に接触していたことにより付着した黒色の不純物を分析した。検出した主な元素はアルミニウム (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である (図右 中段)。いずれも、土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素が検出された。熔かした金属に関連する元素はない。鉄は含有量より、溶解成分とは考えにくい。微量元素として、リンと硫黄が含まれており、燃料に起因するものかもしれない。

羽口 (小) (427) 炉の焼成部に接触していたことにより付着した黒色の不純物を分析した。検出した主な元素はアルミニウム (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である (図左下段)。いずれも、土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素が検出された。熔かした金属に関連する元素はない。鉄は含有量より、溶解成分とは考えにくい。

鑄型 (426) 焼けて灰色に変色した真土部分を分析した。検出した主な元素はアルミニウム (Al)、

珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) である (図右 下段)。いずれも、土製品本体の成分、及び付着の土壌成分に起因する元素が検出された。熔かした金属に関連する元素はない。鉄は含有量より、溶解成分とは考えにくい。

5 考察

陶器窯跡群出土須恵器の蛍光エックス線分析による胎土分析では、珪素・カリウム・カルシウム・チタン・鉄・ルビジウム・ストロンチウムが胎土に含まれる主な元素として知られる。今回分析資料も陶器窯跡群に近い南河内の遺跡出土品であり、共通する胎土成分が認められる。各資料から検出された珪素、カリウム、カルシウム、チタン、鉄は胎土に由来する元素、もしくは埋没地の土壌成分に由来する元素と推定する。一部は燃料に由来する可能性もある。

トリベ4では外面に異物の付着が肉眼で認められ、それが純度の高い銀粒であることが確認された。このような金属粒は内面にも確認でき、マッピング分析によって銀の分布範囲が内面の注ぎ口から口縁部に広がることが明らかとなった。トリベの形状から考えて、溶解した銀を鋳型に注いだ痕跡が灰黒色の範囲として付着したと推定できる。したがって、平尾遺跡で銀細工、または銭貨などの銀製品鋳造が結論付けられる。

ただし、他のトリベからは銀の痕跡が確認できなかった。その理由として、トリベの湾曲がきつく、底中央部分の分析が装置の技術的条件として出来なかったこと、付着した金属が徹底的にこそぎ落とされた可能性があげられる。

また、羽口と鋳型からも製品を限定できる元素は検出されなかった。銅・鉄などの鋳造では鋳造関連遺物に付着物とした金属原料が残されることが多く、貴金属の鋳造だったため徹底的に回収されたのかもしれない。

最後に、堺市美原町域では太井遺跡の奈良時代前期鋳造遺構出土トリベが銀製品製作に関わることが知られ、話題となった。今回の検出例はそれをさかのぼる時期のものであり、奈良県飛鳥池遺跡と並び、律令期最古段階の銀製品の工房が確認されたこととして評価できる。

美原地域は古代末以降、鋳造活動が発展し、中世から近世にかけては河内鋳物師の本拠地となった。これらの技術者集団の起源は河内鋳銭司にさかのぼらせる可能性もあり、太井遺跡と並び、平尾遺跡でも鋳造活動が行われていたことは興味深い。

(本文は1～3節を佐々木が、4節と挿図を橋本が作成し、5節は両者で執筆した。なお、各資料番号は本書の挿図番号に対応する。)

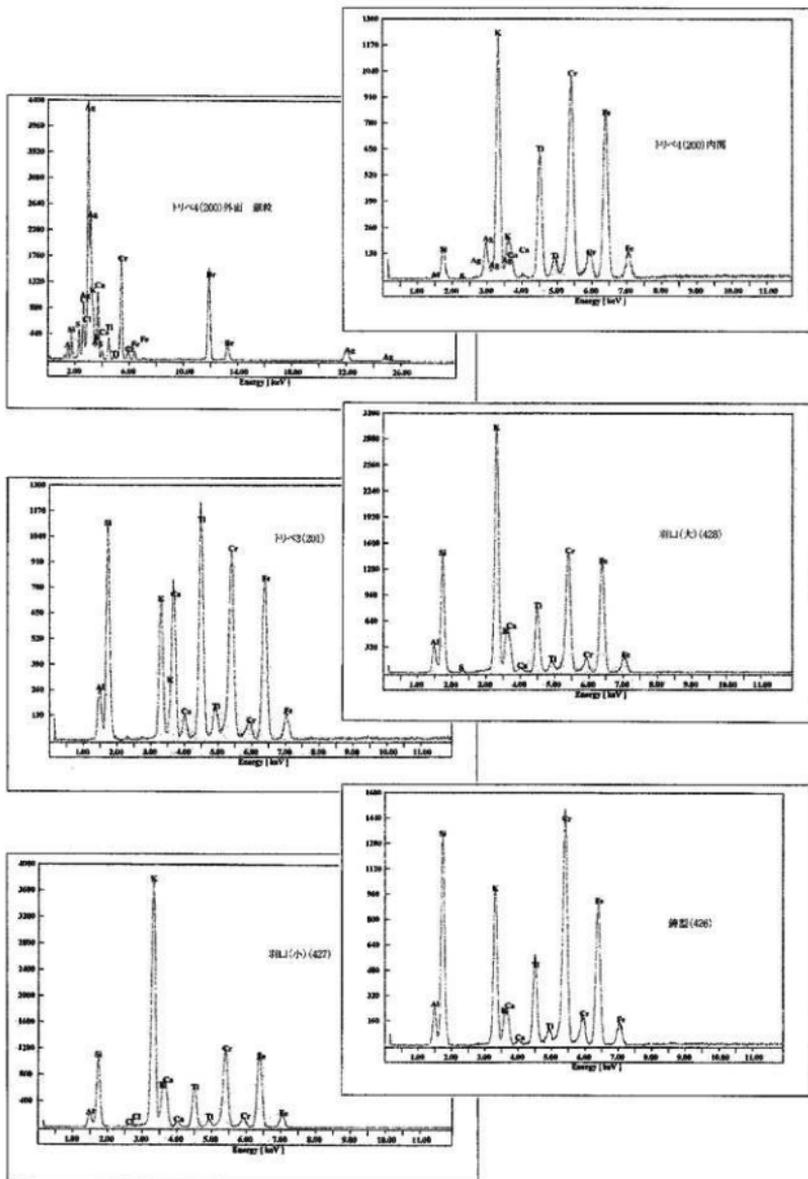


図 蛍光エックス線スペクトル (※Crは分析装置に由来する。)

付載3 平尾遺跡出土木器の高級アルコール法による保存処理報告

汐見真（株式会社 吉田生物研究所）

はじめに

平尾遺跡は大阪府堺市美原町に所在する飛鳥時代から奈良時代にかけての官衙遺跡と考えられている。平成15年7月から大阪府教育委員会が発掘調査を行い、二基の井戸から各種の木製品が発見された。なかでも、5枚のヒノキ井戸枠は年輪年代測定法で660年から700年にかけての伐採となる測定年代が導かれ、注目を集めた。

これをうけて吉田生物研究所では、平成16年度にヒノキ井戸枠16枚（251）～（266）について、平成17年度に斎串・漆塗り容器などの木製品（452）～（462）について、大阪府教育委員会より委託を受け、高級アルコール法による保存処理を実施した。

1 高級アルコール法の原理

高級アルコールは一般に高分子脂肪族アルコールを指し、低分子量の安定した物質で、いずれも軟膏基材や化粧品などに使われている。一方、低級アルコールと呼ばれているものとして、メタノールやエタノールなどがあげられる。高級アルコール法は、この難水溶性の物質と木材内部の水とを置換させる方法である。

この処理法の利点は、保存処理後に保管が容易になることがあげられる。具体的にはまず湿度管理の煩わしさから恒久的に解放されることである。次に重量が水漬け時との比較で約2割程度減され、軽すぎることもなく適度な質量になることである。また、100%含浸させるので脆弱であった遺物も強度を保つことができる。

2 処理計画

平成16年度は4面×4段で組まれていた井戸枠材16枚を保存処理することとなった。樹種はヒノキで、大きさも均一で厚みは約3cmであった。材の形状は2種類に分けられ、表面に加工痕もよく残っており、状態も良好な資料であった。保存処理後に組み上げることを想定しておく必要があったため、十分時間をかけて慎重に処理をすることが求められた。

平成17年度には、斎串5点、漆塗り容器など、比較的小さな木製品10点を保存処理することになった。斎串は針葉樹で厚さが約2mmと薄いため、取り扱いに注意を要した。曲物側板は折損部分を矯正する必要があったため、含浸時に矯正することとした。漆塗り容器は大きく割れており、小片も含めて接合復元する必要があった。斧柄は広葉樹だったため、針葉樹とは含浸の進め方を変える必要があった。杓の柄及び用途不明木製品はいずれも針葉樹で、不明木製品の方は小片を接合し、復元する必要があった。

3 処理工程

- ①水洗い・・・搬入した遺物の表面に付着した土などの汚れを水洗い。
- ②処理前調査・・・搬入時の遺物の状況を35mmで写真撮影を行い、記録。
- ③含浸事前処理・・・水～低級アルコールへと置換していく。30%→50%→70%→90%→99.9%と段階的に濃度を上げていった。
- ④含浸処理・・・低級アルコールから高級アルコールへと置換。段階的に濃度を上げていく。(30%→50%→70%→90%→99.9%)
- ⑤引上・冷却・・・処理槽から遺物を引上げ、室温にて冷却。
- ⑥表面洗浄・・・表面に残った高級アルコールを除去。
- ⑦接合・復元・・・「アルタインMH」/弊社製(アクリル樹脂)を用いて接合・復元や隙間の充填を行い、樹脂部分を整形した後アクリル絵の具を用いて彩色した。
- ⑧処理後記録・・・保存処理終了後の状態を写真撮影し、記録。(処理前に準ずる)その後、保存処理が問題なく行われていることを確認する目的で観察期間を設けた。

おわりに

- ・高級アルコール法による木製品の保存処理は従来のPEG含浸法等に比べ短期に軽く仕上がる特徴がある。また、保存処理後に湿度管理が不要になるため、特別収蔵庫でなくても保管することが可能である。このことから出土木製品の展示、活用非常に有効といえる。本来の色調や質感が損なわれにくく、心材・遍材、年輪などの検証と観察にも有効である。
- ・種別を問わない木製品全般の保存処理法として非常に有効な処理方法である。
- ・処理法が開発されてから十数年経つが、今後さらに各種の樹種で実績が増加し、経年変化が少ないことが実証されれば、出土木製品の保存処理法として将来にわたって高く評価されるだろう。

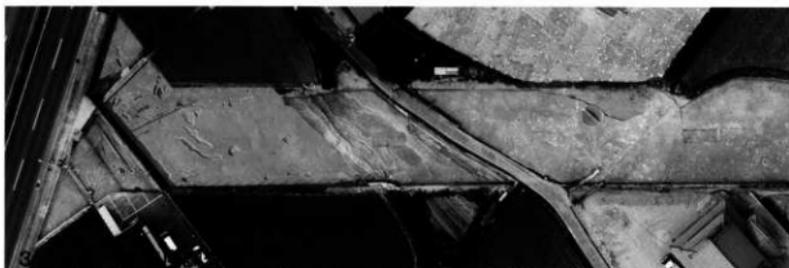
(付記) 資料の番号は本書の挿図番号に対応する。

版 図



井戸2-1出土遺物





2区建物群



2区建物群



3区建物群



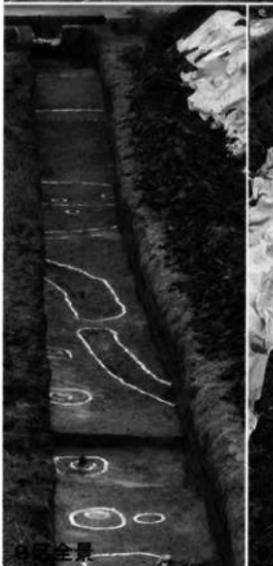
4区全景



5区全景



6区全景



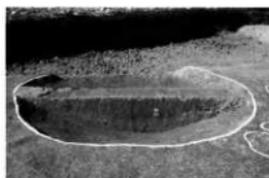
8区全景



9区下層遺構



7区下層遺構全景



井戸3-1検出状況



井戸3-1掘削状況



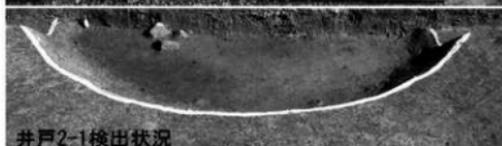
井戸3-1掘削状況



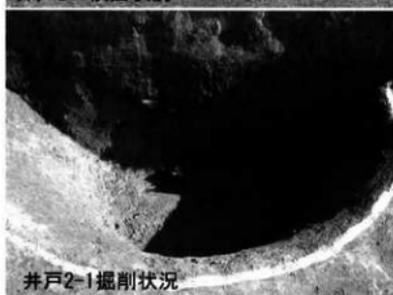
井戸3-1部材



井戸3-1掘削状況



井戸2-1検出状況



井戸2-1掘削状況



井戸2-1掘削状況

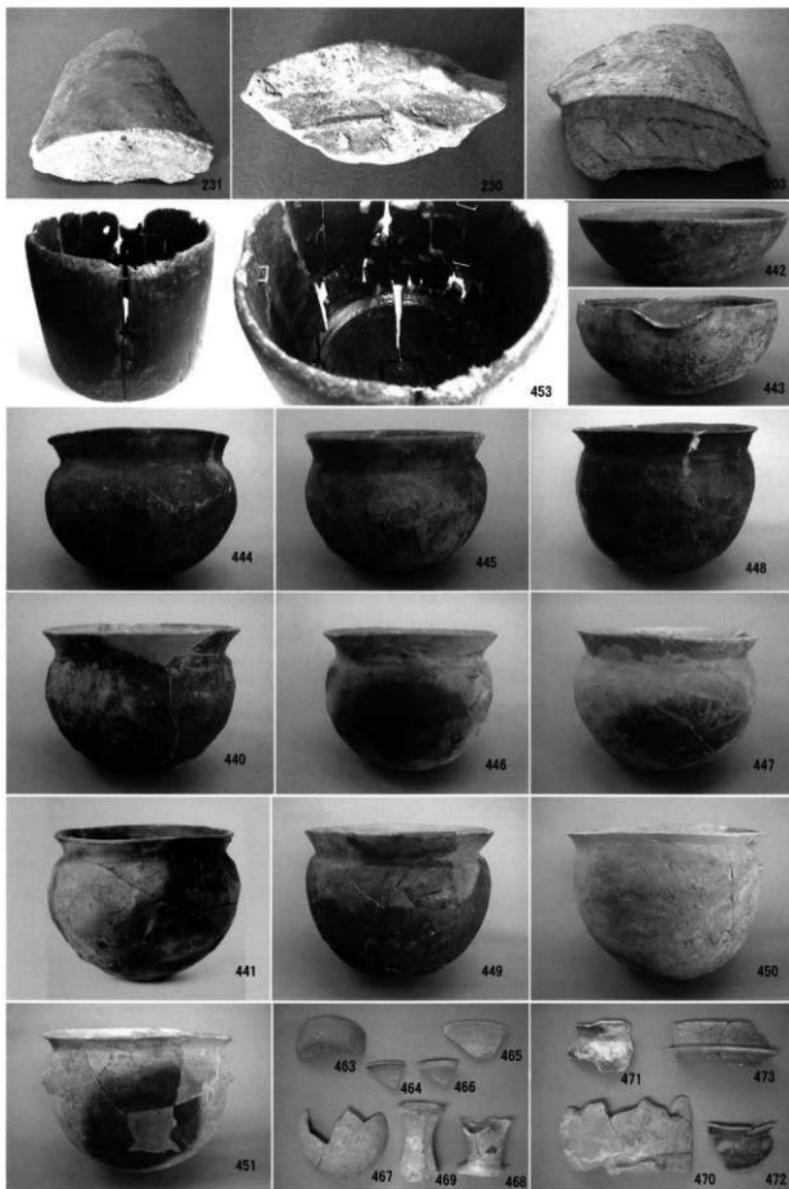


井戸2-1



現地説明会風景









報告書抄録

| | |
|--------|--|
| ふりがな | ひらおいせき |
| 書名 | 平尾遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 大阪府埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 2006-3 |
| 編者名 | 西川寿勝・渡辺晴香・佐々木健太郎 |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会 |
| 所在地 | 〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 Ⅱ06-6941-0351 (代表) |
| 発行年月日 | 2007年3月31日 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 面積(m ²) | 調査原因 |
|------|------------|-------|------|-------------------|--------------------|--|---|------------------------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 平尾遺跡 | 大阪府堺市美原区平尾 | 27147 | 450 | 35度 37分 36秒 | 134度 12分 22秒 | 2002年9月30日～ 2003年2月6日 2003年7月1日～ 2004年3月31日 | 680m ² 5249m ² | 主要地方道堺富田 林線舟渡バイパス 建設工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|---|------------------|--------------------|---|--|
| 平尾遺跡 | 集落 | 飛鳥時代末～ 奈良時代前期 | 独立柱建物 区画溝 井戸 | 須恵器・土師器 瓦・硯・石製丸斬 くり抜き舟形材転用の 井戸枠・ヒノキ板材拵 組みの井戸枠・竈串・ 漆器 | 獣脚円面硯 銀製品鋳造のトリペ 井戸枠を年輪年代法によつて測定した結果、奈良時代前期(704+a年)の伐採年を得た。 |
| 要約 | <p>飛鳥時代から奈良時代の独立柱建物が37棟以上確認された。 発見された遺物は土師器・須恵器などと陶硯・石製丸斬・瓦類がある。土器型式より大半は飛鳥IV・V(平城I段階)で、少量の飛鳥II・III段階、平城II段階のものが含まれる。 建物群はいくつかの区画溝で隔てられ、倉庫と思われる総柱建物を含むものの、大型建物中心に規則的な配列を示すものではない。</p> | | | | |

大阪府埋蔵文化財調査報告 2006-3

平尾遺跡

発行 大阪府教育委員会
〒540-0008
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351(代)

発行日 2007年3月31日

印刷 ㈱近畿印刷センター
〒582-0001
柏原市本郷5丁目6-25

